
.hack//G.U. 【Next Story】

【M * S】

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

hack//G.U.【Next Story】

【Nコード】

N9947V

【作者名】

【M*S】

【あらすじ】

The Worldからすべて消え去ったはずのAIDAが別世界で現れた。

その世界とは、魔法の世界・・・リリカルなのはの世界だった。

The Worldを救った英雄、白い錬装士『ハセヲ』。そして、碑文の鍵を持つ少女『アスラ』。

共に戦った二人の新たな物語が始まる。

hack//G.U.【Next Story】、始まります。

a c c e s s : 0 0 (前 書 き)

登場する、オリキャラの説明です。

access:00

【オリキャラ説明】

PC名 アスラ
本名 あさき 麻鬼 れな 蓮奈
性別 女
年齢 18（ハセヲと同じです）

（これから下は、ゲーム内のこととからです）

職業 錬装士

使用武器 1st 双剣
2nd 大鎌
3rd 大剣
Xth 全て

PCの特徴（物語ではXthフォームです）

- ・髪は紅で、腰まである
- ・目の色は銀

・服装は、黒中心。一言で言えばスバルのバリアジャケットみたいな感じ。胸の辺りは包帯で巻かれていて、腰には紅い文様が刻まれている。下は、マント？みたいのが脹ら脛くらいまであって、ズボンは左は短パンで右は膝まである。左足だけにニーハイを履いている。靴はヒール無しのショートブーツみたいな感じ。

アスラは、ハセヲ達と共にAIDAやクビアと戦った一人。
彼女のPCには”碑文の鍵”が組み込まれていて、第一相から第八相までの鍵がある。

能力は、碑文の力の調整と全てのロストウェポン使用可。

ハセヲと同じくオーヴァンの再誕によってPCを破損し、櫛にXthフォームとしてPCを作ってもらった。

Xthフォームでは全ての武器を使うことができるが、ほとんど今までの武器を使う。

a c c e s s : 0 0 (後書き)

初めまして、【M*S】と申します。

M*Sとは、M y S t o r yの略です。

更新遅くて、内容もつまらないかもしれませんがこれからよろしく
お願いします。

access:01〜プロlogue〜

The World R:2

今はとても平和だが、ここはつい最近まである事件が起こっていた・

そして、その事件を解決したのは8人の”碑文使い”達と1人の少女”

彼等、彼女等も・・・一人のプレイヤーとして今のThe Worldを楽しんでいた・・・

△サーバー

悠久の都「マク・アヌ」

「はぁ・・・」

少年は転送装置である”カオスゲート”である人物を待っていた

「あいつ・・・いつになったら来るんだよ!!」

「ハセヲー!!ごめーん!!」

ハセヲ「遅い!!いつまで待たせるつもりだよ!!」

「だって・・・エンデュランスと朔がなかなか捕まらなかったんだよ・・・」

ハセヲ「あっそ。で、用事って何だ？」

「あ・・・ここじゃ話せないから大聖堂で話すよ」

ハセヲ「分かった、いくぞ」アスラ」

アスラ「うん」

△隠されし 禁断の 聖域
グリーマ・レーヴ大聖堂

ハセヲ「で、用とは？」

アスラ「うん。今、皆の碑文の”鍵”を閉めているんだ」

ハセヲ「なるほどな」

アスラ「特に、スケイスは第1～第5まで全部開けてるから・・・」

ハセヲ「今度は閉めるんだな」

アスラ「また”反存在”を生むわけにはいかないしね」

こんな事を話していると、大聖堂にずっと残っている”サイン”が
光りだした

ハ・ア「「!？」」

光が収まると祭壇に一人の少女がいた

アスラ「ア・・・^{アウラ}Aura!!」

アウラ「お久しぶりです、二人とも」

そこに現れたのは、この世界の女神・・・Auraだった
しかし、彼女の顔はあまりいい顔ではなかった
何か、良くない出来事が起こったかのような・・・そんな顔だった

ハセヲ「アウラ？どうかしたのか？」

アウラ「ええ、実は”AIDA”が別世界に現れました」

ハ・ア「何だって!？」

アウラ「そこで、二人にお願いがあるのです」

アウラによると、私とハセヲがその別世界へ行つてAIDAを倒し
に行つて欲しいという事だった

アスラ「私は別にいいんだけど、その”別世界”へはどうやって行
けばいいの？」

アウラ「そこは私が何とかします」

ハセヲ「なら、他の碑文使い達も呼んできた方が・・・」

アウラ「別世界に行けるのは、今の私の力では二人が限界です」

アスラ「その二人が、私たちか・・・うん、一番良い組み合わせだ
ね」

ハセヲが何故？て顔をしてたから説明した

現在、碑文使いでハセヲ以外はすべて”鍵”を閉めた

そして、ハセヲの憑神は第二相から第八相までをすべて吸収している・・・つまり、完全な存在である

故に、八相のなかでハセヲの憑神は一番力を持っているのだ
そして何故もう一人が私なのかというと、碑文の力を操作する力を持っているからだ

いくらハセヲでも、憑神が暴走しないとは言えない
だから、もし暴走した時に止めれるとしたら私しかないのだ

ハセヲ「なるほどな」

アウラ「お願いできますか？」

アスラ「もちろん！！」

ハセヲ「ああ！！」

アウラ「ありがとうございます」

アスラ「で・・・どうやっていけばいい？」

アウラ「準備はいいのですか？」

ハセヲ「早くしないと、手遅れになる」

アウラ「分かりました・・・二人とも、手をそのサインの所へ置いてください」

アウラの言う通り、トライエッジのサインに手を置く

アウラ「頼みましたよ・・・」

アスラ「あ・・・ねえ、ハセヲ」

ハセヲ「何だ？」

アスラ「リアルの私たちって、どうなるのかな？」

ハセヲ「あ・・・」

アウラ「・・・そこら辺は私に任せてください」

ハ・ア「今の微妙な間は何！？」

その一言を言った瞬間、二人は転送されていった

ここはビルの屋上

そこに、青い短髪の少女とオレンジのツインテールの少女がいた

「スバル、そんなに暴れてるとあんたのおんぼろローラーが壊れるわよ」

スバル「ティア、嫌な事と言わないで」

ティアと呼ばれていた少女は自分の武器の確認を済ませた後、手元の時計を見る

すると、二人の近くにモニターが現れた

そこに映っていたのは、銀色の髪にヘアピンを付けている少女だった

「おはようございます！！試験を受けうる二人は揃っていますか？」

ス・テ「はい！！」

そして画面の少女が試験の説明をしていく

その一方、別の場所である女性が試験会場のチェックを行っていた

>範囲内に生命反応、危険物の反応はありません<

静かな空間の中で電子音が響く

「よし、私たちは全体を見ていよっか」

>Yes , my master<

そして、試験を受ける二人も最終確認を終えていよいよ試験が始まる

ティアナ「Ready・・・Go!!」

ティアナの掛け声とともに二人の試験が始まった

どこかの古びた建物の中

もちろん人はいなくて、とても静かな空間が広がっていた

そこに、何事もなかったかのように人が2人転送されてきた

アスラ「・・・！着いた、のかな？」

ハセヲ「たぶん、な」

そう、女神アウラに転送されてきた二人である
しかし、二人の服装はいつもと同じではなかった

アスラ「り・・・亮!？」

ハセヲ「お前・・・蓮^{れな}奈か!？」

そう、二人の姿はThe Worldの姿ではなく、リアルの姿で
あった

そして、二人に引き寄せられるかのように影は動き出した・・・
物語は、ゆっくり進んでいく・・・

access:02 出会い

スバルとティアナは順調にターゲットを破壊していたが、途中でティアナが足を捻ってしまった

スバル「嫌だ！！私たちはコンビだよ！！」

ティアナ「だから、足手まといだからおいてけって言ってるのよ！！」

二人はそんな会話をずっと続けていた
だが、スバルの頑固さはティアナがよく知ってるので、スバルの作戦で大型オートスフィアの破壊に挑むことにした
しかし、スバルとティアナのターゲットである大型オートスフィアは管理局が用意した物とは違っていた
オートスフィアの周りに黒い泡があふれていた

アスラ「とにかく、ここじゃ何も分かんない・・・」

ハセヲ「おい！あっちに上へ行ける階段がある」

アスラ「分かった、行こう！！」

そして二人は階段を上り、ビルの屋上に立っていた

ハセヲ「何だ・・・この感じ」

アスラ「・・・！ここから約5？先にA I D Aがいる！！」

ハセヲ「周囲に人はいるか？」

アスラ「ごめん、そこは分からない」

《おい！！ハセヲ！！》

ハ・ア「！？」

《俺はお前の”影”だ！！分かったらさっさと俺を呼べ！！》

ハセヲ「お前・・・スケイスか！！」

スケイス《管理人も他の奴を呼べ！！》

アスラ「わ、分かった！！」

ハセヲ「来い、来いよ・・・俺はここにいる！！」

アスラ「来たれ”再誕”！！」

ハセヲ「スケエエイス！！」

アスラ「コルベニク！！」

自分の碑文を呼び、ハセヲ達はThe Worldでの姿になった

ハセヲ「行くぞ、手遅れになる前に！！」

スバルとティアナは目的通り大型オートスフィアの破壊に挑んでいた
その機体から黒い泡が出ていることに気づかないまま・・・

スバル「あれ・・・何か、変？」

ティアナ「スバル！！余計な事考えない！！」

スバル「これで決める！！」

スバルはカートリッジをロードし、大技の準備をする

スバル「デイバイン・・・バスター！！」

本来なら、これで破壊できるはずだった

だが、今の大型オートスフィアは普通じゃない

煙が晴れ、スバルは驚きを隠せなかった

すばる「な・・・何で！？」

大型オートスフィアは無傷でその場にあった

しかし、先ほどとは違い黒い泡があふれている

スバル「そんな・・・」

魔力をかなり消耗したスバルは思わず足の力が抜けてしまう

そして、それを待っていたかのように黒い泡はスバルに襲いかかる

スバル（まずい！やられる！！）

「JUSTICE！！」

「塵球至煉弾！！」

スバルはやられると思って目を反射的につぶった
しかし、黒い泡の攻撃は謎の二人のおかげでいくら待っても来なかった

スバル「・・・あ!!」

スバルが目を開けた時には、黒い泡はもういなかった
かわりに、白い服を着た少年と、黒い服を着た少女が立っていた

アスラ「えっと・・・大丈夫?」

スバル「は、はい」

ハセヲ「アスラ、もういないな?」

アスラ「うん、もともと反応は一つだったから」

ティアナ「スバル!!大丈夫なの!?!」

スバル「ティア!!うん、大丈夫だよ!!」

アスラ「・・・とりあえず、外に出よう」

これが、機動六課とハセヲ達の出会い
戦いの幕開けであつた

「スバル、ティアナ!大丈夫!?!」

茶色い髪の女性が二人の元へ急ぐ

スバル「なのはさん！向こうの二人が、助けてくれたので・・・大丈夫です！！」

なのは「そっか、良かった・・・」

ハセヲ「おい！！いきなり何しやがる！！」

アスラ「ハセヲ、落ち着いて！！」

スバル達を助けた二人は・・・揉めていた話を聞いていると、こっちにスバル達を運んだらいきなり拘束されたかららしい

スバル「フェイトさん、八神さん！！この人たちは私を助けてくれたんです！！」

はやて「分かっとなるよ」

フェイト「でも、もしもの場合があるからね」

アスラ（ハセヲ、耐えなさいよ！）

ハセヲ（・・・努力するさ）

こうして、ハセヲ達は管理局に連れて行かれた
また、スバル達の試験は当然後日改めて行うことになった

access:03 機動六課

はやて「さて、一応自己紹介しとこか」

関西弁で話す女性から自己紹介が始まった

はやて「私は八神はやて、この”機動六課”部隊長や」

アスラ（たぶん、AIDAについて知りたいんだろうね）

ハセヲ（知ってるくな事は無いがな）

なのは「私は高町なのは、よろしく」

フェイト「フェイト・T・ハラOWNです」

アスラ「えっと・・・アスラです」

ハセヲ「・・・ハセヲだ」

今言った名前は二人の本名ではない

アスラは麻鬼蓮奈、ハセヲは三崎亮が本名だ

なぜ本名を言わなかったかというと、言い間違えるからだ
戦闘になるとThe Worldの姿になる

だからいつものようにPC名で呼んでしまう可能性が高いのだ

はやて「早速やけど、本題に入らせてもらうで？」

はやてからの話はいたってシンプルなものだった

要は機動六課に入って欲しいということだった

なぜなら、私たちしかAIDAの倒し方を知らないから

ハセヲ「先に言うておくが、お前等にAIDAは倒せない」

なのは「そんなの、やってみないと分かんないよ!!」

アスラ「なのは、さんでしたっけ？今ハセヲが言ったことは本当です」

はやて「何でか、説明してもらえるやろうか？」

ハセヲ「説明したって意味無いんだけど？」

アスラ「ハセヲはちょっと黙ってて」

ハセヲ「はいはい」

アスラ「AIDAを倒すには特別な力が必要なんです」

ハセヲ「その特別な力を持っている奴を”碑文使い”って言う」

アスラ「ハセヲもちろん碑文使いですけど」

フェイト「アスラは？」

アスラ「私は違います。私は”管理人”です」

三人の頭にたくさん？マークが浮かんでいる
どう説明しようか迷っているとある声がいきなり現れた

スケイス《おい、ハセヲ！さっさとここから出せ！！》

ハ・ア「スケイス！！」

スケイス《ハセヲ、たぶんお前の服のポケットの中に入ってる》

ハセヲ「ポケット？・・・これか！！」

ハセヲのポケットから出てきた物

それはハセヲのロストウェポン、”死を刻む影”を小さくした鎌が付いているストラップだった

ハセヲ「これか？」

スケイス《それぞれ！んじゃ、その鎌にちょっと力を入れてみ？》

ハセヲ「？分かった」

スケイスに言われたとおりに力を注ぐ

するとストラップから赤い光が溢れだした

光が収まった後、ハセヲ達がいる部屋に謎の男がいた

「ああー！窮屈だったぜ！！」

ハセヲ「お前・・・スケイスか？」

スケイス「ああ！つと、それより！」

スケイスはアスラの元へ行く

スケイス「管理人よお、無茶してんじゃねーよ・・・」

スケイスが呟いたと同時にアスラは倒れ込んだ
もちろん、こうなることが分かっていたスケイスが受け止めるが

はやて「アスラちゃん!？」

スケイス「心配すんな、ただ疲れて意識がとんでるだけだ・・・医務室とかあつたら案内してくれ」

フェイト「あ、私が行くよ」

そういつてフェイトはスケイスを医務室へと案内していった

ハセヲ「さて、これは無理矢理俺が説明役か・・・面倒くせえ」

はやて「悪いけど、お願いするわ」

ハセヲ「まず、A I D Aは人の負の感情を増幅させる力がある」

はやての隣にいるなのはもよく分かっていない様子
一番は見た方が早いのだが、それまで待つわけにはいかないし、危険だ

ハセヲ「人は誰でも負の感情・・・心の闇がある。で、A I D Aはその負の感情を増幅させて、暴れ回るって事」

なのは「でも、この前は機械に取り付いていたよね？」

ハセヲの今の説明では、人にしか取り付かないような説明だ

ハセヲ「何というか・・・様子見？とでも言えればいいのか？」

AIDAをよく知っているはずのハセヲも思わず考えてしまう

はやて「ま、それより」

ハ・な「これより大事な事って何だよ！！／何！？」

はやて「ハセヲ君、うちの仲間になってもらえんか？」

ハセヲ「・・・個人的には断る。だが、最終的な決定はアスラに任せる・・・今は、これしか言えねえ」

はやて「そうなんか？私はあくまでハセヲ君個人に聞いたんやけど？」

ハセヲ「あいつがいねえと俺が暴走したとき止めれる奴がいねえんだよ」

そんなことを話している間にスケイスが帰ってきた

ハセヲ「早かったな」

スケイス「ちなみに、機動六課だっけ？アスラは協力するだって」

ハセヲは驚き、はやてはうれしそうな顔をしていた

ちなみに、時間が経つと共にハセヲの顔はどんどん歪んでいった

スケイスはハセヲが今聞きたいことを分かっているためハセヲに答

える

スケイス「管理人からの伝言。こつちの世界については俺達をよく知らない。かわりにAIDAについてはプロだ。だったら、協力した方が効率いいだろ？なあ、部隊長さん？」

はやて「もちろん、生活に関することはこつちに任せて」

スケイス「よし、決まりだな」

こうして、ハセヲ、アスラの機動六課入隊は確定した

夜、ハセヲはアスラに一応報告するため医務室にいた
医務室にいたシャマルに挨拶をして、アスラの寝ている所を教えてもらった

シャマル「ここよ、って・・・起きてたの？」

アスラ「はい、今さっきですけど」

ハセヲ「機動六課の入隊が確定した」

アスラ「そっかー、これで生活面は安心だ！」

どうかな？と、ハセヲは話を続ける

ハセヲ「この前助けた二人いただろ？あの時、二人の試験だったんだと」

アスラ「それで？」

ハセヲ「で、俺達もその試験を受けることになった」

ええー！めんどくさいー！！

アスラは足をバタバタさせる

埃が舞い、二人ともむせる

ハセヲ「げほっ・・・とりあえず、明日高町なのはって人から説明があるってよ」

アスラ「分かったー！それじゃ、明日は頑張りますか」

明日試験があることを告げ、ハセヲは医務室を後にした

a c c e s s : 0 3 機動六課 (後書き)

第三話です。

今回、というかずっとですがセリフばかりですね・・・
本当にすみません

たぶん、次回もセリフ多めになると思います
こんな小説ですが、読んでいくくださる方がいて本当につれい
です！！

ありがとうございます。

次回も早めに更新します！！
では、また次回お会いしましょう。

access:04〜試験〜

朝、昨日ハセヲが言った通りなのはアスラとハセヲに試験の説明をしていた

なのは「えっと、二人はスバル達の後にやってもらうから、見て分らないこととかあったら遠慮しないで聞いてね？」

それじゃ、そろそろ時間だから行こうか？

そうなのはが言った後、なのはと共にハセヲ達は試験会場へ向かった

一方スバル達は前回と同じ失敗をしないようにぎりぎりまで作戦の確認をしていた

ティアナ「・・・時間ね。スバル！今度は気を抜かないのよ！！」

スバル「うん！・・・Ready・・・」

ス・テ「Go！！」

こうして、二人の再試験が始まった

なのは「試験前に悪いんだけど、AIDAがいないか確認してくれない？」

アスラ「それなら大丈夫です。ずっと見ているけど、碑文も反応していないんで」

ハセヲとアスラは、なのはと一緒にスタート地点でスバル達の試験をモニターで見ていた

今はちょうど、前回破壊できなかった大型オートスフィアの破壊に挑んでいる

見ている限り、今回は何事もなく終わりそうだ

なのは「さて、そろそろ二人の試験も始めるけど、準備は万全？」

アスラ「はい」

ハセヲ「ま、元々準備しないといけねえ物なんてないけど」

なのは「あーちょうど終わったね」

その言葉と共に二人は戦闘体制をとる

なのは「それじゃ、R e a d y . . . G o ! !」

そして二人はターゲットの元へ走り出した

なのは「さて、お手並み拝見だね」

フェイト「あ、始まったよ！はやてー！」

はやて「そやね、お手並み拝見や！」

モニターでは二人はターゲットの近くまで来ていた

はやて「さて、どう切り抜ける？」

アスラ「さて、ターゲットの破壊はハセヲに任せるよ」

ハセヲ「分かった」

一言交わすだけで二人の作戦は決まった
あとは、実行するだけ

ビルの屋上からターゲットとスフィアがいるビルへ飛び込んでいく
アスラの手には鎌、ハセヲの手には双銃が握られていた

ダダダダダッ！！

ハセヲの双銃から出た弾はすべてターゲットに当たる

ハセヲ「よし、アスラ！いいぞ！！」

ハセヲからアーツ使用可の合図を聞き、アスラは鎌を周りに集まってきた小型スフィアを一撃で破壊できるアーツを唱える

アスラ「蒼天大車輪！！」

円陣で浮かせた小型スフィアを何度も斬り、周りにいたスフィアも同時に破壊される

そして、周辺にいたスフィアは全滅した
ここまでの作業を約10分ちよい
このスピードは異常だ

残す敵もあの大型オートスフィアだけだ

アスラ「うーん、まあまあ良いタイムなのかな？」

ハセヲ「それより、さっさと終わらせるぞ」

ハセヲがターゲットの方へ走り出したのでアスラもその後を追いかける

すると、砲撃が二人を襲った
大型オートスフィアの攻撃だ

ハセヲ「あの周辺にターゲットはない・・・二人で行って、さっさと破壊しようぜ」

アスラ「うん、その方が早いよね」

モニターで見ていたすべての人が驚きを隠せなかった

二人のタイムが異常なほど早いのだ

戦闘時間が移動時間より短いということも驚いている理由の一つだった

なのは「無駄な動きが一つもない・・・」

フェイト「それに、とても良いコンビだね」

はやて「これじゃ、最終関門もあっという間に突破やなー」

なのは「はやてちゃん・・・もう、終わっちゃった」

は・フ「ええ!？」

最終関門の大型オートスフィアはハセヲとアスラの最強アーツによつて簡単に破壊された

ハセヲ「JUSTICE!!」

アスラ「環伐乱絶閃!!」

一息おいて、二人は最後のターゲットの位置を確認する

ハセヲ「あとはゴール前だけだ」

アスラ「よし!ちゃっちゃと終わらせー!!」

それから数分後、すべてのターゲットを破壊し試験は終了した

もちろん二人の結果は合格で、機動六課ではフォワードメンバーとして働くことになった

access:04〜試験〜(後書き)

次回からキャラとの対話コーナーみたいなのを始めようと思っています。

今日、機動六課の活動が始まった

ハセヲとアスラは一足先に、訓練場に来ていた

ハセヲ「訓練場って言っても、何もないぞ？」

アスラ「さあ？ま、とりあえず広いからおもいつきり訓練できるよ
！！」

面倒くせえとハセヲはアスラに聞こえない声で呟く
すると、なのはとフォアードメンバーの四人も訓練場に来た

なのは「二人とも、この子達がフォアードメンバーだよ」

スバル「初めまして？スバル・ナカジマです」

ティアナ「ティアナ・ランスターよ」

「エリオ・モンディアルです」

「キャロ・ル・ルシエです」

フォアード陣から一人ずつ自己紹介をされる

アスラ「アスラです！私はなのはさんの部隊なので”スターズ”の
人と一緒にす！！」

ハセヲ「ハセヲだ。俺は”ライトニング”の方だそうだ」

自己紹介も終わり、なのはがハセヲ達以外のデバイスについて説明をする

なのは「ま、ハセヲ達には関係ないけど・・・アスラなんてデバイスらしき物もないからね」

アスラ「あはは・・・」

説明も終わり、訓練を始めようとするのはだが、皆ここで？みたいな顔をしている

シャーリーがなのはに頼まれて、訓練場を作っていく

シャーリー「よし！ステージ、セット！！」

シャーリーの言葉とともに海面からビルが現れた
皆驚きを隠せないでいる

ハセヲ「魔法って、本当何でもありだな」

アスラ「この世界のは特にすごいよ・・・」

そんなことを言いながら皆訓練を行うところまで移動する

なのは「じゃ、早速ターゲットを出していこうか」

すると、目の前に小型の機械が八体現れた
これは近づくと攻撃してくるらしい

なのは「じゃあ、第一回模擬戦訓練・・・ミッション、逃亡するタ

ーゲットを破壊、または捕獲・・・15分以内に」

シャーリー「それでは、ミッション・・・スタート!!」

フォアード達は小型機械・・・通称ガジェット・ドローンに手こずっていた

スバルは先ほど空中から攻撃を試みたが、ガジェット達に逃げられてしまった

エリオも斬撃を飛ばすが、これもあつさり避けられる

ティアナはキャロに威力強化の魔法で威力が上がった魔力弾を撃つが、ガジェットの特殊なバリアで魔力弾自体が消されてしまった

ティアナ「バリア!？」

キャロ「違います、フィールド系!」

スバル「魔力が消された!？」

なのは「そう、ガジェット・ドローンにはちよつと厄介な性質がある・・・攻撃魔力をかき消す”Anti Magic Link-Field”、AMF。普通の射撃は通じないし、それにAMFを全開にされると・・・」

魔法が消されると分かったはずだが、スバルはウイングロードでガジェットを追いかけようとする

もちろん、ティアナは止めようとするのだが、スバルが止まるわけもなく・・・

AMFによってウイングロードはかき消され、スバルはバランスを

崩してビルへと飛んでいく

なのは「飛翔や足場作り、機動系の魔法の発動も困難になる・・・スバル、大丈夫？」

スバル「いつつ・・・何とか」

シャーリーによると、目の前にいるガジェットはスバル達のデバイスから疑似的に作り出した物らしい
しかも、本物からデータをとっているため本物にそっくりだとシャーリーは言っていた

なのは「対抗する方法はいくつかあるよ。どうすればいいか、素早く考えて、素早く動いて！」

ハセヲ「よし、試してみるか！」

ティアナ「何か、あるの？」

アスラ「よし！私も一つやってみますか！..」

ティアナとキャロも何かあるらしい
二人で相談している

ティアナとキヤロが作戦をスバルとエリオに伝えている間に、ハセヲとアスラは動き出した

ハセヲ「アスラ、移動速度を上げる魔法・・・頼んだ！」

アスラ「任せて！・・・」ラプドウ”！！”

今、アスラは第四相のロストウェポン・・・”其八声預カル者”を装備している

第四相のロストウェポンは妖扇で、攻撃もできるしサポート魔法も使える

ちなみにラプドウの効果は味方全員の移動速度を25%アップさせるだ

The Worldではパーティー最大人数の三人が対象だったが、ここでは味方なら何人でも良いみたいだ

ティアナ「アスラ、今の魔法は？」

ティアナから念話が届く

二人とも、ティアナから距離が離れているからだ

アスラ達の目の前に、もうガジェットがいる

アスラ「移動速度を上げる魔法です。フォアードの皆にかかっていきます」

ティアナ「助かるわ」

ハセヲ「よし、追いついた！アスラ、やるぞ！！」

ハセヲ「J U D G M E N T ! ! !」

ハセヲはダブルトリガーでの追撃をした
その追撃で周りにいたガジェットがほんの一瞬動きが止まる
その一瞬止まっていたときに・・・

アスラ「ガンボルク!!」

土塊をガジェットがいる場所へ落とす
ガンボルクはそこまでダメージは大きくないが、目の前にいるガジェットぐらいならガンボルクで十分だ

なのは「二人とも、正解!」

なのはから通信が入る

ハセヲ「魔法が駄目なら、物理攻撃でいけば良い話だからな」

ちなみに、今ハセヲとアスラがガジェットを半分潰してしまったため、残りのフォードメンバーの負担が軽くなった

アスラ《ガジェット、八体のうち四体を破壊。残り四体だよ》

ティアナ《分かった。残りは私たちがやるわ》

ティアナ《皆！アスラ達が頑張ってくれたから、後四体よ！！しっかりやるわよ！！》

三人《はい！／分かった！！／分かりました！！》

まず最初にエリオが橋を壊しガジェットの動きを封じる

上へ飛んでいったガジェットを一体スバルが破壊する

橋の下にいたガジェット二体はフリードのプラスチックフレアで炎に囲まれ動きが鈍っている間にキャロがバインドで二体捕獲する

残りの一体はティアナのヴァリアブルシュートで破壊される

弾の外側にAMFを突破する外殻の膜状バリアでくるんだ多重弾殻射撃

これで、すべてのガジェットを破壊・あるいは捕獲を完了し、訓練は終了した

フェイト「新人達、手ごたえはどう？」

なのは「みんな元気で良い感じ♪」

フェイト「そう」

なのは「特にハセヲとアスラにはビックリ！今日ガジェットを簡単に破壊してたよ」

フェイト「本当に？」

なのは「うん、二人とも戦い慣れているって感じだったな」

フェイト「ハセヲ達も含めて、みんな立派に育ってくれると良いね」

なのは「育てるよ・・・あの子達がちゃんと自分の道を戦っていけるように、ね・・・」

access:05 集結 (後書き)

作者「はい！第五話です！！お待たせしました！！」

ハセヲ「遅せえ！！」

作者「待つて、ハセヲ！今はそんなことをしている場合じゃないよ！？」

アスラ「ハセヲ、これ以上暴れるなら・・・志乃、呼ぶよ？」

ハセヲ「すみません」

作者「それより！こんな小説をお気に入りに登録してくださった方が二人もいるんだ！！」

アスラ「本当！？登録して下さった方、ありがとうございます」

作者「さて、第一回のキャラ対話はこの辺にしておこう！これからこんな感じのコーナーをやっていくのでこちらもよろしくお願いします」

ハセヲ「誤字とかあったら教えてくれるとありがたい」

作者「ではまた！！」

access:06 ある日の争い

アスラside

皆さん、おはようございます・こんにちは・こんばんは
The Worldから別世界へ転送されたアスラです
実は今、ヴィータ副隊長とシグナム副隊長に模擬戦を申し込まれて
います

何故、こんな事になったか説明しますね

ー今朝ー

アスラ「やっと朝練終わったよー!!」

ヴィータ「おい、ハセヲとアスラいるか？」

ハセヲ「何だよ」

アスラ「何ですか？」

ヴィータ「ちょっと話がある、こっち来てくれ」

ヴィータ副隊長の後についていたら、そこにはシグナム副隊長も
いたのです！

本当、いきなりでびっくり

ハセヲ「で、話って何だよ？」

ヴィータ「あたし達にAIDAは倒せないってどういうことだよ！
！」

シグナム「詳しく教えてもらいたいのだが」

ハセヲ「はぁ・・・そのままの意味だよ、チビ」

ブチッ

さっきの効果音で分かったと思いますが、ヴィータ副隊長がキレました

ハセヲの暴言によって

ヴィータ「誰がチビだ！！あたしはお前より年上だぞ！！」

ハセヲ「その形でか？ありえねえw」

シグナム「アスラ、本当の所はどうなんだ？」

アスラ「はつきり言いますと、ここにいる皆さんの実力では傷一つ付けられないんですよ」

シグナム「それは、やってみなければ」「やってみてやられたら、どうするつもりですか？」・・・」

アスラ「せめて、ハセヲと同じくらいは強くなってもらわないと」

アスラ「!!!」・・・何？」

ハセヲ「あのチビ、何度言っても戦えるって言いきるからよ!」

ヴィータ「模擬戦で、勝った方が正しいって認めるってのを条件にして、あたしと模擬戦だ!!」

アスラ「は、はい!？」

ヴィータ「シグナムもやるか？」

ハセヲ「相手はアスラだから、勝ちたいなら二対一の方が勝つ確率がちよびつと上がるぜw」

シグナム「そうだな・・・折角だ、我らの实力を見てもらおう」

ハセヲ「この際だから、軽く叩きのめせ!」

アスラ「私に拒否権は無いのね」

で、現在に至る

ハセヲとヴィータの口喧嘩が原因の模擬戦は強制的に行われることになりました

面倒くさいよお・・・

s i d e o u t

食堂では、フォアードメンバーとなのは、フェイト、シャーリーがいた
特にフォアードの皆はハセヲ達が帰ってきていないので少し心配している

なのは「そういえば、エリオ。ハセヲとは仲良くなれた？」

エリオ「はい！とても優しい方でした！！」

なのは「スバルとティアナはどう？」

スバル「すごく明るい子です！！」

ティアナ「よくいろいろ戦闘について聞いています」

なのは「キャラはハセヲ達と仲良くできてる？」

キャラ「はい！二人とも優しくて、頼れる兄さん・姉さんみたいな

感じですよ!!」

なのは「そう、みんな上手く接しているんだね」

ハセヲはエリオと同室で、アスラはスバル達と同室である
同じ仲間としてきちんと交流できているみたいだ

エリオはハセヲのことをハセヲ兄さん、アスラのことをアスラ姉さんと呼んでいる

キヤロはハセヲ兄ちゃん、アスラお姉ちゃんと呼んでいる

二人は特にライトニングの二人に好かれている

のんびり食事を楽しんでいるとはやてから通信がきた

はやて「なのはちゃん、そこにフォアードの子達みんないる?」

なのは「いるけど・・・何かあったの?」

なのは「ちょっとみんなに見せたいものがあるんや。今から訓練場、来れる?」

なのは「うん、全然いいよ」

フォアード『はい!!』

はやて「そんじゃ、待ってるな」

訓練場ではヴィータ、シグナムが準備万端の状態でアスラを見ていた
一方、アスラは泣きそうな顔で・・・というか、体育座りをしながら泣いていた

アスラ「うつ・・・やっぱ、り、わだしはっ、コントロールできないから、駄目なんだってば・・・」

もう、鼻水まで出しながら泣いていた

その理由が”手加減できない”だそうだ

ヴィータ達や機動六課は知らないが、アスラはThe Worldでハセヲと同じくらい有名なPKKだったのだ

しかも、通り名が”破壊者”や”終焉を創る者”とか一番知られていたのが”血に染まる者”だった

とにかく、やばい通り名が付いているのだ

また、アスラは3rdフォームにする時PKKをやめた

彼女は模擬戦で二人をPK（大怪我）させないか心配なのである

ハセヲ《いざって時は俺がとめるからよ！！》

ハセヲから心配するなと念和が届く

しかし、そんなこと言われてもアスラの不安は消えなかった

はやて「さて、観客もそろたし、模擬戦を始めるで！！」

アスラがうじうじ考えている間にフォアードメンバー達が揃ったようだ

なのは「今から行っ模擬戦はきつと役に立つから、よく見ていてね？」

フォアード『はい！！』

はやて「それじゃ、ヴィータ&シグナム対アスラ・・・R

eady、Go!!」

そして、はやてのかけ声とともに模擬戦は始まった

ヴィータ「いつまでも泣いてねえで、ちゃんと戦えよ!!」

アスラ「大丈夫、そこら辺の切り替えはちゃんとするし、ね!!」

ヴィータのアイゼンと双剣光式・忍冬がぶつかる

アスラのレベルではもっと強い武器を装備できるのだが、今までハセラ達と戦っているときずっと忍冬を使っていたため、今も忍冬を使っている

アスラ愛用の武器だ

シグナム「紫電、一閃!!」

シグナムの攻撃がアスラの後ろから来る

アスラの手はヴィータのデバイスを防いでいるため両手が使えない

シグナム「はあああっ!!」

そして、レヴァンティンをそのまま振り下ろす
だが、その前に

アスラ「レイザス!!」

アスラがシグナムに攻撃していた
つまり、シグナムが斬ったのはアスラが魔法で出した光の矢だった

アスラ「一雙燕返し!!」

次の攻撃はヴィータへと向けられる

ヴィータは先ほどのやり取りを見て、一瞬ぼーっとしていたのだ
その一瞬をアスラは見逃さず、攻撃に移った

シグナム「我ら相手にここまでやるか」

ヴィータ「なかなかやるな!!」

アスラ「そりゃどーも」

そんな会話をしながらアスラは次の攻撃に移る

双剣士は移動速度が速く、攻撃スピードも速い

一撃一撃の攻撃力はあまりないが、連続攻撃で相手に攻撃できる
チャンスを作らせないことができる

その速さを生かしてアスラは瞬時にヴィータの懐に入る

ヴィータ「速い!!」

アスラ「天下無双飯綱舞い!!」

双剣最大の攻撃力のあるアーツでヴィータを戦闘不能にさせよう
とする

しかし、そこは副隊長

即座にバリアを張り、攻撃力を少しだけ落とした

アスラ「さすがです・・・ね!!」

シグナムの攻撃を避けながらヴィータに話しかける

アスラ「どうします？やめますか？」

ヴィータ「！？・・・まだまだ、これからだ！！」

ですよね・・・とアスラは少し落ち込む

多人数対一人は慣れているが、手加減は慣れていないアスラ
シグナムとヴィータに苦戦中でした

アスラ「よし！変えよう！！」

そう言つて、アスラは双剣をしまう

ハセヲ以外は武器をしまったことに驚いている

シグナム「どういふつもり・・・！？」

アスラは武器をしまったかと思えば別の新しい武器を取り出した
今度は魔典だ

ちなみに、この魔典はロストウェポンではなく普通の魔典である

アスラ「燃え尽きる・・・オルバクドーン！！」

シグナムとヴィータの上から巨大火球が落ちてくる

この魔法にもハセヲ以外全員驚いていた

炎に飲み込まれた二人は何とか抜け出す
だが、防御にかなりの魔力を消費し肩で息をしている

アスラ「さて、次で終わりにしますね」

アスラの言葉を聞いて、二人は残りの力を振り絞って構える

アスラ「飲み込め、水龍・・・オルリウクルズ!!」

詠唱が終わった時、シグナムとヴィータは水龍に飲み込まれた

模擬戦の後、アスラは医務室に来ていた

それはシグナム、ヴィータの治療をするため

アスラ「我が手に癒しの力を・・・リプス」

二人の体を薄い翠の光が包み込む
優しく、そつと・・・

アスラ「次からはハセヲに頼んで下さいね。彼との戦闘の方が現実

感があるので」

アスラはそれだけ言って、医務室を出ていった

これは、ほんの些細な出来事の一部

そしてアスラは誰よりもこの平凡な時間を失う辛さを知っている
だから、今日の模擬戦の相手は自分でよかったなと思っていた
自分なら、相手の意志の甘さを伝えることができるから・・・
理解してくれたと信じて、アスラは自分の部屋へと帰っていった

access:06ある日の争い(後書き)

作者「はい！第二回、キャラ対談です！！」

アスラ「今日はエリオとキャラとお話するよ！」

二人『よろしく願いします』

作者「ところでさ、エリオとキャラはハセヲ達のことを何であんな風に呼ぶの？」

エリオ「二人とも強くてたくましくて」

キャラ「隣にいと落ち着くんです」

アスラ「二人とも、本当いい子だよ！！」

二人『ありがとうございます！！』

作者「さあ、今回はこの和やかな雰囲気のままお別れです」

アスラ「ここまで見て下さっている方、本当にありがとうございます」

エリオ「感想や、意見があれば遠慮なく言ってもらえるとありがたいです」

キャラ「これからもよろしくお願いします！！」

access：07〜ファースト・アラート〜

アスラとシグナム、ヴィータの模擬戦があつた次の日の早朝
フォアード陣は早朝訓練をやっていた

今朝の最後の訓練はなのはの攻撃を5分間避けるか、なのはにクリ
ーンヒットを入れて終了だった

ティアナ「皆、絶対回避！2分以内に決めるわよ！！」

『おう！！』

ちなみに、ハセヲとアスラはこの訓練には参加していない
なぜなら、二人が入ると一瞬で終わってしまうからだ

最後の訓練が終わるまで、ハセヲとアスラはプチ会議を開いていた

アスラ「今から話すことは”亮”に關係のある話だよ」

ハセヲ「なら”蓮奈”も關係あるのか・・・」

アスラ「今、リアルの私等はこちらにいる。なら、向こうの私等はど
うなっていると思う？」

ハセヲ「存在自体が消えているか、未帰還者って所じゃないか？」

「その心配はありません」

ハ・ア「ア、アウラ!？」

アウラ「お久しぶりです」

アウラは当たり前のように二人の前に現れた

アウラ「二人のリアルは私がちゃんと対策を取っているので大丈夫です」

ハセヲ「おい、アウラ。どうしてここにいる？」

アウラ「アスラを通じて”次元の扉”を開きました」

ハ・ア「次元の扉？」

アウラ「次元の扉とは、この世界とThe Worldを繋ぐことができる扉です」

アスラ「私に、そんな力があつたの!？」

アウラ「これも『ハセヲ!!アスラ!!』あら？」

アウラが現れた所から今度は見慣れた顔が出てきた

「ハセヲさん!ご無事でしたか!？」

ハセヲ「アトリ!？」

「アスラも無事でよかったよ」

アスラ「クーンー!!」

はい、アトリとクーンもやって来ましたー!!
碑文が三つも揃っちゃった

アウラ「感動の再会中悪いですが、皆さん帰りますよ」

ア・ク「もう!?!」

アウラ「あなた方がこちらの世界に来るのはまだ先です」

アトリとクーンは納得の行かないようだ

アトリ「ハセヲさん、The Worldは私たちがしっかり守りますから・・・ハセヲさんはこつちの世界で頑張って下さい!!」

クーン「アスラも!ハセヲより強いから心配はないけど、AIDAとかはハセヲに任せて無理しないでくれよ?」

ハセヲ「ああ!!」

アスラ「分かってる!!」

少し心寂しいが二人と一言だけ会話をする

アウラ「アスラ、いつか次元の扉を開くときが来ます。その時は、八相達の「分かっています」・・・そうですか」

アウラは最後にそれだけ伝えて、The Worldへ帰っていった

アスラ「・・・よし、これからも頼むよ亮^{ハセヲ}!!」

ハセヲ「お前もな、蓮奈^{アスラ}!!」

話し合いが終わったと同時に、早朝訓練も終わった

ここはデバイスルーム

今、フォアードみんなの新しいデバイスについてシャーリーから簡単な説明を受けている

シャーリー「で、これはアスラさんのです!!」

シャーリーからアスラもデバイスを貰う

アスラ「これは？」

シャーリー「スケイスさんが一緒に手伝ってくれたんですよ!」

ハセヲ「スケイス!? お前いつの間にそんな事してたんだよ?」

スケイスのことをよく知っているハセヲは驚きを隠せない
ま、アスラもだけど

スケイス「管理人のロストウェポン装備時の負担を減らす為に作ってもらった」

シャーリー「スケイスさんの言うロストウェポンと、アスラさんオリジナルの武器も入れていますから、訓練の時にでも確認しておいてください」

アスラ「あ、ありがとうございます」

アスラのデバイスの待機状態は、愛用の武器”忍冬”を小さくした物をネックレスに通している物だった

シャーリー「あと魔力がただ漏れで、こっちに不都合があるので、デバイスに出力リミッターも付けています。全部で10段階に分けています」

ハセヲ「俺は平気なのか？」

スケイス「お前は俺がリミッターをかけておくから心配ない」

いろいろ一段落した時になのはがやってきた

なのは「ごめんシャーリー、遅かった？」

シャーリー「ナイスタイミングです、なのはさん！！」

そして、なのはを加えて詳しく説明を始めていく
今はそれぞれの出力リミッターについての説明だ

ティアナ「そういえば、出力リミッターってなのはさん達にもかかっているんですね？」

なのは「私たちはデバイスだけじゃなくて、本人もだけど」

フォアード達は本人にもリミッターがかかっていると知って驚いている

ハセヲ「へえー、お前等も大変だな」

なのは「ハセヲ、自分にリミッターがついてるの……知らないの？」

アスラ「なら、私もですか？」

なのは「機動六課の中で一番リミッターをかけているのはハセヲとアスラなんだよ？」

ハセヲ「ふーん……あんまりよく分かんねえけど」

アスラ「特に、不自由はないですね」

二人の発言になのはも驚く

なのは「二人は一応、スバル達と同じBランクにはしているんだけど……」

フォアード「ええっ！？あれでBランク！？」

まあ、皆さん落ち着こうよ

そんな言葉が必要なくらい皆驚いていた

そもそも、ハセヲとアスラはThe Worldで魔法系の職業で
はなかったのだ、あまり魔力は関係ないのだ

また、ハセヲ達のリミッターは管理局のリミッターとは異なるため、

なのは達と違って自分で好きなときに解除することができる
隊長達やハセヲ、アスラの事について話していると、出来れば聞き
たくない音になり始めた

ブーッ！、ブーッ！、ブーッ！・・・

スバル「このアラートって！！」

エリオ「一級警戒体制！？」

通信で話を聞くと、教会本部からの出動要請だった
はやてが詳しい内容を説明する

はやて「いきなりハードな初出動や！スバル達フォアードの子達も
OKか？」

『はい！！』

ハセヲ「そつちにAIDA反応はあるか？」

はやて「それが分からんのよ・・・ハセヲ、アスラ！二人共、フォ
アードの子達を頼むで！！」

ハセヲ「任せろ！！」

アスラ「A I D Aの戦滅は私たちの仕事です!!」

はやて「ほんなら・・・機動六課フォアード部隊、出動!!」

『はい!!』

こうして、初任務が始まった

ヘリの中

なのははみんなに任務について簡単におさらいしていた

なのは「新デバイスでぶつつけ本番になっちゃったけど、危ないときは私やフェイト隊長・・・ハセヲやアスラがフォローするから、大丈夫だよ!!」

ハセヲ「もし、A I D Aが現れたらすぐに俺達に知らせろ」

アスラ「すぐに私かハセヲがそっちに行くから」

『はい!!』

ハセヲ「アスラ、お前のデバイスも大丈夫なのか？」

アスラ「うん、私も大丈夫だよ」

なのはは空にいるガジェットを倒しに行った
フェイトも一緒に空を抑えるようだ

ヴァイス「さて、ハセヲ！アスラ！新人どもは任せたぞ！！」

アスラ「はい！」

ハセヲ「分かった」

ヴァイス「さーて新人ども、隊長さん等が空を抑えてくれてるお陰で安全無事に降下ポイントに到着だ。準備はいいか！？」

『はい！！』

スバル「スターズ3、スバル・ナカジマ」

ティアナ「スターズ4、ティアナ・ランスター」

アスラ「スターズ5、アスラ」

『行きます！！』

スターズの三人はヘリから飛び降りて行った

ヴァイス「次、ライティング！！」

キャロ「……………」

エリオ「一緒に降りよっか？」

キャロ「えっ？」

ハセヲ「キャロ、お前の力はみんなを守る力……力の暴走とか気

にしないで、おもいつきりやれよな」

キャラ「はい!!・・・エリオ君!!」

キャラはエリオの手をしっかりと握る

エリオ「ライティング3、エリオ・モンディアル」

キャラ「ライティング4、キャラ・ル・ルシエとフリードリヒ」

ハセヲ「ライティング5、ハセヲ」

『行きます!!／行くぞ!!』

ライティングの三人もヘリから降りていった

ーアスラ側ー

アスラ「さて、二人共ミッションを始めるよ」

新しいバリアジャケットに感激しているスバルとティアナに一言かける

アスラ「気を抜くと・・・」

三人の足元にガジェットの攻撃がくる

アスラ「”忍冬”!!」

忍冬 了解。双剣、セツト

アスラの手にはいつもの双剣が握られる
愛用の忍冬である

下からガジェットの攻撃が来て、スバルとアスラは内部、ティアナは外にいるガジェットを攻撃する

アスラ「さて、ハセヲ達の方はどうなっているかな？」

ーハセヲ側ー

ハセヲ達は七両目まで来ていた
ここまでは至って順調

しかし、はやてから嫌な知らせが届いた

ハセヲ「この先に、A I D A 反応！？ スケイス！！」

スケイス この先の新型ガジェットの周りを囲むようにA n n a が
10〜20体いる

ハセヲ「そんなに！？ ちっ・・・エリオ、キャロ！！」

エリオ「何かあったんですか？」

ハセヲ「A I D A だ。数が半端ないくらいいるから、この先の新型
ガジェットは二人に任せた！！」

エリオ達から返事を聞いた後、ハセヲはアスラに念話である頼み事をする

ハセヲ「アスラ！Annaがこの先大量にいる、さすがに今の状態だときついから第二まで頼む！！」

アスラ「了解！！」

ーアスラ側ー

アスラはハセヲとの念話を終わらせ、ある作業をする体制にはいった

スバル「何かあったんですか？」

アスラ「AIDAが大量に現れた・・・この作業が終わるまで、スバルはここにいて」

スバル「分かった！」

アスラ「管理者権限発動・・・第一相、死の恐怖・スケイス、第二・第二リミッター解除承認！！」

この言葉と共に、アスラの体を赤い光が包んだ

ーハセヲ側ー

アスラがスケイスのリミッターを解除したのを確認したと同時にガジェットとAIDAがハセヲ達の元へやってきた

スケイス　ハセヲ！！

ハセヲ「分かってる！！」

ハセヲは自分のロストウェポン”死ヲ刻ム影”を装備し、目の前にいたAIDAに攻撃する

ハセヲ「環伐乱絶閃！！」

強靱な悪魔の爪を召喚し、全周囲にいるAIDAにダメージを与える

ハセヲ「次、蒼天大車輪！！」

今度は円陣で浮かせたAIDA五体を空中で何度も斬り刻む
今の攻撃で五体は消え、残り十五体

ハセヲ「エリオ、キャロ！必ずお前等なら倒せるから、諦めるなよ！！」

それだけ伝えて、ハセヲは残りのAIDAを消すため奥へ入ってい

った

ーアスラ側ー

ティアナ「よし、なんとかレリックは確保できたわ」

スターズは予定の場所でレリックを無事確保していた

アスラ「さあ、最後まで気を抜いちゃ駄目よ!!」

ティアナ「はい・・・えっ？」

アスラ「ティアナ、どうかした？ティアナ!？」

何度話しかけてもティアナは黙ったままだ

スバル「ティアー、何かあった？」

ティアナ「えっ!?!? な、何でもないわ」

アスラ「何とも無いならいいけど・・・!! 二人共、今から私が天井に穴を開けるから、そこから逃げて!!」

スバル「まさか・・・」

ティアナ「A I D A ! ?」

アスラは頷き、攻撃の準備に入る

アスラ「光の矢よ、すべてを打ち抜け・・・レイザス!!」

詠唱が終わると、光の矢が車両の天井を破った

アスラ「上にエリオ達もいるみたいだから合流して、部隊長に報告を!!」

スバル「分かった!マツハキヤリバー!!」

M C Wing Road

マツハキヤリバーはウイングロードで道を作る

スバル「じゃ、先に行ってる!!」

ティアナ「アスラ、無理しないでよ!!」

アスラ「無理するつもりなんて無いよ」

その言葉を聞いて、スバル達はエリオ達の方へと向かっていった

アスラ「さて、忍冬!あなたの本領発揮よ!!」

忍冬 そうですね

アスラ「忍冬！第五相、発動！！」

忍冬 魔典、”途切れ又螺旋ノ縁”セツト！！

アスラの手にロストウェポンが現れる

アスラ「よし！おもいつきりいくぞー！！」

そして、詠唱を始める

アスラ「すべての闇を飲み込め

オルアンゾット！！」

AIDAを巨大な蟲が飲み込み、そして消えていった

アスラ「まだまだ、オルバクドーン！！」

今度は巨大な火球がAIDAに落下し、燃やし尽くす
そして、すべてのAIDAは消滅した

アスラ「あれ？もう終わり？」

忍冬 まあ、大技を二つも出しましたし・・・それに相手はAnna
aですから

ハセヲ《おい！そっちは終わったか？》

アスラ《うん、今さっき終わった。そっちも？》

ハセヲ《ああ。リミッターを外してたから以外と時間はかからなかった》

その後、ハセヲとアスラもフォアードの皆と合流し、初任務は終了した

access:07〜ファースト・アラート〜（後書き）

アスラ「第二回！キャラ対話始まるよー！！」

ハセヲ「今回は第三回だ！お前の記憶力はガキ並か！？」

アスラ「ハセヲ・・・志乃のもとへ逝ってらっしゃい」

ハセヲ「待てええええ！！次元の扉に俺を入れようとすんなあああああつ！！」

PKK『血に染まる者』の光臨

はやて「あれ、大丈夫なんか？」

作者「はい♪一度元の世界に帰って、いろんな姿をスクショに撮られて終わりですから♪」

はやて「それって、以前にもあつたんか？」

作者「いえ、今回が初めてですよ？あ、写真来たらいります？」

はやて「・・・是非！！」

アスラ「じゃ、今度私に行きますね」

はやて「きょう、ここに来てほんまよかったわー！！」

アスラ「ここまで読んで下さりありがとうございます」

はやて「感想をくれた」木の人」様、本当にありがとうございます!!」

作者「これからも頑張りますのでよろしくお願いします!!」

はやて「ほな、またな」

アスラ「また会いましょう!」

作者「また次回」

access:08 姉と妹

訓練場

今、フォアード達は隊長・副隊長らによる個別訓練をしている

スバルはヴィータ

ティアナはなのは

エリオとキャロはフェイト

皆それぞれ頑張っている

この前の初出勤もいい刺激になったようだ

ま・・・AIDAもいたけど、ね

で、ハセヲ達というと・・・いつものプチ会議をしていた

ハセヲ「で、今日は何だよ？」

アスラ「昨日、夢で見たんだけど・・・私の姉ちゃんがこっちに来るかも・・・」

ハセヲ「お前っ！それはやばいって！！」

アスラ「姉ちゃん、アウラに体を貸していた時期があるから・・・
本来に来る確率が高いんだよ・・・」

「ねえ？それって、誰の話？」

ハセヲ「そりゃ、アスラの姉貴の・・・!!」

アスラ「ね、ね、ね、姉ちゃん!？」

「やつほー! 助っ人に来たよ」

ハセヲ「まさか、本当にくるとはな・・・」

二人がうだうだしていると、なのはが迎えに来た

なのは「ハセヲ、アスラ! もう終わった、よ？」

「初めまして!!」

アスラ「咲姉ちゃん! 何で来たのよ!!」

咲「あんたに預けた武器の鍵を外しに来たのよ」

なのは「アスラ・・・とにかく、後で”お話”しようね？」

アスラ「いやああああっ!!」

アスラは強制的になのはに連れて行かれた

ハセヲ「咲さん。とりあえず食堂で話しましょう」

咲「うん」

で、ここは食堂

この場には咲・ハセヲ・スバル・ティアナ・エリオ・キャロ・はやて・フェイト・ヴィータ・シグナム・・・

あと、少し肌に艶があるなのはと屍状態のアスラである

ハセヲとアスラ以外は咲に質問責めをしている

答える側の咲は食事しながら適当に答えている

咲「それより、アスラ！ちょっと忍冬貸してー！！」

アスラ「・・・は、い」

震えながら咲にデバイスを渡す

咲「なのはさん、だっけ？さっきの訓練場使わせてもらえる？」

なのは「はい、いいですよ！」

咲「ほらっ、起きろ！訓練場行くよー！！」

アスラ「何するのー？」

アスラ「あんたのロストウェポンの調整！」

またまた訓練場

咲「じゃ、あんたのロストウェポン装備してみ？」

言われたとおりにアスラは装備する

アスラ「忍冬、第零相発動」

忍冬「変化刃、”調和ヲ保ツ光ト闇”セット

するとアスラの手に日本刀が握られていた

咲「おつ、思っていた以上に安定してるな！これじゃ、あたしが来た意味がないよ……」

アスラ「これ……姉ちゃんの、刀？」

咲「うん！性能は前と変化してないから、あんたなら使いこなせるはずだよ？」

咲はもう帰らんといかんのか……と落ち込んでいた後で知った話だが、咲はアウラに頼んでここに来たらしい武器の調整が終わったらすぐ帰るのが条件で

咲「じゃ、帰る！」

アスラ「咲！・・・私が帰るときは、ちゃんとそこにいてよ！？」

咲「ああ。もう、蓮奈から離れないよ」

アスラだけに聞こえる声で、咲は帰っていった
ほんの一時間の出来事

でも、アスラにとっては十分ぐらいの出来事に感じていた

ハセヲ「アスラ！た、大変だ！！」

アスラ「どうしたの？」

ハセヲ「ティアナが・・・倒れた！！」

アスラ「・・・まさか！！」

幸せな時間の後には必ず不幸がやってくる

ハセヲ「心当たり、あんのか？」

アスラ「とりあえず、ティアナがいる所に案内して！！」

アスラの嫌な予感的中した

まさか、自分のロストウェポンまで使う戦いになるとは思っていない

かつた

ほんの小さな甘さが、一つの大きな事件へツナガル・・・

access:08〜姉と妹〜(後書き)

アスラ「第四回、キャラ対話始まります!!」

ハセヲ「今日は原作キャラではなく、オリキャラの咲さんに来てもらいました」

咲「ども!」

作者「ここで、新たなオリキャラです!ちなみに、咲については今後の話で書くので今回はアスラのお姉ちゃんとしか言いようがありません!」

ハセヲ「つか、今回は短すぎだ!!」

作者「痛い!なんか地味に痛いよ!?!」

ハセヲ「知るか!こんな小説を読んで下さっている方にあやまつけ!!」

作者「すみませんでしたあつ!!」

咲「す、スライディング土下座!初めて見たわ」

アスラ「膝とか痛くないのかな?」

作者「うん、これも地味に痛い。特に摩擦で皮が軽く剥けるし」

咲「それは、かなり痛くない?」

作者「だいじょーぶ！ー！べんけいになんかぶつけるよりかは痛くないから！ー！」

咲「あ、そう・・・」

ハセヲ「きりがねえから今回はここまで」

アスラ「いつも感想下さる木の人様、本当にありがとうございます」

ハセヲ「あと数日で作者の夏休みが終わるから更新は遅くなるが、これからもよろしくな」

アスラ「小説の感想もあれば気軽に書いていって下さい！ー！」

ハセヲ「じゃ、また次回な」

access:09「ティアナの闇」

ティアナは医務室で気を失っていた

ティアナは食事をした後、スバルといつものように書類やレポートの作成などを行っていた

そして、その途中でティアナの体に異変が起こった

ティアナ「……つ、あ、あれ？ここは……」

アスラ「目が覚めた？」

アスラは、ティアナが倒れた理由を説明するためにいるような感じで座っていた

ティアナ「アスラ……心配、かけたわね」

アスラ「それはスバルに言ってあげて」

ティアナ「……アスラは、私が倒れた理由を知ってるの？」

アスラ「ええ、知っている」

アスラは一息おいて、ティアナに話す

アスラ「ティアナ、あなたはA I D Aに感染している」

二人の間に微妙な空気が漂う

ティアナ「じゃ、何で私は何ともないのよ」

アスラ「さあ？詳しいことはよく分かんない・・・今はA I D Aが進化しつつある、とだけ言っておく」

それだけ言って、アスラは医務室を出ていった

ティアナは一人、今の自分について考える

ティアナ「負の感情、か・・・心当たりが無いと言えば嘘になるわね」

ティアナはアスラの後を追ひ、医務室を後にした

ハセヲは今なのはと一緒にいる

ハセヲ「話って何だ？」

なのは「うん・・・ティアナのことなんだけど」

ハセヲ「あー、そういえばあいつの弾、コントロールは前より良いけどキレが無くなったな」

なのは「うん・・・ハセヲはどう思う？」

ハセヲ「俺に聞くなよ、面倒くせえ・・・」

ハセヲはそんなことを言うが、なのはにちゃんと答えを返していた
ハセヲ「とりあえず、ティアナとよく話せ！お前等、ちよっと思ってる
ことがずれてる。このまま放っておけばいつか大変なことになるぞ」

ティアナがA I D Aに感染していることは伝えずに、もしもの事を
話す

A I D Aに感染している以上、何が起ころうとも不思議ではない

なのは「やっぱり、そうした方がいいよね？」

ハセヲ「ああ。事が起ころうからじゃ遅せえからな」

なのははありがとうとだけハセヲに伝えて、仕事に戻っていった

ハセヲ「A I D Aの進化・・・」

スケイス「ありえない、なんて事はありません・・・だろ？」

ハセヲ「ああ、そうだな」

アスラはスバルにティアナが目を覚ませたことを伝えるため、自分の部屋へ行っていた

ティアナ「アスラ!!」

しかし、部屋に行く途中で医務室にいるはずのティアナに呼び止められた

アスラ「何？」

ティアナ「ちょっと、相談に乗ってくれる？」

ティアナに言われたまま、アスラは場所を変える

アスラ「相談ってさ、なのはさんの訓練について？」

ティアナ「ええ・・・はつきり言って、強くなってるって実感がない」

アスラ「ティアナ。一度なのはさんと二人で話し合いをした方がいい」

ティアナ「な、何で？」

アスラ「言葉で伝えなきゃ、伝わらない事だってある・・・ただ、それだけ」

ティアナは少し考え込む

アスラ「明日の訓練の後にでも話してみたらいいよ」

アスラはティアナに提案するが、ティアナは少し迷っている様子

アスラ「とにかく！ティアナは必ずなのはさんと相談すること！分かった？」

ティアナ「そうね・・・一度相談してみるわ」

ティアナはそのまま医務室へ帰っていった

その後ろ姿を見ながらアスラはティアナの体内にいるAIDAの反応を見た

今は何とも無いが、AIDAの暴走は何時でも起こるとティアナを見てアスラは感じていた

アスラ「ティアナが何であそこまで焦っているのか、私には分からないよ・・・」

忍冬 彼女は、昔の主やハセヲに似ていますね

アスラ「す、忍冬？」

忍冬 私は主の隣にずっといましたから、分かるんですよ

アスラ「そっか、そうだよな」

忍冬 今は現状観察で良いのでは？AIDAが何か起こせば、私やスケイスはすぐに気づきますから

忍冬にそう言われ、アスラも納得する

アスラ「・・・最悪の事態も想定してないよね」

アスラはそのまま、スバルに会うために部屋に戻っていった

ここはヘリの中

今フオード達はホテル・アグスタに向かっている

今回の任務は会場警備と人員警護だ

ハセヲ「俺らはAIDA反応を確認したらそっちを優先でいいんだな」

なのは「うん！ハセヲ、アスラ、AIDAについてはお願いね」

アスラ「了解です」

ハセヲ《ティアナの方は任せた！早速ガジェット共が来たみてえだしな！！》

アスラ《スケイスは第二リミッターまで解除してるから、問題ないと思う》

ハセヲ《それだけあれば十分！！》

念話を切り、二人は戦闘に入る

アスラはティアナより少し先でガジェットを破壊

アスラ「天下無双飯綱舞い！！」

空中でガジェットを何度も斬り、破壊していく

この戦闘に入る少し前に、アスラはティアナにあるアイテムを渡し
ておいた

” 火炎太鼓の召喚符 ”

一度だけ魔法が使えるアイテムだ

今のティアナはAIDAとの接触があると中にいるAIDAが暴れ
出すかもしれないので、アスラが行くまでの時間稼ぎのために渡し
ておいた

アスラ「あれを使うことがない事を祈るよ」

忍冬　そうですね

アスラ「ガジェットもできるだけ倒して、A I D Aが操れるような物も減らそう!!」

そして、ガジェット達に次の攻撃を仕掛けていく

アスラ「旋風滅双刃!!」

カマイタチを纏う六連撃でガジェットを破壊していく

忍冬 微弱なA I D A反応を確認!場所はフォードメンバーの所です!!

アスラ「ちっ、とうとう来たか・・・忍冬!強制転送、行ける?」

忍冬 問題ありません!!

アスラ「出力リミッター第一から第三まで解除・・・強制転送!!」

忍冬 転送座標、確認!強制転送、起動!!

アスラの足元にThe Worldでは見慣れた転送するための光が現れる

そして、その光はアスラを包み転送した

フォアード達は遠距離転送されてきたガジェット達を破壊していた
しかし、数が意外と多く、少し苦戦していた

シャマル「防衛ライン、もう少し持ちこたえてね！ヴィータ副隊長
がすぐ行くから！！」

シャマルから通信が入る

ヴィータが急いでこっちにむかって来ているらしい
しかし、ティアナは・・・

ティアナ「守ってばかりじゃ息詰まります！ちゃんと全機落としま
す！！」

シャーリーに無理はするなと言われるが、もうティアナの耳には届
いていない

エリオ達を後ろに下がらせ、スバルとツートップで行く

先にスバルがウイングロードでガジェット達を引きつけ、その間に
ティアナはカートリッジをロードする

足元に魔法陣が浮かび、そして空中に魔力弾が約10〜20発現れる

シャーリー「ティアナ、無茶だよ！！」

ティアナ「打てます！！」

クロスミラーシュを構え、魔力弾を打つ体制に入る

ティアナ「クロスファイヤーシュート!!」

弾丸はガジェットを突き抜けていった
だが、一発スバルの方へ飛んでいった

スバル「えっ!?!」

スバルはとつさに目を瞑るが、その弾丸が当たることはなかった
スバルの目の前にはアスラが立っていた

アスラ「ティアナ!! 無茶して、しかも仲間を打ちかけて・・・お前は馬鹿か!!」

スバルの前に立っていたアスラは黒い鎌を握っていた

スバル「アスラ! い、今のもコンビネーションのうちの一つで」

アスラ「黙れ!! 今のは直撃コースだ!! あたしの転送が遅れてたらどうなったのか分かってんのか!?!」

スバル「それに！今のは私が悪いの！！ちゃんと弾を見ていなかったから」

アスラ「もういい・・・あたしの前から消え失せる！！ここにはAIDAもいるんだ！！お前等みたいのがいると余計邪魔だ！！」

アスラに言われた通り、二人は後ろへ下がっていった

アスラ「・・・くそっ！！」

忍冬 また、昔みたいにキツク言い離しましたね

アスラ「・・・とにかく、先にAIDAを片づけよう」

忍冬 了解

ヴィータ「アスラ！！ここ以外のガジェットはすべて破壊した！！」

アスラ「分かった・・・ここにいるのはAIDAだから、ヴィータさんは離れていてください」

ヴィータ「了解！」

アスラ「環伐乱絶閃！！」

悪魔の爪を召還し、A I D Aを倒していく
この時の悪魔の爪は、いつもより強靱だった

ハセヲ「アスラ!!」

ハセヲは戦闘が終わり、A I D Aの相手をしていたアスラの元へ向かった

運良く、ハセヲ達ライトニングの方にはA I D Aは来なかった

アスラ「ハセヲ・・・」

ハセヲ「はぁ・・・また派手にやったな・・・目、色変わってるぞ」

今のアスラの目はいつもの銀ではなく、髪と同じ血のような紅色だった

アスラ「・・・いろいろ、あったんだ、よ」

ハセヲ「とりあえず、落ち着け。話はそれからだ」

アスラ「ごめん・・・迷惑かけて」

アスラは深呼吸し、息を整える

しばらくすると目の色もいつもの銀色に戻ってきていた

ハセヲ「落ち着いたか？」

アスラ「うん・・・」

ハセヲ「じゃ、少しずつ話してくれ」

アスラはAIDA反応を確認し、強制転送でスバル達の元へ向かったところから話始める

転送したら、ティアナのミスショットがスバルに当たりそうになったこと

さっきまでのやり取りをハセヲに話した

ハセヲ「焦りが、あいつのミスショットの原因だな。AIDAの方はどうだった？」

アスラ「特に変化はない、けど・・・スバルに当たりかけた弾だけ微弱なAIDA反応が出た」

ハセヲ「もしかしたら、暴走は近いかもな」

ハセヲはそれだけ言ってエリオ達の方へ戻っていった

忍冬 お疲れさまです

アスラ「忍冬、帰ったら私のロストウェポン・・・第零相のを微調整したい」

忍冬 使うときが、来るのですね

アスラ「できれば、使いたくなかったけどね・・・」

そして、長かった任務は終わりを告げた

access:09「ティアナの闇」(後書き)

ハセヲ「キャラ対話のコーナー」

作者「今回は・hack//G・U・からオーヴァンに来てもらいました」

ハ・ア「オーヴァン!？」

オーヴァン「ここは別世界だ、特に気にするな」

作者「ではでは、今回の話で何か気になることとかありました？」

オーヴァン「そうだな・・・ティアナとか言う少女はPKKだった頃のハセヲとアスラに似ているな」

忍冬「ですよー！」

オーヴァン「特に、焦り出すと人の話を全く聞かなくなる所とかなw」

ハ・ア「くたばれ、オーヴァン!」

作者「あーあ。セットが壊れちゃった・・・けど、二人の照れた顔をスクショに撮れたからいいや!!」

オーヴァン「後で俺にも送ってくれ」

作者「いいですよ!それでは、今日はセットが壊れちゃったんでこ

の辺で
「

オーヴァン」これからよろしくな
「

a c c e s s : 1 0 } 暴走と喪失 (前編) } (前書き)

今回は後書きのキャラ対話はありません。

a c c e s s : 1 0 } 暴走と喪失(前編)

ホテル・アグスタでの任務の後、アスラはなのはに無理を言って訓練場の使用許可をもらった

忍冬 準備、できましたよ

アスラ「忍冬、第零相、発動」

忍冬 変化刃、”調和ヲ保ツ光ト闇”セット！

アスラの手に、日本刀が握られる

その刀身は黒色で、銀の模様が刻まれている

忍冬 ターゲット出します

忍冬はガジェットを約100体出す

アスラは静かに刀を構え、攻撃する準備に入る

忍冬 ミッション、スタート！！

ガジェットはアスラに襲いかかる

アスラもガジェットを破壊していくが、しばらくするとガジェット

は再生される

この訓練でアスラがガジェットを全て破壊することは不可能
この訓練の目的は

- ・ 多人数対一人の戦闘の感覚を思い出すこと
 - ・ ロストウェポン使用可能の時間を長くすること
- この二つである

アスラ「閻魔大車輪!!」

ガジェットを空中で何度も斬り、そして破壊する

忍冬 10分経過

まだ10分しか経っていないが、アスラの額には汗が浮かんでいた

忍冬 ここからですよ!

アスラ「分かってる、よ!!」

ティアナは六課に帰った後、ずっと一人で練習していた
さすがに、息も上がっているがティアナはまた練習を始める

パンツ、パンツ!

手を叩く音がした

ティアナは音がした方をみる
すると、ヴァイスがそこにいた

ヴァイス「もう四時間も続けてるぜ？いい加減、倒れるぞ」

ティアナ「ヴァイス陸送・・・見てたんですか？」

ヴァイス「ヘリの整備中に二人をスコープでちらちらとな」

ティアナ「二人？」

ヴァイス「今思えば、止めるならあっちが先だったか？・・・ティ
アナ、ちよつと来い」

ティアナ「はい？」

ティアナはヴァイスに連れられ、いつもの訓練場に来た
そこにはただガジェットを破壊し続けているアスラの姿があった

ティアナ「これって・・・」

ヴァイス「あんな訓練をあいっつもずっと続けてる・・・まあ、あつ
ちにはハセヲもいるがな」

訓練しているアスラから少し離れたところにハセヲが立っていた
ハセヲは心配そうにアスラを見ている

ティアナ「……私、練習に戻ります！凡人はもつと努力しないと
いけないんで」

ティアナはそのままさつきいた場所に帰っていった

ヴァイス「ありや、簡単には止められないな」

ハセヲ「アスラー!!」

ハセヲの声を聞き、ヴァイスはアスラの方を見る
訓練は終わったが、疲労で体に入らないらしい

アスラ「はあ……はあ……」

ハセヲ「無理しやがって」

忍冬 まだ、フレイド斬刀士ですよ！使いこなすにはまだ、時間がかかりま
すね

アスラ「せめて、ツインソード双剣士まではいきたいんだけどなー」

ハセヲ「いざって時は俺達のロストウェポンを使えばいい」

忍冬 焦らず、確実に行っていきましょう!!

アスラ「うん！今日は遅いし、帰ろう!!」

ハセヲ「あ……エリオに心配かけちゃった」

アスラ「私もだよー……」

そんなことを言いながら帰っていく二人を見送ってからヴァイスは帰っていった

スバルは部屋で二人の帰りを待っていた
アスラには迷惑をかけたから謝ろうと思っているのだが、時間が経つにつれて言いにくくなってきている

ティアナ「なんだ、まだ起きてたの？」

スバル「ティアー!!」

ティアナ「私明日四時起きだから、目覚ましうるさかったらごめんね」

スバル「うん・・・あのさ」

ティアナ「アスラなら、もうすぐしたら帰ってくるはずよ」

ハセヲ「アスラー!!」

ハセヲの声を聞き、ヴァイスはアスラの方を見る
訓練は終わったが、疲労で体に力が入らないらしい

アスラ「はあ・・・はあ・・・」

ハセヲ「無理しやがって」

忍冬 まだ、^{フレイド}斬刀士ですよ！使いこなすにはまだ、時間がかかりますね

アスラ「せめて、^{ツインソード}双剣士まではいきたいんだけどなー」

ハセヲ「いざつて時は俺達のロストウェポンを使えばいい」

忍冬 焦らず、確実に行っていきましょう！！

アスラ「うん！今日は遅いし、帰ろう！！」

ハセヲ「あ・・・エリオに心配かけちゃった」

アスラ「私もだよー・・・」

そんなことを言いながら帰っていく二人を見送ってからヴァイスは帰っていった

スバルは部屋で二人の帰りを待っていた
アスラには迷惑をかけたから謝ろうと思っているのだが、時間が経つにつれて言いにくくなってきた

ティアナ「なんだ、まだ起きてたの？」

スバル「ティアア！！」

ティアナ「私明日四時起きだから、目覚ましうるさかったらごめんね」

スバル「うん・・・あのさ」

ティアナ「アスラなら、もうすぐしたら帰ってくるはずよ」

スバル「そつか・・・」

スバルもティアナのことを考えて、部屋の電気を消した
布団に入ったが、なかなか眠れずにいた

今日のアスラはいつものアスラと違っていた

特に違和感を感じたのは目の色

いつもの綺麗な銀ではなく、血のような紅だった

いろいろ考えているとアスラが帰ってきた

アスラはティアナの方へ行き、一言呟いた

アスラ「私は、まだ皆をAIDAから守ってあげらる力はないんだ・
・・・私は、元々は無力だったから・・・」

思い出すかのように話すアスラは、いつもと違って弱々しく感じた

スバル（アスラ・・・昔、何かあったのかな？）

忍冬 今日遅いですよ！早く寝なさい！

アスラ「はぁーい」

アスラも布団に入り、数分したら寝息が微かに聞こえた
スバルもアスラが寝たのを確認した後眠りに落ちていった

ピピピピピピピッ・・・

部屋に目覚ましのアラームが響きわたる
そこに・・・

アスラ「うるせっ!!」

寝ぼけたアスラの叫びも加わった

スバルは驚いていたが、アスラは気にせず目を擦っている

スバル「お、おはよう」

アスラ「ん？・・・スバルか、おはよう」

スバルはそれだけ言って、ティアナを起こしている

アスラ「今の目覚ましは、ティアナのか？」

スバル「うん、起こしてごめん！・・・ティア、起きた？」

ティアナ「ん・・・起きた」

ティアナはそのまま起き、スバルはトレーニング服を渡す
アスラも一緒に動きやすい服に着替える

ティアナ「スバル！？それにアスラまで！！何やってんのよ！！」

アスラ「見ての通り、着替えだが？」

スバル「あたしも練習つき合う」

アスラは着替えを終え、部屋を出ていく

ス・テ「アスラ？」

ティアナは訓練場の近くのスペースで、スバルに練習の内容を説明していた

すると、訓練場の方から爆発音が聞こえた

スバル「何！？」

ティアナ「一応、見に行くわよ！！」

二人はそのまま訓練場へ急ぐ
そこで見たのは、日本刀で大量のガジェットを破壊しているアスラ

だった

スバル「す、すごい」

ティアナ「昨日より、少し動きが良くなってる？」

ハセヲ「よく分かったな」

スバル「ハセヲ!？」

ティアナ「また見張り役？」

ハセヲ「誰がやるか、そんな役！」

ティアナ「じゃ、何でこんな朝早くにいるのよ」

ハセヲ「いつもの模擬戦をしに来たんだよ」

ス・テ「いつも？」

ハセヲ「いつも朝、スケイスと模擬戦をやってたよ・・・ていうか、何でお前等がここにいんだ？」

ティアナ「特訓よ!凡人の私はもっと努力しないといけないの!!」

スバル「ティア？」

ハセヲはため息をついた後、ティアナに念話で話しかける

ハセヲ《そーやって、焦ってAIDAを暴走させんなよ？》

一方的に話した後、ハセヲは訓練場に向かっていった

スバル「ティア・・・」

ティアナ「スバル、私たちは、私たちのやり方で強くなるう！」

スバル「うんっ！！」

そして、二人の特訓は始まった

なのは「アスラ！！」

アスラ「なのはさん・・・どうかしました？」

なのは「最近の調子はどうかなーと思って」

アスラ「やっと今日から双剣に入って・・・まだまだ使いこなすには時間がかかりますね」

なのは「明日の模擬戦、一番最後にハセヲとアスラ、個人で模擬戦するから一応準備しておいてね」

アスラ「分かりました」

そう言って、なのはと分かれた後アスラは自分の部屋に戻っていった

アスラ「ただいま。二人共、ジュース買ってきたけど飲む？」

スバル「飲むー!!」

ティアナ「私も」

アスラは二人に缶のジュースを渡す

アスラ「・・・今まで二人がどんな訓練をしたのか私は知らない。
けど、無理だけはしないでね」

スバル「分かってるって!!」

ティアナ「ええ、無理なんてするつもりわないわ」

その後明日のためにと、三人はいつもより早く眠りについた

なのは「さて、早朝訓練の最後！2 o n 1で模擬戦やるよ！まずは
スターズから!!」

スバルとティアナはバリアジャケットをはおり、準備を整える
ライトニングやハセヲ等は少し離れた場所で見学する

ハセヲ「始まった!」

なのはとスバル・ティアナの模擬戦が始まった
始まってから少しすると、ティアナのクロスファイヤがなのはの元
へ飛んでいった

ヴィータ「あれ？なんかキレがねえな」

フェイト「本当だ・・・コントロールは良いんだけど・・・」

その後もスバル達の攻撃は続く
しかし、ハセヲ・アスラそしてなのははティアナ達の異変に気づいて
いた

スバルはカートリッジをロードし、なのはに突っ込んでいく
なのははシールドで防御しながら、ティアナを探す

アスラ「忍冬・・・強制転送」

忍冬 転送座標確認済み、いつでも行けますよ

周りに聞こえないようにアスラは転送の準備をする
その頃、砲撃を打とうとしていたティアナは幻影で、本物のティア
ナはウイングロードを走りながら魔力刀をクロスミラーージュに作り
出していた

そして、なのはを切りつけにいくこうとする

ハセヲ「あの馬鹿ッ!!」

なのは「レイジング・ハート・・・モード、リリース」

R H A l l R i g h t

そして、なのはの元に攻撃が来る

なのは「おかしいな・・・二人共、どうしちゃったのかな？」

なのはは二人の攻撃を素手で防いでいた

ティアナの魔力刀を受けている方からは血が流れている

なのは「頑張ってるのは分かるけど、模擬戦は喧嘩じゃないんだよ？」

なのははそのまま二人に向かって静かに言う

なのは「練習の時は言うこと聞いている振りで、本番でこんなに危険で無茶するんなら・・・練習する意味、無いじゃない」

なのははあくまで静かに二人に語りかける

ティアナは魔力刀を消し、なのはから距離をとる

ティアナ「私は！もう、誰も傷つけないから！！無くしたくないから！！」

スバル「ティア・・・」

ティアナ「だから、強くなりたいんです!!」

なのは「すこし・・・頭、冷やそつか・・・」

なのはの足元に魔法陣が広がる

なのは「クロスファイヤ・・・」

ティアナ「ファントムブレイザー!!」

なのは「シュート」

ティアナの攻撃が出る前に、なのはの攻撃が直撃する

スバル「ティア!!・・・えっ!?!」

そして、スバルはなのはにバインドで拘束される

なのは「じつとして、よく見てなさい・・・」

ティアナの体から黒い泡が溢れだしていることに気づかないまま、
なのはは二撃目を放つ

スバル「なのはさんっ！！！」

その攻撃は当たることにはなかった

アスラ「いい加減にしろ・・・上官のあんたが！A I D Aを暴走させるきっかけを作って、一体どうするつもりだ！？」

ティアナの前にはロストウェポン”死ヲ刻ム影”を構えたアスラが立っていた

なのは「どういうことか、説明してくれるよね？」

ハセヲ「お前はそこでよく見とけ・・・A I D Aの危険性を肌で感じさせてやる」

スケイス 来るぞ！！

ティアナの体から大量のA I D Aが溢れ出す

A I D Aはクロスミラーージュを包み込み、一対の双銃を作り出す
ハセヲの双銃と形は同じだが、全てが真っ黒だった

忍冬 大きい！

アスラ「出力リミッター、第七まで解除」

アスラの魔力が一気に膨れ上がる

それと共に、目も銀から紅へと変わっていく

ハセヲ「スケイス、第三まで解除してくれ」

スケイス 分かった。出力リミッター、第三まで解除！

そして、ハセヲの魔力も膨れ上がった

ハセヲ「俺は周りにいるAIDAから片づける！本体の方は任せた
！！」

アスラ「・・・悪いが、手加減は出来そうにない・・・」

アスラとハセヲはAIDAの所へ突っ込んでいった

AIDA戦はたった今から幕を開ける・・・

a c c e s s : 1 0 爆走と喪失（前編）（後書き）

【次回予告】

襲いかかる無数のA I D A

斬る度に伝わるティアナの心の叫び

そして、昔の自分と重なるハセヲとアスラ

彼等だからこそ伝えられることがある

少女は、大切なものを手に入れるが、同時に大切なものを失う

「なんで・・・なんで、こうなるのよ!!」

（後編に続く）

a c c e s s : 1 0 } 暴走と喪失(後編) } (前書き)

遅くなりました
後編です

a c c e s s : 1 0 爆走と喪失（後編）

ティアナの意識は既に無かった

今はA I D Aがティアナの体を操って、アスラと戦っている
もちろん、ティアナが使っている双銃には”非殺傷設定”などない
これは命を賭けた戦いだ

ティアナ「クロスファイヤ・・・シュート」

クロスファイヤの弾数もティアナが作り出せる数を超えている
オレンジ色だった魔力弾は今は黒に染まっている
約50発ぐらいの弾が一気にアスラを襲う

アスラ「蒼天大車輪」

しかし、最近の訓練で何百ものガジェットを相手にしてきたアスラ
は、簡単に全ての弾を斬っていく

ハセヲ「JUSTICE!!」

ハセヲも双銃で周りのA I D Aを消していく

二人の戦いを、なのは達は離れたところで見ていた

ヴィータ「おいおい・・・化け物か？あいつらは」

フェイト「やっぱり・・・あの二人、多人数対一人の戦いに慣れて
る」

なのは「ティアナ・・・を、私が・・・」

なのははその場で足に力が入らず、座り込む

フェイト「なのは！」

なのは「私が、私がティアナのAIDAを暴走させた！！AIDAの存在に、気づいてあげられなかった！！私はティアナの上官なのに！！！」

なのははフェイトに抱きついて、そして泣き叫ぶ

フェイト「なのは、今はハセヲ達を信じよう！私達ができるのは、二人の邪魔をせずにあの戦いを最後まで見届けることだよ！！」

なのは「フェイトちゃん・・・」

フェイト「なのは、しっかり見届けよう！！」

なのははフェイトの肩を借りて立ち上がる

そこで見たのは、ハセヲとアスラの二人がティアナのAIDAに攻撃しているところだった

二人のバリアジャケットは所々斬り裂かれている

アスラ「・・・忍冬。第零相、発動」

忍冬「使うのですね」

アスラ「ティアナを助けるためには、仮の力じゃ届かない！」

忍冬「分かりました・・・変化刃”調和ヲ保ツ光ト闇”セット！

アスラの手に日本刀が握られる

アスラのロストウェポンだ

アスラ「必ず、助ける！！」

ハセヲ「いくぞ！！」

ハセヲもロストウェポンに装備を変える

アスラ「閻魔大車輪！！」

ハセヲ「環伐乱絶閃！！」

二人の本気の攻撃が同時にA I D Aに放たれる

ティアナ「A a a aアアツ！！」

A I D Aに攻撃は通ったみたいだが、あまり変化はない

ハセヲ「攻撃がほとんど通らねえ・・・A I D Aの進化ってやつか？」

アスラ「面倒臭くなってきたな・・・」

ティアナ『私は・・・もう、何も無くしたくない・・・失いたくない！！』

アスラ「！？」

ハセヲ「どうした？」

アスラ「今、ティアナの心の叫びが聞こえた・・・」

アスラはティアナの方を見つめる

ハセヲは聞こえなかったみたいで、？マークを浮かべている

アスラ「まだ、微かにティアナの意志は残っている！ハセヲ！！」

ハセヲ「・・・周りのAIDAは俺が引きつける！！その間に、行け！！」

ハセヲは鎌を振り、そして道を作る

ハセヲ「いつけええええつ！！」

アスラ「ティアナ！！」

AIDAが消えた瞬間、アスラはティアナのすぐ側まで飛んでいった

アスラ「ティアナ、助けに来たよ」

ティアナ『ソンナノ、ウソダ・・・』

ティアナはアスラに弾丸を放つ

しかし、アスラはそれを避けなかった

アスラ「うつ・・・嘘なんかじゃない！」

アスラは一步步、ティアナの元へ歩いていく

ティアナ『オ前ナンカニ、失ウ辛サガ分カルワケナイ!!』

アスラ「分かるよ・・・私も、一度失ったから」

ティアナを抱きしめながら、アスラは静かにティアナに語りかける

アスラ「失うことの怖さ、その後の絶望・・・私は、それを知っている」

ティアナ『・・・キエロ・・・』

その言葉と共に、ティアナはA I D Aの力で強化した魔力弾をアスラの腹部に撃った

同時にアスラの体内にA I D Aが入り込む

アスラ「ぐっ・・・忍冬!!」

忍冬 データドレイン、発動準備完了!いつでもどうぞ!!

アスラ「データアアドレイイインッ!!」

アスラを中心に光が包み込む

周りにいたA I D Aは光と共にすべて消えていった

ハセヲ「アスラ!!」

ステイス あいつ、無理矢理データドレインをしゃがった!!

ハセヲ「何処にいる?」

土煙の中、ハセヲはアスラとティアナを探していた

なのは「ティアナ!!」

下の方からなのはの声が聞こえたので、急いでハセヲも向かう

しかし、そこにいたのはティアナを抱えたのはだけだった

なのは「ハセヲ・・・ティアナの中にいたAIDAはどうなったの？」

ハセヲ「えっ・・・完全に消えてる」

なのは「よかったぁ・・・」

ハセヲは周りを見渡し、アスラを探す

ティアナ「・・・あ、あすら・・・」

ハセヲ「ティアナ！・・・アスラの場所、分かるかつ！？」

ティアナは指でアスラの方を指す

ティアナ「あつちに、とんでいった・・・ハセヲ、アスラを・・・お願いっ！！」

ハセヲ「ああ、アスラは俺に任せて・・・お前は、休んでろ」

そう言つて、ハセヲはアスラの元へ飛んでいった

ティアナ「アスラ、必ず帰ってきてよ・・・あの言葉の続き、まだ聞いて無いんだから！」

ティアナはそのままなのはに医務室まで連れていってもらった

アスラは意識が飛ぶのを何とかこらえていた
体にガラスの破片などが当たり、一部皮膚が切れている

アスラ（データドレインの反動で体も動かないし、声も出ない・・・）

忍冬 主は無茶しすぎですよ・・・

アスラ《ごめん、忍冬。無茶させたね》

忍冬 きつとハセヲさんが見つけてくれますよ

アスラは動けない体を何とかしようと試みたが、その度に激痛がはしり状況を変えることは出来なかった

アスラ（この感覚・・・再誕によってPCが破損した時と同じだな・・・）

ハセヲ「アスラ！いるか！？」

アスラ《いるよー、ただ声が出せない・・・すぐ近くに埋まっていると思う》

念話でハセヲに伝える

そして、ハセヲはすぐにアスラを見つけることが出来た

ハセヲ「心配かけやがって！！」

アスラ《ごめん・・・》

ハセヲ「とにかく、帰るぞ。その怪我だとしばらく治すのに時間があるな」

アスラ《うん・・・疲れたから、少し寝る・・・》

ハセヲの声を聞いて安心したアスラは、意識を失った

ハセヲ「しばらく休め。AIDAが来たら、俺が必ず守るから」

ハセヲはアスラを背負い、医務室へとアスラを運んでいった

ティアナのAIDA暴走から二日経った

アスラは未だに目を覚まさない

ティアナは毎日アスラの所へ行き、目が覚めるのを待っていた

ティアナ「なんで・・・なんで、こうなるのよ!!」

ティアナは泣きながらアスラに訴えかける

ティアナ「あたしを救ってくれるんでしょ？助けてくれるんでしょ？あんたがいないと、私は!!」

”世界を変えるのは強き想い・・・”

ティアナ「だ、誰っ!？」

”あなたの強き想いが届きますように・・・”

その言葉を残して、謎の声は消えた

ティアナは部屋に戻る前に、一言だけアスラに伝えていった

ティアナ「起きたら、まずは謝らせてね」

その言葉だけ残してティアナは医務室を出て、集合場所に向かっていった

へり乗り場へ行き、なのはからの指示を聞く

なのは「今回は空戦だから、私とフェイト隊長、ヴィータ副隊長の三人」

フェイト「みんなはロビーで出動待機ね」

ヴィータ「そっちの指揮はシグナムだ」

なのは「ハセヲはA I D Aがこっちに来たら、倒せる人がいないからみんなと一緒に待機・・・それから、ティアナは出動待機から外れとこっか」

ティアナ「!!」

周りにいたスバル・エリオ・キャロは驚いた表情を見せる

なのは「今夜は体調も魔力もベストじゃないし・・・」

ティアナ「言うことを聞かない奴は・・・使えないって事ですか？」

なのは「自分で言ってる分らない？当たり前のことだよ、それ」

ティアナ「現場での指示や命令は聞いてます！教導だってちゃんとまじめにやってます」

ティアナはその後も続けてなのはに訴えかける

ティアナ「少しくらい無茶したって！死ぬ気でやらなきゃ、強くなんなれないじゃないですか!!」

その言葉と共に、ティアナは服を掴まれる
掴んだ張本人はハセヲだ

片方の手は、殴りかかろうとしていたシグナムの拳を止めている

ハセヲ「お前、ふざけるのもたいがいにしろ！！お前のその焦りで、この前何があつたのか忘れたのか！？」

ハセヲの声がその場に響く

シグナム「・・・ヴァイス！もう出られるな？」

ヴァイス「乗り込んでいただけたら、すぐにでも！！」

なのはたちはそのままヘリに乗って行つた

ハセヲ「お前がしたこと・・・忘れんなよ」

ハセヲはそのまま一人で隊舎の方へ戻っていった

スケイス「はぁ・・・相変わらず、不器用だな」

しかし、ハセヲの代わりのようにスケイスがこの場にいた

シャーリー「本当、みんな不器用で見てられませんよ・・・」

スケイス「お前等、ロビーに集まれ。話がある」

シャーリー「私が説明する。なのはさんの事と、なのはさんの・・・
教導の意味」

access:10 暴走と喪失(後編) (後書き)

アトリ「キャラ対話のコーナーです!!」

クーン「今回は、アスラ・ハセヲ・スケイス・忍冬はお休みだ!だから、俺達がこのコーナーを仕切っていくぜ!!」

作者「今日のゲストはスバル達、フォアードメンバーの皆さんです」

四人「こんにちわ!!」

アトリ「じゃ!私から質問しますね!ハセヲとアスラ、皆さんのお二人のイメージを聞かせてください」

スバル「えっと、私は二人とも幼なじみってイメージかな?」

ティアナ「そうね・・・ハセヲは聞かん坊で、アスラは天然?かしら」

エリオ「僕は二人は姉弟ってイメージがあります」

キャロ「アスラさんがお姉ちゃん、ハセヲさんが弟です!」

クーン「スバルの幼なじみってのは事実だよな?」

アトリ「はい。二人の家は近所なんですよ」

四人「ええええええっ!?!」

作者「あ、もう時間だ。クーンからの質問は省略します」

クーン「何で!?!」

アトリ「またお会いしましょう!!!」

a c c e s s : 1 1 〱 たいせつなこと〱 (前書き)

本日は三話続けてお届けしています!!

本日第二話目です

それでは、どうぞ。

access:11 たいせつなこと

ロビーに、スバル達が揃ったのを見て、シャーリーは話始める

シャーリー「昔ね・・・一人の女の子がいたの。その子は本当に普通の女の子で、魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんてするよ
うな子じゃなかった」

モニターで小さい頃のなのはが映し出される

シャーリー「だけど、事件が起こったの。たった九歳の女の子が、魔法と出会ってからわずか数カ月、命がけの実践を繰り返した」

そして、なのはが集束砲を撃っている場面が現れる

エリオ「集束砲！？こんな大きな！！」

スバル「九歳の・・・女の子が？」

キャロ「ただでさえ、大威力砲撃は体にひどい負担がかかるのに・・・」

シグナム「その後もな、あまり時を置かず戦いは続いた」

今度はヴィータの攻撃を防いでいるなのはの姿が映し出される

シャル「私たちが深く関わった闇の書事件」

シグナム「襲撃戦での敗北・・・それに打ち勝つために選んだのが、

当時はまだ安全性が危うかったカートリッジシステムの使用」

シグナム達はそのまま説明を続ける

シグナム「度重なる無茶を続け、体の負担が生じないはずもなかった」

シャマル「事故が起きたのは、入局二年目の冬・・・ヴィータちゃん達と異世界の調査に行った時の帰りだった。その時、不意に現れた未確認体。いつもののはちゃんだったら、何の問題もなく味方を守って落とせるはずだった・・・」

画面には血で染まったなのはと、なのはを呼びかけるヴィータの姿が映る

雪にも、なのはの血がついている

シャマル「でも、たまっていた疲労、続けてきた無茶が・・・なのはちゃんの動きをほんの少しだけ鈍らせた」

その後、なのはの映像を見て、シャーリーは話し出す

シャーリー「なのはさん、みんなに自分と同じおもいさせたくないんだよ。だから、無茶しないでも戦えるように、本当に丁寧に教えているんだよ・・・」

しばらく沈黙が続く

その沈黙を破ったのはスケイスだった

スケイス「無茶だけなら、あいつ等の方がやばいな・・・」

その場にいた全員がスケイスの方を見る

スケイス「そんな顔しなくなつて、ちゃんと話すさ・・・ハセヲと、アスラの過去を・・・」

スケイスは少しモニターの方を触り、皆にある一場面を見せる

それは、大聖堂で志乃が消えていく所だつた

スバル「これは!？」

スケイス「ハセヲ達の世界ではThe Worldって言うオンラインゲームが流行つていた。だが、そのゲームにはあるバグがいた・・・それがA I D A・・・」

スケイスは場面を変え、ある一人の少女を映す

スケイス「これは、アスラの姉のP Cだ」

よく見ると、隣にアスラらしきP Cがいる
その時のアスラの服は今の黒ではなく、薄い紫色の和服だつた

スケイス「アスラは幼いときに親を亡くし、姉と二人だつた。その姉もアスラから離れ、仕事をしていた。その姉の名を咲と言う」

シグナム「咲だと!？」

シャマル「この前来た子ですよね？」

スケイス「なかなか会えなかつた咲はアスラにThe Worldを勧めた。あそこなら、いつでも会えるから、つてな」

モニターの場面は変わり、アスラと咲がモンスターを倒している所が映る

しかし、よく見るとそのモンスターはAIDAに感染していた

スケイス「二人は異変に気づかずにモンスターを倒そうとした。だが勝てるはずもなく、姉を犠牲にアスラは助かった」

今度は病院のベッドが映される

そこには見慣れた顔の二人が寝ていた

スケイス「アスラと咲、共に意識不明の昏睡状態だった。」

そして、スケイスは別の病室を映す

そして、そこに寝ている少女を見続けるハセヲがいた

キャロ「ハセヲ、さん？」

エリオ「何で、兄さんが？」

スケイス「最初に映した少女も、リアルで意識不明になった。ハセヲはそいつの知り合いでな、志乃が未帰還者になってから変わった」

次に映したのは豹変したハセヲの姿

ティアナ「これって!？」

スケイス「ハセヲはただただ力を求めて”死の恐怖”になった」

その映像は、ちょうどハセヲが死の恐怖になった日・・・PK100人狩りをしている時だった

スケイス「そして、あいつは志乃をPKした奴と戦うことになるんだが、結果はぼろ負けw・・・しかも、データドレインでPCを初期化されてLv1に戻った・・・」

今度はアスラが映し出される

スケイス「アスラも、ハセヲと同じくらい有名なPKKで、通り名は”血に染まる者”だったな・・・で、ある時自分の力に気づく。それが、俺達碑文を統べる力”碑文の鍵”だ」

スバル「その、碑文の鍵って何？」

スケイス「AIDAを倒すことができる力を調節することができる力・・・要するに、俺もアスラに出力リミッターをかけられてんだよ」

一同は改めてアスラの力の大きさを理解する

スケイス「そして、その力を使う度に・・・アスラは破壊衝動が現れる」

ティアナ「破壊、衝動・・・」

シグナム「強すぎる力にはリスクが伴う・・・違うか？」

スケイス「その通り。あいつの目が紅くなるのはもう知ってるな？あの状態の時が一番やばい・・・あの状態で意識を失ったら、八相の碑文全てで抑えないと止まらないからな・・・」

ティアナ「でもっ、私の時や前のホテル・アグスタの時は、何でもなかったのよ!!」

スケイス「あいつが自分の力を抑えているからだよ・・・って、話が逸れたな。続けてもいいか？」

ティアナはまだ聞きたいようだったが、話が進まないと理解し黙り込む

スケイス「アスラは”レイヴン”ってギルドに入って、自分の力、そして碑文やAIDAについても知った。ま、後にハセヲも入ったがな・・・で、それから碑文使い達はAIDAを完全に消すためにいろいろやっただよ。」

ハセヲ「途中、仲間を失ったりもしたけどな」

エリオ「兄さん!!」

スケイス「あ、やべっ!!」

スケイスはハセヲから逃げようとするが、すぐに捕まる

ハセヲ「スケイス・・・どこ行くつもりだ？」

スケイス「いや、その・・・トイレだ、トイレ!!」

ハセヲ「よし、分かった。俺が連れて逝ってやる」

スケイス「字、違うぞww」

最後の言葉でハセヲはスケイスを殴り飛ばしていった

ハセヲ「はぁ・・・ん？皆どうかしたか？」

ハセヲはスケイスに殺気を出していたのだが、周りにいたメンバーにはまだきつかったようだ

あのシグナムでも殺気で動けていない

しばらく待って、皆が落ち着いてきた頃に口を揃えてこう言った

『さすが”死の恐怖”だ・・・』

ハセヲ「通り名で呼ぶな!!」

そして、ハセヲからツツコミが帰ってきた

ハセヲ「じゃ、この話はもう終わりな」

ハセヲはモニターを触り、映像を消していく

スバル「えー、続き気になります」

ハセヲ「別に過去から逃げるつもりはねえが、あんまり見られて良いものじゃ無いしな・・・ま、それぞれいろんな事があった。でいいだろ？」

スバル「ん・・・」

ティアナ「ハセヲは、始めその碑文の力を手に入れてどうだった？」

ハセヲ「あん時はうれしかったな・・・やっとあいつに勝てるって思ってたから・・・」

ティアナ「でも？」

ハセヲ「！・・・だが、俺はあの力でいろいろ傷つけて、失いそうにもなった。それを止めてくれたのがアスラなんだよ」

キャロ「アスラさんは・・・いつも助けてくれますよね」

エリオ「うん。前のホテル・アグスタや模擬戦」

ハセヲ「俺もあいつも全て守れるなんて思ってたねえ。けど、少しでも役に立ちたいって思ってた・・・平凡なりに、な」

ティアナ「！！」

ハセヲ「皆、最初は誰だって何の力も持ってたねえ。俺らは間違ったやり方だったが、お前は仲間と一緒に強くなっていけ・・・もう、

焦ったりすんなよ?」

ハセヲはその場を後にした

残されたフォード達はティアナを見る

ティアナ「ちよつと夜風に当たってくる」

ティアナはそのまま、外へ走り出した

キャロ「今は、そつとしておきましょう」

スバル「そう、だね・・・」

訓練場の近くでティアナは座っていた

しばらく座っているとなのはがティアナの元へ歩いてきていた

なのははティアナに笑いかけ、隣に座る

ティアナ「シャーリーやシグナム副隊長にいろいろ聞きました」

なのは「なのはさんの失敗の記録?」

ティアナ「じゃなくて!その・・・」

なのは「無茶すると危ないんだよつて話だよね?」

ティアナ「・・・すみませんでした」

二人の姿をこつそりかげから見つめる四人と一匹

スバル・エリオ・キャラ・シャーリー・フリードだ
そっとしておこうと言っていたが、気になって付いてきたのだ

ハセヲ「何だ？覗き見か？」

四人『ハセヲ！しいー！！』

ハセヲ「わ、悪りい・・・」

そして、物陰に隠れている人影がもう一つ増えた

スバル《何でハセヲはここに來たの？》

エリオ《まさか、兄さんも氣になって？》

ハセヲ《ちげーよ！ただ、アスラの見舞い行くからお前等も來るだろうと思つて誘いに來てやつたんだよ！》

キャラ《あ、私行きたいです！！》

スバル《じゃ、あつちの話が終わつたらみんなで行こう！！》

しばらくの間ティアナは泣きつき、見舞いに行つたのはそれから30分後だった

スバル「まだ、意識は戻ってないんだね」

ハセヲ「ま、AIDA反応もないし、しばらくすれば起きるだろ」

エリオ「兄さん、心配じゃないんですか？」

ハセヲ「いや、だって前にも同じような事あったし・・・」

四人『ええっ！！』

ハセヲ「うるせえっ！耳元で叫ぶな！！」

キャロ「せめて、前にもあったと教えてくれるだけでも違ったのに・・・」

ハセヲ「悪かったよ！だが、今回も前みたいに意識が戻るとは言い切れない・・・AIDAは変わり始めてる・・・」

次の日の朝、エリオやキャロはいつも通りにティアナと接していた

エ・キ「おはようございます」

フリード「キユクー！」

ティアナ「おはよう」

早朝訓練の前に、フェイトから”ストライカー”についての話があった

フェイト「例えば、ハセヲやアスラが模擬戦で同じチームだと、何でも出来そうな感じしない？」

エリオ「分かります！」

キャロ「二人がいるととても安心できます」

フェイト「なのは、教導の前からみんなを立派なストライカーにしてみせるって言うてた」

そのまま、スバル達は訓練場へ向かって走り出した

ハセヲ「ストライカー」か・・・こんな俺でも、頼られたりするんだな」

スケイス「フツ・・・いつも通りでいいんだよ、お前は」

木の上からハセヲは訓練の様子を見る

ハセヲ「たまには、つき合いますか！」

ハセヲもそのままなのは達の元へ歩いていった

access:11 たいせつなこと (後書き)

ハセヲ「キャラ対話のコーナー、ゲストはなのはとフェイトだ」

な・フ「お願いします」

作者「ささっ！ここに座ってくださいな！！」

フェイト「あれ、今いるのはハセヲだけ？」

なのは「忍冬もないの？」

ハセヲ「忍冬はアスラの隣にずっといるからな・・・あいつがいないと忍冬も来ないからな」

なのは「それより！今回、ハセヲ達の過去が少し分かったけど・・・はつきり言って、お疲れさまでした」

フェイト「ハセヲの”死の恐怖”もすごいけど、アスラの”血に染まる者”もすごいよね」

ハセヲ「細かいことは気にすんな」

なのは「とりあえず、”お話”だね？」

フェイト「ハセヲ、逝くよ」

ハセヲ「なんか字が違つような・・・よせ！！はなせええええつ！！」

作者「あーあ、独りぼっちになったから今回はここまで！！感想などあれば書いて下さるとうれしいです！！これからも頑張りますので、よろしくお願いします！！」

a c c e s s : 1 2 機動六課のある休日（前編）（前書き）

本日連続投稿三話目です。

次回からは何話か一緒に投稿することが多くなると思います・・・

朝

スバルはティアナを起こしていた

アスラはまだこの部屋に帰ってはいないが・・・

スバル「もー、ティアー!!」

何度も揺すってみるが起きない

スバル「・・・アスラが目覚めたって」

スバルはティアナの耳元で呟く

ティアナ「それ、本当!？」

何度呼んでも起きなかったティアナがすぐに起きた

スバル「おはよう、ティア!」

ティアナ「ねえ、アスラが目覚めたって・・・本当?」

スバル「あー、今の・・・嘘」

ティアナはその言葉を聞いた瞬間にスバルを蹴飛ばす

スバルも綺麗に飛ばされました

ティアナ「あんたって奴は、人が気にしてることをすぐに引きずり出すわね!」

スバル「だってティア全然起きないんだもーん!!」

一種のふれあいを済ませた後、着替えてエリオとキャロと合流する

スバル「おはよう、二人とも!!」

エ・キ「おはようございます!!」

ティアナ「今日も頑張るわよ!!」

そして、四人は訓練場に向かっていった

なのは「はい!今朝の訓練と模擬戦も無事終了!!」

フォアード達の顔は疲れきっている

なのは「でね、実は何気なく今日の模擬戦は第二段階クリアの見極めテストだったんだけど・・・どうでした?」

フェイト「合格!」

四人『早っ!!!』

ヴィータ「ま、こんだけみっちりやってて問題あるようなら大変だっただけだ」

なのは「私もみんな良いせん行ってると思うし!これにて二段階終

了!!!」

フェイト「デバイスのリミッターも一段階解除するから、後でシャ
ーリーの所に持ってきてね」

ヴィータ「明日からは2ndモードを基本型にして訓練していくか
らな」

ス・テ・エ「はい!!」

キャロ「明日?」

ヴィータ「ああ!訓練再開は明日からだ!!」

なのは達が隊舎に待機しているらしいので、フォアード達はお休み
だそうだ

なのは「ハセヲーいる?」

ハセヲ「何だよ」

なのは「ちなみに、ハセヲは私たち隊長・副隊長達と模擬戦ね?」

ハセヲ「断る。やるとしても全員で参加じゃないとやらねえぞ。一
人一人相手すんの面倒くせえし」

ヴィータ「元々全員でやるつもりだ」

フェイト「ハセヲ、多人数相手するの慣れてるでしょ?」

フォアードメンバーは念話で一言

《ご愁傷様です》

ハセヲ《おい！！それどういう意味だ！？》

なのは「とりあえず、食堂行こ？」

スバル「なのはさん！」

キャロ「アスラ姉さんのお見舞い、みんなで行きませんか？」

エリオ「兄さんも一緒に！！！」

ハセヲ「いや・・・俺はいいよ。お前等だけで行つてこい」

フェイト「駄目。ハセヲも行くよ」

ハセヲはフェイトに引きずられていく

なのは「じゃ、行こうか」

四人『はい！！』

フェイト《ハセヲ・・・なんでそんなに体軽いの！？》

ハセヲ《何言つてんだよ！！》

なのは達はアスラの病室に入ると誰もいなかった

なのは「アスラ!？」

ティアナ「さつき行つたときはここにいたのに・・・」

スバル「どこに行つたのかな？」

ハセヲ「・・・あそこ、か？」

フェイト「心当たりがあるの？」

ハセヲ「まあな」

ハセヲはそのまま食堂へ向かつていった
すると見慣れた顔があつた

ハセヲはそのまま少女の所へ行き、後ろから頭をおもいつき叩く

ハセヲ「お前は・・・起きたらまず知らせろよっ!!」

アスラ「痛いっ!!何すんのよ!!病み上がりなのよ!!」

ハセヲ「そんだけ物が言えるならもう完全回復してる!!」

なのは達も離れたところでアスラとハセヲのやり取りを見ていた

ティアナ「アスラ・・・」

スバル「意識、回復したんだ!!」

キャロ「よかった!!」

エリオ「姉さん・・・」

フォアード達やなのは達もうれしそうな顔をしている

アスラがなのは達に気づいて手招きをしている

一同はアスラの元へ走っていった

アスラ「ただいま・・・帰ってきたよ」

全員『おかえり!!』

ハセヲ「遅せえんだよ」

この日、機動六課にアスラが帰ってきた

ティアナのAIDAが暴走してから丁度一週間経った日だった

アスラはなのは達と食事した後、医務室に戻っていった

医務室に入るとシャルマルが待っていた

シャルマル「おかえり、アスラ」

アスラ「ただいま、シャルさん」

言葉を交わした後、シャルはアスラの体に異常は無いか検査した

シャル「うん、何処にも異常は無いわね」

アスラ「ありがとうございます」

シャル「数日は出来るだけ安静にね？」

アスラ「はい」

シャル「あっ！忍冬ならデバイスルームにいるわよ」

アスラ「分かりました。今から迎えに行ってきます」

アスラはシャルにそう伝えて、相棒がいるデバイスルームへ向かっていった

アスラ「あ・・・そういえば、ハセヲ今模擬戦中か！忍冬と一緒に見にいこっ」

デバイスルームに入るとシャーリーと知らない少女がいた

シャーリー「アスラ!!」

「主ー!!」

アスラ「え、もしかして・・・忍冬!？」

シャーリー「作った私もビックリなんだけどね・・・この子はユニ

ゾンデバイスになったみたい」

忍冬「主のデータトレインの影響ですね！私のデータも書き換えられました」

アスラ「何か、やってはいけない事をやってしまった気分なのは何故？」

忍冬「ちなみに、私は”志乃”さんのPCを元に出来ているんですよ！帽子とか、服は違いますけど・・・」

アスラ「そっか・・・シャーリー、私もう一度未帰還者になってくるね」

シャーリー「アスラ！？戻って来てー！！」

機動六課に新しい魔王が加わった

ハセヲ・アスラ限定の魔王が・・・

志乃さん、本当は良い人なんだよ！！

ただ、怒らせたくない相手ってだけなんだよね・・・

ハセヲはなのは達隊長陣と模擬戦をやっていた

隊長陣は必死になってハセヲに一撃入れようとしている

この模擬戦はハセヲに一撃入れたら終わりだ

だが、さすがは元PKKの死の恐怖・・・隊長達の攻撃を簡単に避けたり受け流したりしている

なのは「ハセヲ、そろそろしんどくなってきた？」

ハセヲ「いや、全く平気だw」

ハセヲと模擬戦をしているメンバーは

なのは・フェイト・シグナム・ヴィータ
この四人である！

はやては仕事が残っているため不参加です

ハセヲ「あのさ、もう面倒くせえから終わりたいんだけど・・・」

四人『駄目！！』

ハセヲ「はぁ・・・エリオ達が羨ましいぜ」

スケイス お、誰か来たぞ

アスラ「なのはさん達ー！頑張ってくださいー！！」

なのは「アスラー！！」

フェイト「・・・ハセヲー！！ちょっと一時休戦ー！！」

シグナム「何のつもりだ？テストロッサ」

フェイト「みんな、ちょっと来て」

フェイトはなのは達に作戦を伝える

それを聞いた後のみんなの顔はニヤリと笑みを浮かべていた

フェイトはそのままアスラのところへ行き、何かを話している

ハセヲ「おい・・・まさか!!」

ヴィータ「そのまさかだ、ハセヲ」

なのは「はやてちゃんの代わりにアスラを入れてもいいよね？」

なのはさん、顔が笑っていませんよ！

高校生相手に大人げねー

ハセヲ「部隊長は遠距離砲撃とかが中心だろ！？アスラは近距離だぞ！」

アスラ「私、櫂のチートのお陰で全部の職業ジョブを使うことができるから心配しないでいいよ？」

ハセヲ「って、お前病み上がりじゃなかったのかよ!!」

アスラ「さて、やりますか!!」

アスラはバリアジャケットをはおる

いつもの見慣れた黒い服に変わる

アスラ「忍冬、魔典”渦雲”出して」

忍冬「了解、魔典”渦雲”セット！」

ちなみに忍冬はアスラとユニゾン中だ

ユニゾンしている時は前と同じようにネックレスの姿になる

アスラの見た目に変化は無い

ハセヲを驚かせるために、忍冬の姿を見せないでいる

アスラ「これなら、はやてさんの代わりになれるよね？」

ハセヲ「分かったよ・・・ただ、アスラが入るから本気で行くぞ！」

ヴィータ「最初から本気出せよ！！」

シグナム「来い！！」

フェイト「いつでもどうぞ！」

なのは「今度こそ一撃入れるよ！！」

アスラが介入し、模擬戦二回戦が始まった

アスラ「飲み込め水龍・・・オルリウクルズ！！」

アスラからの攻撃をハセヲは紙一重でかわす

その間にフェイトとシグナムがハセヲのすぐ近くで攻撃に入る

シグナム「翔けよ、隼！！」

フェイト「撃ち抜け、轟雷！！」

二人の攻撃を避けるために距離を取ろうとすると、なのはのアクセ
ルシューターにより動けなくなる

シグナム「シュツルムファルケン！！」

フェイト「サンダースマッシュャー!!」

ハセヲ「スケイス!!」

なのはのアクセルシューターをすべて打ち落とした後、シグナムとフェイトの攻撃がハセヲを襲った

フェイト「ちょっと、やりすぎた?」

シグナム「あいつのことだ、けろつとしているさ」

アスラ「いやいや、さすがのハセヲでもあれは無理ですよ」

ハセヲ「ちっ・・・かすったか」

なのは「今、何て言った?」

ハセヲ「ほらっ」

ハセヲは指でバリアジャケットを指す
指した場所は少し焦げていた

アスラ「さすがにあの状況でヴィータの攻撃は防げませんよ」

ハセヲ「これで、終わりだな？」

ヴィータ「ああ、さすがにあたしも疲れた」

長い長い模擬戦はヴィータの攻撃で終わった

なのは達と隊舎に帰るとキャロから全体通信が来た

キャロ「こちらライトニング4。緊急事態につき、現場状況を報告します！」

キャロからの報告内容はある路地裏でレリックらしき箱を持った少女を発見したという報告だった

なのは「スバル、ティアナ。ごめん、お休みは一旦中断。」

フェイト「救急の手配はこっちです。エリオ達はそこでレリックと女の子を保護」

なのは「ハセヲもお休みは終了ね」

ハセヲ「別に構わねえよ」

はやて「全員待機体制！席を外してる子達は配置に戻ってな！それから、なのはちゃんとシヤマル、あとハセヲとリインも現場に向かっ

なのは「アスラ、病み上がりで悪いけどこっちにAIDAが来たら

よろしくね」

アスラ「任せて下さい。あと、一人だけなら今すぐ現場に送れますよ?」

フェイト「なら・・・ハセヲをお願い」

アスラ「分かりました、忍冬!」

アスラは忍冬とのユニゾンを解く

忍冬「出力リミッター、第二解放」

アスラ「転送座標、確認完了」

忍冬「転送準備、完了!」

ハセヲ「志乃!」

アスラ「この話はまたあとでね!強制転送、開始!」

ハセヲは驚いた表情のまま転送されていた

access:12機動六課のある休日(前編)～(後書き)

アスラ「キャラ対話のコーナー！そして帰ってきたぜ私ー！！」

忍冬「お久しぶりです」

作者「今回のゲストは志乃さんです！」

志乃「呼んでくれてありがとう」

忍冬「志乃さん！！」

志乃「わ、私がもう一人？」

アスラ「私の相棒です」

志乃「そうなんだ・・・」

作者「何かいろいろ出てきて混乱してきたと思うので、次回は戦いの前に、補足コーナーにしたいと思います」

志乃「本編はやらないの？」

作者「自分に文才がないので、よく分からない所とかたくさんあると思うんですよ」

忍冬「そのための補足コーナーなんですね？」

アスラ「作者がダメダメですみません」

志乃「次回は本編の方はお休みです」

忍冬「すぐに更新して、本編に戻りますから！少しだけ、待っていて下さい！！」

作者「それでは、勝手ながらですが、次回は補足コーナーにさせていただきます」

アスラ「また次回会おうね！！」

access:ERRORしばしの休息

作者「第一回、物語設定補足コーナー!!」

ハセヲ「第一回って、第二回もあるのかよ」

作者「うん!またこのコーナーを行う日がいつか来る」

アスヲ「とりあえず、始めましょう」

作者「まずはこの作品のオリキャラ、アスヲの説明です」

本名 麻鬼^{あさき} 蓮奈^{れな}

年齢 17

リアルの特徴

- ・目と髪は黒で、髪は背中ぐらいまでである^{ハセヲ}
- ・三崎亮と幼なじみ
- ・姉の名は咲で、5つ歳が離れている

PC名 アスヲ

職業 マルチウエボン
錬装士

レベル 200 (櫻がチートしました)

使用する碑文 全て

PCの特徴

- ・髪は紅色で目は銀色。髪は腰ぐらいまである
- ・櫻によりXtthフォームになり、全ての職業^{ジョブ}を使いこなすことが可能になった
- ・碑文の鍵を持っていて、八相の力をコントロールする事が出来る

・全てのロストウェポンを使うことができ、自分のロストウェポンもある

作者「ざっとこんな感じですね」

ハセヲ「改めてみると、お前樫にチートされまくりだな」

アスラ「いやー言い返せないよ」

作者「vol.3でもレベルは最高150までだしね・・・」

アスラ「次は碑文の鍵についてです!!」

碑文の鍵

使用者 アスラ（元は咲能力）

- ・ 八相の力のコントロール
- ・ それぞれのロストウェポンを使ってAIDAを倒すことが可能
- ・ ただし、力を使う度に破壊衝動が使用者を襲う（咲はこの破壊衝動をコントロールさせる事が出来ていた）

ハセヲ「こんな感じか？」

作者「破壊衝動ってどんな感じ？」

アスラ「そうだな・・・AIDAに感染した時の感じに似てるよ」

ハセヲ「お前もよく無事だよな」

作者「さ、早く終わらせたいから次に行こう」

名前 忍冬すいかすむ

種類 インテリジェントデバイス↓ユニゾンデバイス

特徴

- ・インテリジェントデバイスの頃の待機状態は双剣のアクセサリが付いたネックレスだった
- ・アスラのデータドレインでユニゾンデバイスになる
- ・ユニゾンデバイスになってからは普段は志乃の姿をしている（帽子と服は違う）
- ・ユニゾン中は前の待機状態のネックレスになる（ここが、リイン達と違うところです）
- ・ユニゾンしている時は武器の強化やロストウェポン使用時による破壊衝動を少し抑えている

作者「忍冬の詳細でした」

アスラ「忍冬はけっこう変わったねー」

忍冬「主が原因ですよ」
ハセヲ「お前が原因だ」

作者「次は謎多きアスラの姉、咲についてだよ」

本名 麻鬼あまき 咲さき

年齢 22

リアルの特徴

- ・髪は薄茶色で目は黒。髪は肩ぐらいまでの長さ
- ・CC社に勤めているが、今は病院で入院しているので休んでいる
- ・The Worldプレイ中に意識不明となったが、最近意識が回復した（現在、病院でリハビリ中）

PC名 サキ

職業 ブレイド 斬刀士

レベル 150

使用する碑文 特に無し

PCの特徴

- ・髪と目共に紫色で、髪はリアルと同じ長さ
- ・元碑文の鍵の所有者で、AIDAに倒されるときにアスラへと所有権を変えた

・アスラのロストウェポン”調和ヲ保ツ光ト闇”の制作者いわゆるチート

作者「少しは咲について分かったでしょうか？」

ハセヲ「お前の姉ちゃんも櫛と同じタイプか？」

アスラ「さあ？でもCC社に勤めてたから、チートは出来るし・・・ま、櫛と似てるかも！」

ハセヲ「次はアスラのロストウェポン”調和ヲ保ツ光ト闇”についてだな」

作者「一番謎が多いかな？・・・たぶん」

変化刃”調和ヲ保ツ光ト闇”

碑文名 無し（第零相）

使用者 アスラ・咲

特徴

- ・名前の通り、刃が変化するロストウェポン
- ・日本刀、双剣、大剣、大鎌、拳当、呪杖、魔典、妖扇、銃剣の9つに変化させることが出来る

・アスラが現在使えるのは日本刀・双剣だけで、制作者の咲はもちろんすべて使いこなせる

・ハセヲ達のロストウェポンを使うと破壊衝動が襲うが、第零相のロストウェポンを使うといつもよりも強い破壊衝動が襲う

アスラ「やつぱ姉ちゃんの武器はすごいなー」

ハセヲ「見た限りじゃ、デメリットの方が多いな・・・」

忍冬「本当、咲さんもすごい物を作りましたね・・・」

アスラ「リスクはあるけど、私には必要な力だしね・・・」

作者「さ、最後の説明いくよ!」

アスラ「最後はG・Uの主人公、ハセヲについてだよ!」

本名 みづき 三崎 亮 じやう

年齢 17

リアルの特徴

- ・髪は茶色つばい黒で目も黒。髪は少し長めで肩ぐらいまである アスラ
- ・麻鬼蓮奈と幼なじみで同じ高校に通っている

PC名 マルチウエボン ハセヲ

職業 錬装士

レベル 150

使用する碑文 第一相『死の恐怖』 スケイス

PCの特徴

- ・髪は銀で目は赤い

・服はほとんど白色。昔は黒に赤い線や模様がある服だった
・櫂のチートで双銃を使用することが可能になった
使用ロストウェポン 死ヲ刻ム影

作者「終わったー!!」

アスラ「お疲れさま」

忍冬「いっぱい書きましたね」

ハセヲ「次が無いことを祈るぜ・・・」

アスラ「以上、補足コーナーでした!」

作者「次回は本編に戻ります!!お楽しみに!!」

a c c e s s : E R R O R しばしの休息 (後書き)

補足でした。

今回の説明でも分からないことなどありましたら、遠慮なく言っ
て下さい！！
すぐにお答えします。

access:12 機動六課のある休日(後編)

アスラはなのは達が現場に行くのを見送った後、ロビーに戻っていた

忍冬「で、この後どうするつもりなんですか？」

アスラ「あれ」の手がかりが掴めそうな奴が出てきたら、すぐに現場に行く」

忍冬「女神」のお願いですね？」

アスラ「不完全とはいえ、碑文のコピーを持つてるドッペルゲンガもどきを放っておくわけにはいかないしね・・・」

アスラは目を瞑り、集中する

すると、アスラの周りに紫色の光が浮かびだした

アスラ「次元の扉・・・第二フェーズまで完了・・・これより、第三フェーズに入る」

アスラと忍冬だけが聞こえる声で、アスラは呟いた

忍冬（A I D Aを操る者・・・嫌な感じがします）

忍冬は現場のモニターを見る

そこでは、ハセヲ達が地下から来るガジェットとレリックを探すために地下に潜っていた

キヤロ「来ます！小型ガジェット、六機！！」

スケイス 六機の内二機にA I D A反応！

ハセヲ「お前等、下がってろ！一気に終わらせてやる！！」

ハセヲは双銃をしまい、ロストウェポンの大鎌を出す
ガジェットが見えた瞬間、ハセヲは攻撃するためにガジェットへ近づいていった

ハセヲ「環伐式閃！！」

ハセヲを中心に円陣を何度も描き、周囲のガジェットを破壊する
そして、二機だけその場に残る

ハセヲ「これで、終わりだあああつ！！」

大鎌を振り抜き、A I D Aに感染していたガジェットも破壊される
キャロ「この周辺のガジェットはすべて破壊しました」

ティアナ「さ、先へ急ぐわよ！」

ティアナが指示を出した後、ハセヲのすぐ近くの壁が突き破られた

「あらかたのガジェットは潰してきたわ！」

スバル「ギン姉!!」

ティアナ「ギンガさん!!」

ギンガ「一緒にレリックを探しましょう」

しばらくガジェットを倒しながら進んでいくと、広い場所にたどり
着いた

手分けして探しているとキャロがレリックを発見した

カンッ、カンッ、カンッ、カンッ、カンッ……

ティアナ「何、この音？」

ハセヲ「・・・キャラー！！シールドを張れ！！」

ハセヲの声と同時にキャラは謎の敵に攻撃された
すぐにエリオが見えない敵に攻撃する

キャラ「！あぁっ！！」

キャラが気づいたときには紫の髪の子がレリックを持っていた
キャラは取り返そうと女の子に近づくが、魔法弾によりエリオと一
緒に吹き飛ばされてしまう

その隙に召喚獣は攻撃しようとするが、スバルとギンガで足止めする
女の子はその間にレリックを持ちだそうとするが、姿を消していた
ティアナに捕まる

そしてその後、別の人物からの攻撃がスバル達を襲った
ティアナはこの場を離れようとする女の子を魔力弾で撃つが、いつ
の間にか移動した召喚獣によって防がれる

「まったくもー！私達に黙って勝手に出かけちゃったりするからだぞ
！ルールーもガリユウも」

ルーテシア「アギト・・・」

ハセヲは音を立てずに一瞬で三人の懐に入り、双銃を向ける
周りにいた全員、ハセヲが何をしたのか分からず一瞬驚く

ハセヲ「死にたくないなら、動くな」

ハセヲは三人に殺氣を向ける

対象の三人以外もハセヲの殺氣で背筋が凍り付く

ギンガ（何、これ！？）

スバル（こ、怖い！？）

ティアナ（これが・・・死の恐怖！？）

エリオ（いつもの兄さんと別人！！）

キャロ（体が、動かない！！）

ガリユウはルーテシアを抱えて後ろに下がり、アギトはハセヲに炎を放つ

ハセヲはすぐに炎を撃ち消し、三人を睨む

ハセヲ「まだ、やるつもりか？」

アギト「ルールー、何か近づいてきてる！魔力反応は・・・でけえ
！！」

ハセヲの殺氣で皆が固まっている間、ヴィータとリインが近くまで来ていた

そして、スバル達がいるところの天井を突き破り、ヴィータ達が到着した

ヴィータはガリユウを吹き飛ばし、リインはルーテシアとアギトを

捕獲する

しかし、三人には逃げられていた
すこしすると、崩壊が始まったのでスバルのウイングロードで地上
に脱出していった

忍冬「ビンゴ・・・主！目標を確認！！」

アスラ「分かった、私達も転送で現場に行こう！！」

アスラの言葉と共に、足元に転送の光が浮かぶ

忍冬「へりに向かって砲撃を撃つつもりです！！」

アスラ「へりの座標、確認完了！強制転送、開始！！」

転送の光は二人を包み込み砲撃の対象になっているへりへと転送し
ていった

フォアード達は外に出て、二人の確保に成功していた
召喚獣はルーテシアが元に戻したのでここにはいない

ルーテシア「・・・逮捕はいいけど、大事なへりを放って置いて良
いの？」

スペース 大魔力砲撃がへりへ向けられてるぞ！！

ハセヲ「今からじゃ、間にあわねえ!!」

ルーテシアはもう一言呟く

ルーテシア「あなたは・・・また、守れないかもね」

ルーテシアの声が聞こえた後、魔力砲撃がへりへと放たれた

あるビルの屋上

そこに二人の少女がいた

一人は栗色の髪を二つに結んでいて、眼鏡をかけている
もう一人は茶色の髪を後ろのリボンで一つに結んでいる

二人ともの共通点は、体のラインがはっきり分かる青紫色のスーツを着ていること

「どおー？この完璧な計画」

「黙って、今命中確認中」

茶色の少女は相当な距離離れているへりが落ちているか確認する

「え・・・まだ飛んでる」

へりの前には紅い髪を風になびかせる少女が立っていた

「あらー」

「こっちもフルパワーじゃないとはいえ、まじで？」

二人は上から砲撃が来たのに気づき、すぐに避ける

なのは「見つけた!」

フェイト「あなた達を逮捕します」

スーツを着た二人は逃げだす

すぐになのはとフェイトが追いかける

「IS発動、シルバーカーテン」

二人はフェイト達の目の前から消える

フェイト「はやて!」

はやて《位置確認、詠唱完了!発動まで、あと4秒!》

なのは「了解」

なのは達ははやてからの念話を聞き、追っていた二人から離れていく

「離れていく・・・何で?」

「・・・まさか!」

眼鏡をかけている少女は異変に気づき、上空を見上げる

そこには、広域空間攻撃を放とうとしているはやてがいた

はやて「遠き地にて、闇に沈め・・・デアボリック・エミッシヨン

「!!」

砲撃が二人を襲う

なんとかはやての攻撃を避けていくと、なのはとフェイトが砲撃準備をして二人を囲む

「ディエチ、クアットロ、じっとしていろ!!」

ディエチ・クアットロから少し離れたところに紫の髪で、二人と同じスーツを着ている女性がいた

「IS発動、ライドインパルス!!」

フェイト「トライデント・・・」

カートリッジをロードする

フェイト「スマッシュャー!!」

なのは「エクセリオン・・・」

同じく、なのはの方もカートリッジをロードする

なのは「バスター!!」

黄色と桃色の砲撃が二人を襲う
直撃したように見えたが、逃げられていた

紫の髪の女性は、二人を連れて先ほどの場所から離れたところに来ていた

クアットロ「トーレ姉様ー、助かりましたー」

ディエチ「感謝・・・」

トーレ「ぼーとするな、さっさと立て」

トーレ達はそのまま仲間の元に行こうとする
すると、三人の前に薄い青がかった光が現れた

トーレ「何だ!?!」

そして、光が収まると紅い髪の少女が立っていた

ディエチ「こいつ、さっき私の砲撃を防いだ奴!?!」

アスラ「・・・やっと、見つけたぜ!?!」

アスラが目を開けると、いつもよりも紅い、血のような目をしていた

クアットロ「な・・・何!？」

トーレ「体が、動かない!？」

ディエチ「一体・・・何者だ!？」

アスラ「・・・私の目的はただ一つ・・・スカリエッティに話がある」

アスラは紅い目で三人を睨みつける

今の姿は昔のハセヲより凄かった

トーレ達三人はアスラの殺気で”死の恐怖”を感じていた

トーレ《クアットロ、あれを使う!》

クアットロ《え!?!あれを使うのですか!?!》

トーレ《使わなければ、私たちが死ぬだけだ!!!》

ディエチ《・・・了解、手早く済ませよう》

三人は覚悟を決め、アスラに立ち向かおうとする

アスラ「・・・私とやり合うつもりか？」

トーレ「ドクターの元へは行かせん!!!」

三人は黒いカプセルを取り出し、それを飲み込んだ
すると、三人の体から黒い泡があふれ出す

アスラ「馬鹿が・・・私はお前達や、スカリエッティを助けようとしていたんだよ・・・」

三人は自らA I D Aに感染した

アスラ「丁度いい・・・ついでに最近溜まっていた破壊衝動を少し
発散させてもらおう」

忍冬「ユニゾン・イン!!」

トーレ「オマエハ、ココデコロス!!」

ディエチ「ワルイケド、テカゲンハデキソウニナイ」

クアットロ「サヨウナラ」

忍冬「双剣」忍冬「セツト!!」

アスラの手に双剣が現れる

アスラ「手加減はいらない。むしろ本気で来ないと死ぬぞ?」

アスラとトーレ達A I D A感染者達の戦いが始まった

ヴィータは本部へレリックと召喚師を逃がしてしまったことを報告していた

しかし、敵が持っていたレリックの箱の中身は空で、本体はキャラクターが持っていた

ハセヲ「へえ、よく考えたな」

ステイス 確かに、こいつなら一番敵との接触が少ないから、レリックを持つておくには適役だな

キャロ「ありがとうございます」

ティアナ「場の雰囲気と言いくかつたんですよ」

スバル「言うのが遅くなってすみません！」

ヴィータ「ま、結果オーライだな」

リン「はいです」

レリックを確保したことを知り、場の空気が緩み出す

ステイス A I D A 反応！！ここから結構距離が離れてやがる！！

ハセヲ「分かった。皆！俺はこれからA I D A 反応があった方に向かう！」

『了解！／分かった！』

ハセヲがA I D Aの方へ行こうとするとアスラから通信が入った

アスラ「ハセヲ！死にたくないのなら来るな！！」

ハセヲ「お前、何やってんだよ！！」

アスラの目を見てハセヲはアスラに言う

ハセヲ「そんな状態になって、どう止めるつもりだ！？俺しかいないだろ！！」

スバル達やヴィータはアスラの状態をみて、驚くことしかできない

ティアナ「まえ、見たときよりも・・・紅い！」

スバル「光が・・・無い・・・」

スバルの言うとおり、アスラの目は血のように紅く、ティアナの時のように目に光がなかった

まるで、ガラス玉のようにただ光を反射しているだけの目だった

アスラ「・・・これからやることは、”管理人”としての仕事だ。

ハセヲはそっちでみんなを守ってやってくれ」

アスラはハセヲの返事を聞かずに通信を切った

ハセヲ「・・・無理すんなよ」

ハセヲはその場に残り、スバル達と六課の隊舎に帰っていった

アスラ「さて、だいぶ楽になってきた」

忍冬 この子達のお陰でほとんどの破壊衝動を消費したと思いますよ

アスラの中にずっとたまっていた破壊衝動は、トーレ達のお陰でほとんど消費していた

その代わり、トーレ達の方はかなり痛めつけられていた

アスラ「忍冬、出力リミッター第三までリリース」

忍冬 了解

アスラは第五から第三まで魔力出力を下げる
目も元の銀に戻る

アスラ「さて、遅くなったけど・・・三人をAIDAから助けるよ
！！」

トーレ「コイツ・・・マダ、ウゴケルノカ!？」

ディエチ「アタシタチモ、ホンキダッタノニ・・・」

クアットロ「ホントウニ、ニンゲンナノ!？」

三人はAIDAに感染しているが、意識はずっと保っていた

アスラ「忍冬、第二相・・・発動!!」

忍冬「了解。呪杖”陽炎ト踊ル乙女”セツト!!」

アスラの手に呪杖が握られるのを見て、トーレは呟く

トーレ「コイツ・・・ドレダケノブキヲカクシモツテイルンダ!？」

トーレ以外の二人も思っていた

アスラは破壊衝動を消費させる為に戦っているとき、

双剣・大鎌・大剣・魔典・妖扇

全部で5つの武器を使って戦っていた

アスラ「少し痛いと思うけど、我慢してね!」

アスラは呪杖を構える

するとアスラの足元に浮かんだ魔法陣が三人の元へ移動する

アスラ「光の矢よ、すべてを打ち抜け・・・レイザス!!」

光の矢はトーレ達の体を突き抜け、AIDAだけ消していった
三人はそのまま意識を失い、その場に倒れる

アスラ「ふー、やっと一段落だね」

アスラはそのまま忍冬とのユニゾンを解除する

忍冬「とりあえず、目が覚めるのを待ちましょう」

アスラ「我が手に癒しの力を・・・リプス」

三人は薄い翠色の光に包まれる

アスラの回復魔法により、三人の怪我は回復した

アスラ「今思っただけで、魔力ってさ、”気魂”で回復するかな？」

忍冬「試してみたらどうです？」

アスラ「よし！試してみよう」

アスラはずっと使わないまま放置していたアイテム”気魂”を取り出す

The WorldではSPが回復するだけなのだが、ここではSPの代わりに魔力が回復するかもとアスラは考えた

アスラ「さて、どうだ？」

しばらく三人を見ているとディエチが目を覚ました

ディエチ「・・・あれ、魔力が少し回復してる」

アスラ「それ本当！？」

アスラはディエチに顔を近づける

ディエチ「顔近い・・・って！あんだ！！」

ディエチはアスラを認識し、自分を殺していないことに驚く

クアットロ「ディエチちゃん、うるさいわよ・・・」

トーレ「頭痛がひどいな・・・」

ディエチの驚いた声で、残りの二人も目を覚ました

アスラ「おお！気魂が効いた！！」

忍冬「主、戻ってきて下さい。三人が引いています」

アスラ「どう？まだ魔力足りない？」

クアットロ「まさか・・・私達の魔力を回復させたのはあなた？」

アスラ「うん、そうだよ！はいっ！」

アスラは三人に”帝の気魂香”を使う

今のアイテムのお陰で三人の魔力は全て回復した

トーレ「一体、何のつもりだ？」

アスラ「私は、スカリエツティに用があるって言ったよね？」

ディエチ「・・・用って何なんだ？」

アスラ「スカリエッティを助けに行きたい」

三人『!?!』

アスラ「スカリエッティはAIDAに感染している」

トーレ「まさか」

デイエチ「ドクターが変わったのは」

クアットロ「AIDAのせい!?!」

アスラ「悪いが、急いでスカリエッティのAIDAを駆除したい！
場所を、教えてもらえるか？」

トーレ「・・・分かった。ただし!」

アスラ「・・・何？」

トーレ「必ずドクターを救うと私達の仲間の前で誓え!!」

トーレは一つだけ、アスラに伝える

アスラ「ああ! あんた等の仲間にも誓うし、今あんた達にも誓う！
私は、必ずスカリエッティをAIDAから救ってみせる!!」

ディエチとクアットロは頷き、トーレも頷く

トーレ「私に掴まれ！」

クアットロ「ドクターの所に案内しますわー！」

ディエチ「私達は、今それしか出来ないからね」

アスラ達はスカリエツティの所へ向かっていった

アスラ（AIDAで作られるドッペルゲンガー・・・まだ完成して
いなければいいけど）

忍冬《今の間に次元の扉の封印を解除しましょう》

アスラ《うん、サポートお願い》

アスラはトーレにおんぶして運ばれているので、アスラは次元の扉
の封印を忍冬と一緒に解除する作業に入る

扉解除まで、あと7段階・・・

access:12}機動六課のある休日(後編)}(後書き)

アスラ「後書きコーナー!」

ハセヲ「今日はナンバーズのトーレ・クアットロ・ディエチの三人に来てもらったぞ」

トーレ「じゃまするぞ」

クアットロ「呼んでくれてありがとね」

ディエチ「感謝」

作者「トーレはno.3、クアットロはno.4、ディエチはno.10だね?」

ディエチ「ああ。三人の中では私が一番年下だ」

ハセヲ「お前等って全員そのスーツみたいの着てるのか?」

トーレ「ああ」

.....。

作者「話が続かなくなったので、今回はここまで」

忍冬「感想などありましたら気軽に書いていって下さい!」

作者「お気に入りして下さいる方も、本当にありがとうございます」

ます！！」

忍冬「これからも作者が頑張ると思うので、よろしくお願いします」

作者「実は今度テストがあるんだよねー」

忍冬「勉強しなさい！！」

access:13 戦いとその後

アスラはトーレ達に連れられて、スカリエッティのアジトに来た

トーレ「着いたぞ」

アスラ「忍冬！」

忍冬「やはりAIDAに感染しています」

「どちら様？」

アスラの後ろに水色の髪の少女が立っていた

アスラ「うお！ー！いつの間に！ー！」

トーレ「堂々と嘘をつくな」

クアットロ「セインちゃん、この人はアスラ」

セイン「どーも、セインだよ」

アスラ「よろしく」

和やかな雰囲気漂う

本当に戦闘するする気なのか？とトーレは思う

トーレ「ほかの奴に連絡は済んだか？」

ディエチ「うん。でも、こっちには来れそうにないって」

アスラ「ナンバーズは4人か・・・」

アスラはどうスカリエッティと戦うか考える

「もう一人いますよ」

クアットロ「ウーノ姉様!？」

ウーノ「初めまして。この子達の姉のウーノです」

アスラ「アスラだ。よろしく」

簡単に挨拶を済ませ、アスラは作戦を伝える

アスラ「たぶん私以外にはAIDAは倒せない。だから、私とスカリエッティが対一が出来る状況を作ってほしい」

トーレ「一人で大丈夫なのか？」

ウーノ「今のドクターは何をするか分かりません」

忍冬 いざという時の事は考えてあります

デイエチ「私は言われたことをきちんとこなせば良いんだね」

アスラ「ああ！真正面から行く・・・気を抜くなよ！！」

『分かつてる！／了解／分かりましたあー／分かったわ！』

アスラはそのままスカリエッツィの所に乗り込んだ

スカリエッツィは待っていた・・・アスラが来るのを
正確には、彼の中にいるAIDAが待っていた

アスラ「スカリエッツィ！いるか！？」

アスラの声を聞き、中にいるAIDAは暴れ出す
この場所には嫌な空気が漂っていた

スカリエッツィ「待っていたよ・・・”管理人”」

アスラ「へえ・・・あんたの中にいるAIDAは、私と知り合いたいだね」

アスラは静かに武器を取り出す

スカリエッツィ「さあ、始めよう！楽しい祭りを！！」

そして、スカリエッツィは完全にAIDAに飲み込まれる

アスラ「祭りなら、まずは唐揚げを食べないとね！！」

この場に不似合いな言葉を叫びながら、アスラはスカリエッツィに斬りかかった

武器は最初からアスラのロストウェポンだ

アスラ「夜叉車！！」

刀を抜刀してから切り上げる

手ごたえはあったが、あまりダメージは無いようだ

アスラ「随分と、丈夫だね！！」

何度も懐に入り、斬りつける

しかし、彼のAIDAに変化はほとんど無い

アスラ《ディエチ！頼む！！》

念話で指示を聞いたディエチはISを発動させる

ディエチ「ISヘヴィバレル、発射！！」

隙についてディエチは砲撃を撃つ

アスラ「どうだ？」

煙が舞い、前が少し見えなくなる
煙が少し晴れて見えた先には、ダメージをくらっていないスカリエ
ッティがいた

スカリエッティ「ジャマヲシナイデクレ！！」

スカリエッティは叫んだ後、ある者を呼び寄せる

アスラ「あ、あれって！！」

ナンバーズの前に現れたのは黒い影だった
それは徐々に人型になり、ナンバーズになった

アスラ「ドッペルゲンガー……」

クアットロ「私もう一人！？」

ウーノ「どうなっているの！？」

アスラ「それは自分の影！！能力や力や魔力も全て同じ！！」

忍冬 どうしますか？

アスラ「一刻も早く、終わらせよう！！」

忍冬 了解！出力リミッター第七まで解除！！

アスラの魔力が跳ね上がる

スカリエッティ「トキハミチタ」

スカリエッティの周りに八つの魔法陣が現れる
その魔法陣は一つ一つ色が違っていた

アスラ「完成、していた!!」

そして、その魔法陣からは碑文使い達のドッペルゲンガーが現れた

忍冬 主!!

アスラ「第八までしか解除できてないけど、やるよ!!」

アスラは忍冬を構えながら、詠唱を始める

アスラ「我は鍵を持つ者なり・・・女神より受けし力で眼前の異質な物を破壊せよ・・・全ては平和を取り戻すために!!」

詠唱が終わると紫の魔法陣が八つ現れる

光は紫から自分達の色に変わっていく

光が弾け飛び、アスラの目の前には”神”がいた
スカリエッティとアスラは神の空間にいる

アスラ「ごめんね？無理矢理主人達から離れさせて」

スケイス 今更気にすんな

イニス お久しぶりです

メイガス あの变态から少しでも自由をくれてありがとう

フィドヘル 管理人は何も悪くない

ゴレ 久しぶり、管理人さん！！

マハ また会えてうれしいよ

タルヴォス 敵はどこ？迅速に片づけるわ！

コルベニク 早く終わらせましょう

ここに八相全ての碑文が揃った

アスラ「みんなで一斉にデータトレイン、いける？」

『もちろん！！』

アスラは碑文達に向かって笑い、そしてスカリエッティの方を見る
ドッペルゲンガー達はAIDAを守るかのように立っている

アスラ「忍冬、データトレインが終わったら・・・」

忍冬　止めに大きな一発を撃つ、ですよね？

アスラは笑ってAIDAを見る

アスラ「あの子達の大切な人を、無くさせたりしない！！」

『データドレイン！！』

碑文達全員のデータドレインがスカリエッティとドッペルゲンガーに向けて放たれる

アスラ「これで、終わりiiiiiiiiっ！！」

データドレインによりスカリエッティに隙が出来た
その間に、アスラは一気に距離を詰め攻撃をする

アスラ「閻魔大車輪！！」

自分のロストウェポンでスカリエッティのAIDAを斬る
AIDAはあっさりと斬れ、そして消滅した

アスラ「次元の扉、封印」

次元の扉を再び閉め、アスラはナンバーズの元へ向かった

ウーノ「皆、大丈夫？」

トーレ「なんとか」

クアットロ「姉様達は大丈夫ですかー？」

ディエチ「一応、無事だよ」

セツテ「というか、アスラはどうなったの？」

ナンバーズ達はアスラとスカリエッティを探すると、向こうから黒い影が迫ってきた

ウーノ「まだ、消えていないの!？」

アスラ「へ？何が？」

そこに居たのは、武装を解除したアスラと、アスラに連れてこられたスカリエッティだった

『ドクター!!』

アスラ「今、回復するね」

アスラは呪杖を出し、全員に回復魔法をかける

アスラ「全ての者達に癒しの光を・・・ラファリプス」

その場にいる全員を薄翠の光が包み込む

アスラ「回復、終わりっ！」

呪杖をしまい、みんなでスカリエッティが目を覚ますのを待つ

ウーノ「あの・・・これもAIDAと言うものなのですか？」

ウーノはアスラに黒いカプセルを見せる

少し前、トーレ達が使った物だ

アスラ「ええ。それを使うとAIDAに感染しますね」

トーレ「もう、それは使いたくない物だ」

アスラ「普通なら、AIDAを自由に操る事なんて出来ない。けど、この世界ではそれが可能になった・・・」

忍冬「AIDAはこの世界で確実に進化していますね」

ちなみに、アスラは忍冬とのユニゾンを解除している

いきなり忍冬が出てきても、ナンバーズ達は特に驚かなかった

ウーノ「他の妹達もこれを持っているのですが、どうしたら良いのでしょうか？」

アスラ「うーん・・・とりあえず、燃やしてみる？」

アスラは適当に答える

ウーノ「では、燃やしてみてください」

おふざけで言っただつものアスラはウーノや他のナンバーズの反応を見て、少し驚く

だって、本気で答えてきたもん!!

忍冬「一応試してみたらどうです?」

アスラ「うん・・・やってみようか・・・」

アスラは魔典をとりだし、詠唱を始める

アスラ「焼き尽くせ・・・バクドーン」

AIDAが入っているカプセルの上に、炎の玉が落ちる

カプセルはそのまま燃え尽き、炭になった

忍冬「AIDA反応、消滅しました」

アスラ「うつそー!本当に燃えちゃったよ・・・」

スカリエッティ「何だ・・・随分騒がしいが・・・」

『ドクター!!!』

スカリエッティ「君達・・・無事だったのだな・・・」

ウーノ「ドクター、今はお休みください・・・ドクターの体はボロボロですから」

スカリエッティ「そうか・・・ところで、そこにいる子は誰かな?」

セイン「ドクターや私達を助けてくれた人なんですよ!」

アスラ「初めまして、アスラと言います」

スカリエッティ「そうか、君が今の”碑文の鍵”の所有者なのか」

アスラ「何故、それを知っている」

スカリエッティ「A I D Aの意味がずっと君を捜し求めていたからね」

A I D Aには意思が宿り始めているとスカリエッティはアスラに話し始めた

そして、自分も体に乗っ取られていたとはいえ、碑文の力をコピーしたドッペルゲンガーを作り出してしまったと話していた

アスラ「もしかしたら・・・碑文使い以外でも、A I D Aを倒せるようになったかもしれない・・・」

忍冬「それ、本当ですか!？」

アスラ「というか・・・眠い・・・」

アスラはそのままぶっ倒れる

忍冬「あ・・・次元の扉でほとんど力を使い果たしたこと、忘れてた・・・」

ナンバーズやスカリエッティまで慌て始める

忍冬は貴重な場面だなーと思いながら見つめていた

クアットロ「と、とりあえず！どこかに運ばないと！！」

ウーノ「え、ええ！トーレ、ディエチ、アスラを医務室に運んであげて！！」

セイン「ド、ドクター！」

スカリエッティ「きっと大丈夫だろう・・・たぶん」

その日、アスラが六課に帰ることは無かった
ハセヲはスケイスから聞いていたので、普通に帰ってくるのを待つことにした

次の日の朝

アスラは目を覚ますと見慣れない顔がアスラを見つめていた

アスラ「えっと・・・おはようございます」

「・・・・・・」

ピンクの髪の少女は黙ってアスラを見続ける

アスラは強い視線に何かプレッシャーを感じて、思わず黙り込む
しばらく沈黙した状態が続いたが、少女が話し始めたため空気は変わった

「初めまして、no.11のウェンディっす！」

アスラ「は、初めまして」

ウェンディ「あ、ドクターに目が覚めたって伝えて来るっすね!!」

ウェンディはそのまま部屋を出ていく

忍冬「よく寝ましたね」

アスラ「ごめん、忍冬・・・睡魔には勝てませんでした・・・」

忍冬「不完全な状態で扉を無理に開けるからですよ」

アスラ「すみません・・・忍冬にも、無理させました」

忍冬「はい。次同じ様な事はしないで下さいね」

「あんたがドクターを助けたアスラ？」

アスラ「うおっ!!いきなり声をかけないでよ!!」

「わ、悪かったな・・・あたしはn o . 9 のノーヴェだ」

赤毛の少女、ノーヴェは簡単に自己紹介をする

アスラ「んで、何か話したいこともあるの?」

ノーヴェ「ありがとう・・・ドクターやみんなを助けてくれて」

ノーヴェはそれだけ言って部屋を出ていった

アスラ「ハセヲの女版みたいな子だねー」

しばらく忍冬と話していたら、スカリエッティとナンバーズがやってきた

ナンバーズの中には知らない顔も何人かいる

スカリエッティ「具合はどうだい？」

アスラ「ただの疲労で倒れただけだから、ばっちり全快！」

ウーノ「それはよかったです」

スカリエッティ「一応、君に私の娘達を紹介したいのだが、いいかな？」

スカリエッティは今までナンバーズ達をただの”作品”だと思っていた

だが、昨日の出来事でナンバーズ達一人一人が大切なものだを知り、作品ではなく娘と言うようになった

グウウウ・・・

スカリエツティ「おや？」

アスラ「いやー、昨日朝ご飯しか食べていないもので／＼／」

ウーノ「丁度食事の用意は出来ています。妹達の紹介も食事をしながらにしましょう」

アスラ「ありがとうございます！」

一同は食事が出来る場所に移動していった

アスラは食堂のような場所に来ていた

ナンバーズ達は12人いるから、用意されている量も多い席に座り、食事を始める

すると、食事を初めて数分後・・・女同士のバトルが始まったま、いわゆるおかずの取り合いだ

ノーヴェ「ウェンディ！そのおかずはあたしのだー！」

ウェンディ「早いもん勝ちっすよ、ノーヴェー！」

アスラ「チンク、そこの春巻き取ってくれ」

チンク「分かった・・・ほら」

白の髪の少女―no・5のチンクはアスラに春巻きを渡す

アスラ「ありがとう！」

セイン「あ！！アスラ、その春巻きはあたしが取ろうと思っていたのに――！」

アスラ「・・・早いもの勝ちだよ、セイン」

アスラは黒い笑みを浮かべてセインに言う

隣にいたチンクはアスラの周りの黒いオーラを感じ、鳥肌がたつ

忍冬「いつもこんな感じなんですか？」

ウーノ「まあ、そんな感じですね・・・今日はアスラも加わっていつもよりヒートアップしていますね」

トーレ「昨日の戦いが嘘のようだな」

オットー「そうだね」

デイド「しかし、こんな日もいいです」

no・8のオットー、no・12のデイドは静かにおかず取りの

様子を見つめる

スカリエツティ「彼女のおかげで、今日の食事はいつもより雰囲気
が明るいな」

スカリエツティはナンバーズの様子を見ながら少し笑う

セツテ「アスラ殿、その唐揚げを取ってもらえませんか？」

アスラ「はい、どうぞ」

アスラはno.7セツテにおかずを渡す

そこからまた新たな戦いが始まる

おかずが無くなるまで続く戦いを忍冬は見つめていた
そして、心の中で思う

忍冬（食べ過ぎだろ）

ディエチ「・・・ミートボール、ゲット」

『あっ！！それは私のだ！！』

楽しい時間はゆっくりと過ぎていった

access:13 戦いとその後 (後書き)

アスラ「いつものキャラ対話のコーナー!!」

ウェンディ「今回もナンバーズのあたし・ノーヴェ・オットー・デ
イードっすよ!!」

作者「いらっしやい!」

オットー「呼んでくれて感謝」

デイド「同じく、感謝です」

アスラ「早速質問!みんなはドクターのことを、どう思ってるの?」

ノーヴェ「ん・・・改めて考えると、少し困る」

ウェンディ「私はお父さんって感じっすね」

オットー「・・・」

デイド「・・・」

アスラ「二人もまだよく分かんない?」

二人「うん・・・」

作者「ま、みんなドクターが好きなんだね」

アスラ「良いことだね!」

ウェンディ「あ……あたし達ドクターに呼ばれたのもう帰ります！」

ノーヴェ「また呼べよ！」

作者「りょうかい」

アスラ「いつも読んで下さる方、ありがとうございます」

オットー「これからも」

デイド「よろしく願います」

a c c e s s : 1 4 〱 新たな仲間 〱 (前書き)

第一章は今回で終わりです。

access:14 新たな仲間

朝ご飯を食べ終え、アスラはまた睡魔と格闘していた

忍冬「主、部隊長に報告しなくて良いのですか？」

アスラ「ああ！！忘れてた！！」

アスラは叫びながら立ち上がるので、周りにいたナンバーズは少し驚く

アスラ「絶対”お話”コースだよ・・・死んじゃうよ・・・」

なのは「アスラ？何一人で呟いているのかな？」

アスラ「あ、あ・・・悪魔ーーーーー！！」

バタッ

アスラはそれだけ叫んでから倒れた
きれいな効果音付きで

忍冬「すみません、なのはさん。主の代わりに私とスカリエッティ

で軽く説明しますね」

なのははこの場にスカリエッティがいると聞いて、驚いている
なのはの後ろにいたはやてとフェイトも通信モニターの方にやって
くる

忍冬「まず最初に、この一連の事件にスカリエッティはほとんど関
与していません」

フェイト「詳しく聞かせて」

忍冬「スカリエッティはAIDAに感染していた。ま、昔起こした
事件とかは関係ありませんけど・・・AIDAはスカリエッティの
技術で”影”を作り出してしまった」

はやて「影って何や？」

忍冬は昨日の戦いで現れたドッペルゲンガーを映し出す

忍冬「これは私たちの影・・・通称”ドッペルゲンガー”。これは、
影に近づくと近づいた人の影となり・・・襲いかかる」

なのは「それって、AIDAで出来てたりする？」

スカリエッティ「ご名答。その影達はAIDAその物だ」

ハセヲ「だが、対抗策はある・・・だろ？」

忍冬「さあ？主はもう一度次元の扉は開くとは言っていましたが・
・」

はやて「忍冬、とりあえず六課に帰ってきてや!」

スカリエッティ「出来れば私達もそこでお邪魔になりたいのだが・・
」

フェイト「どういうことだ!？」

忍冬「今、A I D Aに襲われかけているんですよ」

忍冬達の後ろをよく見ると、黒い泡がうじゃうじゃいた

ハセヲ「おい、さっさとアスラ起こせ!！」

ハセヲの指示を聞き、ノーヴェが叩き起こす

ノーヴェ「あんた十分寝ただろ!！」

アスラ「んー・・・忍冬。第五相、発動」

ノーヴェの一撃で何とか目が覚めたアスラ
ぼんやりしたまま魔典を構え、詠唱を始める

アスラ「燃え尽きろ・・・オルバクドーン」

A I D Aを炎で焼き消す

アスラ「ハセヲー、これ見てどう思う?」

ハセヲ「ロストウェポン使ってるから、分かるわけねえだろ!！」

アスラ「あっそっかー！ディエチ、ウエンディ！AIDAに攻撃してみてよ」

二人はアスラに言われた通り、攻撃準備に入る

ディエチ「IS発動、ヘヴィバレル」

ウエンディ「IS発動、エリアルレイヴ」

二人は砲撃をためていく

二人「発射！」

砲撃は目の前のAIDAに直撃し、そして消滅していった

アスラ「さて、どう思う？」

ハセヲ「・・・俺達以外にもAIDAを倒せるようになったんじゃないの？」

三人の攻撃で、AIDAは半分まで数を減らすことが出来た

はやて「とにかく、そこにいる人等みんな六課に来てええから、早く脱出しー！」

アスラ「了解です」

アスラは通信を切る

ナンバーズ達はスカリエッティを囲むように立っている

一人一人の固有装備を構えて・・・

アスラ「まずは、外に出よう！」

アスラも武器を魔典から双剣に武器を変え、一番前に立つ

アスラ「よし！機動六課に向けて出発だ！！」

機動六課部隊長室

そこに、前線メンバーが勢ぞろいしていた

ハセヲ「スケイス、前に戦ったAIDAの画像とか映像、あるか？」

スケイス ああ、あるぜ

スケイスはその場にAIDAの画像を出していく

微生物みたいなから巨大な蜘蛛の形をしたものである

はやて「これは？」

ハセヲ「ま、AIDAの種類だな。この微生物みたいなのが”Anna”、たぶん一番力がないAIDAだな」

なのは「ねえ、AIDAは進化してるって言ってたよね？種類とかまだあるのかな？」

ハセヲ「知るか、そんなこと」

フエイト「フォード達や私達も倒せるようになったなら、これらの戦いが少し楽になるね」

ハセヲ「そんなことねえよ。戦いはきつと、前のガジェット以上のAIDAが数で攻めてくるだろうな」

スケイス まだ確証もねえのに、そんな事思ってた方がいいのか？

はやて「うーん・・・やっぱアスラの帰りを待つしかないか・・・」

アスラ「ただ今帰りましたー！！」

『早っ！！』

ハセヲ「早かったな」

アスラ「ナンバーズのみんなに運んでもらったんだ！」

スカリエッティ「お邪魔するよ」

スカリエッティは自分が犯罪者と知っていながら、堂々とフエイト達の前に現れた

フエイトはずっと追っていた相手なので、すこし表情を堅くする

ウェンデイ「さすがに私達が入ると狭いつすね」

チンク「こればかりはしかたない」

はやて「あの・・・どちらの団体さんや？」

スカリエツティ「私の娘達だ。一人居ないが、もう少ししたら帰ってくると言っていたよ」

アスラ「この子達をまとめて”ナンバーズ”って言うんだよ」

ウーノ「no・1のウーノです。no・2のドゥーエは今ここにいません」

トーレ「no・3のトーレだ」

クアットロ「no・4のクアットロですー」

チンク「no・5のチンクだ」

セイン「no・6のセインだよ」

セツテ「no・7のセツテです」

オットー「no・8のオットー」

ノーヴェ「no・9のノーヴェだ」

ディエチ「no・10のディエチだよ」

ウェンデイ「no・11のウェンデイっす!」

デイド「no・12のデイド」

一気に11人の自己紹介が終わる

人数が多いので、皆もすぐには覚えられないようだ
スバルの頭から少し煙が見えるのは気のせいだろう

ウーノ「これから、お世話になります」

アスラ「この子達が寝れる部屋ってある？」

はやて「まあ、ぎりぎりやけどな」

ウーノ「ありがとうございます」

アスラは一段落ついてから、はやてに今後の事について話す

アスラ「ハセヲも話してたけど、私達以外もAIDAを倒せるようになった。けど、”Anna”を倒せるだけじゃ、前とほとんど状況は変わらない・・・そこで、助っ人を呼ぶことにした」

はやて達は助っ人なんか居るのか？みたいな顔をしている

アスラ「心配しなくても、皆AIDAに対しての知識・そして戦闘経験は豊富だから!!」

ハセヲ「あいつ等か・・・」

アスラ「とりあえず、はやて達の方が一段落ついたら”訓練場”に集合！」

はやて「分かった。フェイト隊長、スカリエッティの方は任せます」

フェイト「了解」

フェイトはスカリエッティを連れて、部屋から出ていった
アスラはなのはと一緒にナンバーズ達の部屋へと案内する
その間、フォード達とハセヲは訓練場で模擬戦
はやても仕事に取りかかる

なのは「じゃあハセヲ、新人達の方はお願いね」

ハセヲ「明日からの訓練に支障がねえ程度に痛めつけてやる」

ハセヲの発言で苦笑いのフォアード陣

アスラ「あ、はやてさん！助っ人全8人の部屋も用意お願いできませんか？」

はやて「男と女、それぞれ何人ずつや？」

アスラ「女が4人、男が4人・・・いや、女5人です！」

はやて「了解。それくらいなら、ぎりOKや」

アスラ「ありがとうございます」

アスラはそれだけはやてに言ってから、なのは達と合流した

ノーヴェ「アスラ、部屋のメンバー決め・・・どうするつもりだよ？」

アスラ「ふふふっ・・・丁度今から決めるよ」

ディエチ「いつの間に用意したんだ？」

アスラはポケットから折り畳んだ紙を取り出す

ちなみに余談だが、今のアスラはパーカーに長ズボンという格好をしている

アスラ「部屋のメンバーは、あみだくじで決めまーす！」

なのは「部屋は3つあるから、4人ずつになるよ」

ナンバーズは順番に名前とあみだの横棒を2本引いていく
全員の名前を書いたのを確認すると、アスラは別の紙にメンバーを
書き写していった

なのは「じゃ、メンバーの発表は各自の部屋に着いたら教えるね」

アスラ「ま、楽しみにしててよ！」

なのはは少ししか時間は経っていないが、ナンバーズと打ち解け始
めていた

セイン「アスラー、助っ人の人達ってどんな人なんだ？」

アスラ「うーん・・・いろんな意味で変人が多いかな？」

なのは「そういえば、さつきはやてちゃんに部屋の確保を頼んでい
たとき、最初言ってた人数より1人増えてなかった？」

アスラ「私の姉ちゃんですよ。すっかり存在を忘れてました！」

ウェンディ「アスラのお姉さんって、どんな感じの人なんっすか？」

アスラ「チート屋」

『へっ?』

アスラ以外の反応です

アスラ「改造大好き、みたいな人」

なのは「あ、とりあえず着いたよ」

なのは話を变える

アスラ「この部屋のメンバーは・・・トーレ・セツテ・オットー・
ディエチの4人だよ」

ノーヴェ「比較的静かな奴が集まったな」

なのは「次はここ!みんなの部屋は隣同士なんだよ」

アスラ「この部屋は・・・ウーノ・ドゥーエ・クアットロ・ディー
ドの4人」

ウェンディ「ここも、静かな人達っすね」

アスラ「最後は・・・チンク・セイン・ノーヴェ・ウェンディの4
人だよ!」

セツテ「こちらは賑やかになりそうですね」

トーレ「物を壊すなよ」

メンバー発表も終わり、これから隊舎案内をしようかとアスラは思っていた

すると、はやてから仕事が終わったと通信が入った

なのは「それじゃ、訓練場に行こうか」

ナンバーズ達と一緒に、簡単に案内もしながら訓練場に向かった

アスラ達が訓練場に着いた時にはほとんど揃っていた
ただ、ハセヲだけが見えなかった

はやて「あれ、ハセヲは？」

フェイト「どこにいるのかな？」

辺りを見ると、ハセヲの叫び声が微かに聞こえてきた

なのは「あ！ハセヲも来たよ！！」

ハセヲはスケイスに引つ張られながら来ている

スケイスが手を放したら、すぐに逃げ出しそうだな

なのは・フェイト・はやての三人は、ハセヲが逃げないように無言でバインドをかける

アスラ「さて、全員揃ったんで・・・始めます」

アスラが目を瞑り集中し始めると、足元に八つの魔法陣が現れた

アスラ「我は鍵を持つ者なり・・・女神より受けし力を持つ者よ、
全ては平和を取り戻すために・・・再び集え！！」

詠唱が終わると、紫の光はそれぞれの碑文の色へ変化していった
白・黄色・オレンジ・青と赤・紫・ピンク・青そして銀・・・
それぞれの光の中から、再びAIDAと戦うために
G・U・・・碑文使いがこの場に揃った

大きな白い帽子をかぶった少女から話し始める

「第二相」惑乱の蜃気楼」イニスと呪癒士のアトリ」
ハーヴェスト

「第三相」増殖」メイガスと銃戦士のクーン」
スチームガンナー

「第四相」運命の預言者」フィドヘルと妖扇士の八咫」
ダンスマカブル

「第五相」策謀家」ゴレと魔導士の朔望」
ウォーロック

「第六相」誘惑の恋人」マハと斬刀士のエンデュランス」
ブレイド

「第七相」復讐する者」タルヴオスと拳闘士のパイ」
グラップラー

「第八相」再誕」コルベニクと銃戦士のオーヴァン」
スチームガンナー

「元第零相”碑文の鍵”所有者、斬刀士^{フレイド}のサキ」

『A u r aの意志と共に、再び力を使います!!』

アスラ「みんな・・・久しぶり!!」

G・Uのメンバーと咲は、ハセヲとアスラの元へ駆け寄っていったのは達はただ、その光景を見守っているだけだった

シグナムはG・Uメンバーを見て、戦いたいなと密かに思っていた
G・Uメンバー達とハセヲ・アスラとの会話をどうぞ!

アトリ「ハセヲさん!! やつと会えましたー!!」

ハセヲ「アトリ、離れろ!!」

エンデュランス「ハセヲ・・・もうこの腕を離さないよ・・・」

アトリとエンデュランスはハセヲの腕にしがみついている
そのハセヲの隣では、双子の姉弟がいる

朔「ハセヲ! さっさとエン様から離れや!!」

赤いランドセルの様な鞆を背負っているのが朔
黒い鞆の方は望である

本来は一つのPCなのだが、この世界では二人別々になった
朔と望がこうして面と向かって話すのは初めてである

望「朔・・・本当に朔だ！」

望は一人で喜んでいる

朔は・・・ハセヲにいろいろ言っている

パイ「久しぶりね、アスラ」

アスラ「パイ！久しぶり、元気してた？」

ピンクのツインテールに眼鏡をかけている女性・・・パイは、ハセヲ達のやりとりを少し見た後アスラの元へ来ていた

パイ「ま、リアルの方は相変わらず忙しいわ」

アスラ「咲姉ちゃんはいつそっちに戻れそう？」

アスラの姉、咲

咲はCC社の社員で、パイと同じ所で働いている

パイ「あと一ヶ月って所ね」

アスラ「八たも来てくれてありがとう」

八咫「Auraではないとはいえ、君もAuraの意志を継いでいる者だからね・・・それに、君にはいろいろと貸しもある」

アスラ「貸しなんかあったっけ？」

話していると、ずっと会いたかった人物がやってきた

元黄昏の旅団ギルドマスター、オーヴァンと姉のサキだ

オーヴァン「アスラ・・・久しぶりだな」

アスラ「私よりも、先にハセヲの方に行つてあげた方が・・・ハセヲ喜んだと思うよ？」

サキ「まあ、顔には出さないだろうけどね」

オーヴァン「それより、俺がここにいる事に対して、驚かないのかな」

オーヴァンは彼の碑文の力・・・”再誕”によつてPC自体が崩壊した

再誕の力でハセヲとアスラもPCをほぼ全て崩壊した
ま、ハセヲとアスラは櫂のお陰で何とかだったが

アスラ「今更、オーヴァンに対して驚く事なんてないよ」

アスラがオーヴァンに対して答えた後、オーヴァンは離れていたなのは達の方へ吹き飛ばされていた

アスラ「あれ、オーヴァン？」

サキ「綺麗に飛んでいったねー!!」

ハセヲ「何でここにいんだよ、オーヴァン!!」

はい！

彼を殴り飛ばしたのはハセヲ君です

アトリ達は何事もなかったかのようにオーヴァンを拾いに行く
なのは達は、いきなり吹っ飛んで来たオーヴァンをただ見つめるこ
としかできなかった

アスラ「さて、あの変態色眼鏡は生きているかな？」

アスラはハセヲやアトリ達の方へ向かう

サキ「あいつはそう簡単に死なないと思う・・・」

サキもその後を追っていった

アスラ「近いうちに、大きな戦いが始まる・・・」

アスラの呟きは誰にも聞こえないまま、消えていった

機動六課とG・U・メンバー等の戦いは、もうすぐ始まる
悲劇の物語は、知らない間に進み始めている

access:14 新たな仲間 (後書き)

アスラ「キャラ対話のコーナー!」

ハセヲ「今回は・hack//G・U・より、朔と望に来てもらったぞ」

朔「何でエン様やのーで、ヘタヲがおるんや!」

望「アスラお姉ちゃん、ハセヲ兄ちゃん久しぶり」

アスラ「朔も望も久しぶり」

ハセヲ「おい、誰が”ヘタヲ”だ、誰が!」

作者「ハセヲと朔の口喧嘩もときは終わらないから、アスラと望と一緒に進めて行こっか」

アスラ「本編ではやつと碑文使い達が全員出てきたね」

作者「最初の予定では、一番最後に出す予定だったんだよね」

望「予定は未定だね」

作者「望・・・やつば可愛い!」

アスラ「作者? あんまり望を虐めると・・・あなたに真つ赤な華を咲かせますよ?」

作者「すみませんでしたあ!!」

望「そういえば、次元の扉を開くための詠唱・・・前スカリエツテイの時とは違っていたよね？」

アスラ「まあ・・・前回の目的と今回は少し違うからね」

作者「目的によってちよつとだけ内容が変わるんだよ」

望「そうなんだあ」

アスラ「というか、あっちの二人放っててもいいわけ？」

作者「いや、あれは作者の力では止められませんよ」

望「朔、楽しそうだなあ」

作・ア「あれが!？」

望「あ・・・作者さん、危ないよ？」

作者「へっ?って!何でこっちに向かって火球が飛んでくんの!？」

アスラ「あーあ。作者が焼け死んだらこの小説終わっちゃうよ」

望「きっと大丈夫だよ、アスラお姉ちゃん」

アスラ「とりあえず、作者が焼けてしまったので今回はここまで!」

望「更新が遅くなってごめんなさい・・・」

アスラ「話的に次回から第二章に入ります」

望「今度は早く更新できるようにがんばるよ！」

アスラ「望、それは作者がやることだよ」

望「また次回、絶対に会おうね！」

a c c e s s : 1 5 } 作戦会議 (前書き)

今回は内容が短いです。

access:15 作戦会議

ハセヲとアスラ、そしてG・U・メンバー達の再会も終わり、本題に入っていた

はやて「アスラ、この人達が”助っ人”の人等やね？」

アスラ「はい」

サキ「あんさ、どういう状況な訳？」

アスラはサキにこの世界の状況を説明する
AIDAが碑文のコピーを持つ”ドッペルゲンガー”を作り出したこと

そして、これからの敵はThe Worldの時とは違うAIDAと戦うことになること
そして、機動六課の戦力を簡単に説明した

アスラ「ま、簡単に説明したけど、これが今の状況」

パイ「これはThe World以上の被害が出る可能性もあるわね」

オーヴァン「進化したAIDAを倒すには、普通の力では”Anna”や”Oswald”が限界だろう」

アスラ「そこで！みんなというか、サキと八咫とパイとオーヴァンに相談があるんだよ！」

八咫「彼女達にAIDAに対抗できる方法を考えて欲しい・・・と言ったところか？」

アスラ「ご名答！何とか出来そう？」

パイ「そうね・・・今すぐには思いつかないわ」

アトリ「あの・・・さっきからたくさん”共鳴”する様な音が聞こえるんですけど・・・」

その場にいる全員がアトリの方へ振り向く

ちなみに、アトリとエンデュランスはハセヲの腕に抱きついたままだ

サキ「まさか・・・碑文と”共鳴”してる！？」

オーヴァン「その可能性は高いな」

八咫「確認する価値は十分ある」

サキ「よし！実際に確かめてみよう！！」

アトリの発言で、機動六課メンバーがAIDAと対抗するための力に一步步近づいた

サキ「第一回、”AIDA対抗作戦会議”――！！」

ドンドンドンッ！

パフッパフッ！！

ハセヲ「古っ！」

サキ「さて、んじゃ説明するよ。まず、ハセヲ達”碑文使い”の皆さんには”アバター空間”を作ってもらいます」

アトリ「それだけで良いんですか？」

サキ「うん。あとは向こうの人等次第だからね」

サキはアスラに碑文のリミッターを第三まで解除するように指示する

サキ「で、六課の皆さんはハセヲ達8人の中で一番自分の内にある何かが引きつけられるような人の所へ行って下さい。まーやってみればわかると思うので」

なのは達やナンバーズはそのままサキの話を聞く

サキ「まず、これから作る紙の空間にいる”神”が見えるかどうか確認して下さいね」

アスラとサキの合図で、ハセヲ達は自分の碑文を呼んだそして、神の空間・・・アバター空間が展開した

はやて「なんや・・・これ!？」

スバル「これが、碑文？」

ティアナ「その場にいるだけで威圧感を感じるわ・・・」

チンク「これがAIDAに対抗できる唯一の力だったのだな・・・」

ウエンディ「大きいっすね!!」

それぞれいろんな感想を言っていた

彼女達の目の前にいるのは”神”の一種だ
ほとんどの人が見とれている

サキ「さて、第二段階へ進むよ!」

アスラ「自分が体の内から引かれるところに行ってみて」

各自は引かれているところを探すために、ゆっくり歩き始めた
最初に適合する因子を見つけたのは”キャロ”だった

キャロ「これ・・・かな？」

アトリ「そうみたいですわね」

キャロは第二相と適合した

アスラ「やっぱりキャロは第二相だったか」

サキ「確か・・・援護系の魔法が得意なのよね？」

アスラ「フルバックのキャロ・・・戦い方はアトリと同じなんだよ」

二人が話している内に、ウーノ・クアットロの2人が適合因子を見つけた

第八相の方に2人はいた

オーヴァン「君達で間違いないようだな」

ウーノ「その様ですね」

オーヴァンの所にThe Worldでなら優秀なハッカーになれたであろう人が集まっている
いや、この世界でも十分優秀だ

パイ「貴方達に私の碑文が反応しているから、貴方達が適合者ね」

パイの元にはスバル・セツテ・ノーヴェの3人がいた

ス・ノ（胸でかー！）

セツテ「これからいろいろとお世話になります」

パイ「気にしないで」

スバル「あの、^{グラップラー}拳闘士で何なんですか？」

パイ「簡単に言えば”格闘家”よ。拳や蹴りで主に敵を攻撃するの

よ
」

ノーヴェ「あたしと同じ戦い方だな」

スバル・ノーヴェはパイと同じ様な戦い方をするから、いろいろパイが教えていくだろう

ティアナ「あの・・・私って、たぶんここに引かれていますよね？」

なのは「えっと・・・確かクーンさんですよね？」

クーン「ああ！！よろしくな！！」

クーンは今日一番の笑顔でなのはとティアナに話しかける
クーンの悪い女癖だ

はやて「えっと、ここかな？」

ディエチ「ここだと思っけど・・・」

朔「お、碑文が反応したる！」

望「たぶん、この人達だね」

今ここに最強の関西人が集まった

朔「ウチは朔。こっちは望や！」

望「よろしくね・・・」

はやて「二人共かわええなー！」

ディエチ「同感だ・・・」

二人は朔と望の顔をじっと見つめていた

ハセヲ「お前等が適合者が・・・」

フエイト「いろいろよろしくね」

ヴィータ「何か納得できねえ・・・」

デイド「よろしく願います・・・」

残りの人達も、個人差はあったが全員適合因子を見つけてることが出来た

【第一相】

フエイト・ヴィータ・デイド

【第二相】

キャロ・シャル・ザフィーラ

【第三相】

なのは・ティアナ・ウェンディ

【第四相】

チンク・セイン・オットー

【第五相】

はやて・ディエチ

【第六相】

シグナム・エリオ

【第七相】

スバル・トーレ・セツテ・ノーヴェ

【第八相】

ウーノ・クアットロ

アスラ「じゃ、当分の間は各自の碑文使いのみんなからAIDAの
対抗策とかの話を聞いてね」

サキ「あと、それぞれの戦闘能力を上げるために、碑文使い達と模
擬戦を毎日やつてもらおうよ」

六課の皆は碑文使いであるハセヲやアスラの強さを知っているので、
サキの一言で顔が青くなっていく
ナンバーズ達は六課の反応を見て、いかに碑文使い達が強いかを知
った

サキ「じゃ、まず最初は六課の人から始めようか！」

アスラ「なのはさん。模擬戦の準備、お願いします」

なのは「にやははは・・・了解、です」

なのははモニターを開き、模擬戦の準備を始めた

サキ「さて、こっちもやりますか!!」

サキもモニターをいくつか開く

サキ「彼女達にピッタリなロストウェポンを作るわよ!!」

アスラは一人、姉のサキを見ながら不安でいっぱいだった

アスラ（ロストウェポン使用時の副作用・・・あれを皆背負っていかないといけないの?）

忍冬《主、どうかしましたか?》

ユニゾンを解いた忍冬が、念話でアスラに話しかける

アスラ《オリジナルのロストウェポンを作るってことは、あの副作用もついてくる・・・》

忍冬《破壊衝動・・・ですね?》

アスラ《あんな思いや痛みは私だけでいい・・・けど、そんなこと言ってられない・・・》

忍冬《大丈夫ですよ!》

アスラ「え・・・今、何て？」

アスラは忍冬の返答に思わず声を出してしまう

サキ「・・・副作用のことか？」

そして、その声でアスラが何を考えていたのか、サキはすぐに分かった

サキ「安心しな。たぶん、あの子等に副作用は出ない・・・必ず、副作用がないように作る！！」

サキもいつもとは違い、真剣な眼差しだった

アスラはサキを見て、姉の覚悟を知った

アスラ「うん・・・サキ姉ちゃんに任せるよ」

サキ「今回はオーヴァン等やこの世界の人達もいる・・・きっと、完成させることが出来る！だから・・・信じて！」

サキはアスラの方を見て言う

アスラ「信じるよ」

アスラもサキの方に向き直し、答えた

二人の会話が終わった後、なのはから準備が出来たと通信が来た

access:15 作戦会議 (後書き)

アスラ「キャラ対話のコーナー!」

忍冬「今回はサキさんとオーヴァンさんに来てもらいました!」

サキ「遊びに来たよ!」

オーヴァン「作者の姿が見えないが、何かあったのか?」

ハセヲ「さあ?何か今回は参加できませんって紙が置かれてただけだからな・・・俺は知らねえ」

忍冬「あ、置き手紙の裏にも何か書いていますよ」

サキ「やる事が無くなったら、次回予告して終わってくれ・・・だそうよ?」

アスラ「・・・やること、無いよね?」

ハセヲ「そうだな・・・」

忍冬「今回は短いですが、次回予告して終わりましたよ」

サキ「碑文使い達と軌道六課・ナンバーズ達の戦いが始まる」

オーヴァン「圧倒的な力で皆は敗北する」

サキ「そして、今すべきことを理解する」

オーヴァン「次回、
”力の差
”・・・楽しみにしていってくれ」

access:16 力の差

碑文使い達との模擬戦は、機動六課から始めることとなった
六課の方はシャルとザフィーラを除いた9人で行う

一方、G・Uの方はハセヲ・クーン・朔望・パイの4人だ
残りの四人はこの後行うナンバーズ達との模擬戦で戦う

アスラ「それでは！Ready・・・Go！！」

そしてアスラの合図で模擬戦が始まった

ハセヲ「おらあああっ！！」

ハセヲは双剣でスバルに攻撃する

スバルは避けるが、少しハセヲの攻撃を食らってしまった

両方のチームの一番離れているところでは、遠距離魔法が得意な3
人が砲撃の準備をしていた

はやて「来よ、白銀の風・・・天よりそぐ矢羽となれ！」

朔「燃え尽きろ！」

望「飲み込め、水龍！」

はやて「フレースヴェルグ!!」

朔「オルバクドーン!!」

望「オルリウクルズ!!」

はやてを飲み込もうとしていた水龍をはやての砲撃が突き抜け、その砲撃はそのまま朔望の所へ行くが、朔の巨大火球により砲撃が消える

この3人は魔法の打ち消し合いをしていた

別の場所ではクーンとなのは・ティアナとが戦っていた

なのは「ディバイン・・・バスターアアア!!」

クーンはそのまま少しだけ動き、ディバイン・バスターをぎりぎりで避ける

顔はいつものように笑ったままだ

ティアナ「クロスファイヤ・・・シュート!!」

クーンが避けてすぐに、20発ぐらいのオレンジの弾丸がクーンを襲う

土煙が舞い、なのは達はクーンがいた方を見つめる

クーン「いやあ、さっきのはちょっとひやつとしたね！」

土煙の中から現れたのは、無傷でケロッとしているクーンの姿だった

なのは「やつぱり、ハセヲ達と同じくらい強いね！」

ティアナ「気を抜いた瞬間・・・やられるのは、こっちね」

なのはとティアナは念話で作戦を考え、クーンの元へ向かっていった

アスラ「どう？みんなに合ったやつ、作れそう？」

サキ「誰に物言ってるのよ！私がこんなにも戦闘データがある状況で作れないと思う？」

アスラ「いや、思わないね・・・」

サキはアスラの前に21人分のデータを出す

そこには、各自のロストウェポンの大まかな構造が書かれていた

サキ「現時点では、これらが最適な形かな？」

アスラ「うん・・・これで良いと思う」

サキ「あとは、あの”デバイス”と”IS”について私が理解した

ら完成だね」

アスラ「デバイスについてはシャーリー。ISについてはスカリエッティが教えてくれると思うよ」

アスラはサキが出した画面を閉じ、模擬戦の方を見る

勝敗は元から分かつてはいたが、思っていた以上に六課のメンバーが残っていた

現在、残っているのは・・・

フェイト・なのは・シグナム・スバル

この4人だけだ

アスラ「さて、残り少ない魔力でどう切り抜けるか・・・見物だね」

ハセヲ「あとこんだけだな」

クーン「俺達相手に、よくここまで残ったよなー」

ハセヲ達碑文使いの皆はほとんど無傷でなのは達の前に立っていた

なのは《フェイトちゃん、この状況を変えることができる方法、思いつく?》

フェイト《魔力もほとんど残ってないから・・・状況を変えるのは難しいかな?》

スバル《私も厳しいですね・・・》

シグナム《あやつら・・・やはり、強い！！》

一方、碑文使い達は・・・

パイ「あの子達・・・思っていたより強いね」

朔「エン様の方がもっと強いわ！！」

ハセヲ「いや、エンデュランスと一緒にすんなよ」

クーン「いやゝゝ、なのはさんの砲撃は怖いよゝ」

望「クーンお兄さん、頑張って」

パイ「さあ！そろそろ終わらせるわよ！！」

パイの一言で、5人は動き出した

サキ「あの4人、頑張ったんだけどね」

アスラ「まあ、”今”はまだ勝てないよ」

サキ「止めに行かなくていいの？」

アスラ「ああ・・・行ってくる」

そのままアスラは戦場に向かって行った

ハセヲ「そろそろ、終わらせる!!」

ハセヲはロストウェポン”死を刻む影”を装備し、スバルの元に斬りかかる

スバル「マツハキヤリバー!!」

MC>Protection<

ハセヲ「環伐乱絶閃!!」

普通なら、ハセヲはMCのシールドを破り、攻撃がスバルに当たるはずだった

しかし、その攻撃はアスラによって防がれていた

アスラ「ハセヲ・・・あとで、”PK”しよつか・・・?」

ハセヲ「え・・・ちよつと待てええええ!!」

アスラ「問答無用!!」

アスラは手に持っていた双剣で、ハセヲをPKした

アスラ「まず一人・・・あ、スバル！模擬戦は終わりだから、向こうの方で休んでて」

スバル「は、はい！！」

忍冬「パイさんがシグナムの所で戦闘中。3人の中で、一番危険ですく

アスラ「了解。すぐに行こう！！」

シグナムとパイは剣と拳の戦いを繰り広げていた

パイ「なかなか良い太刀筋ね！！」

シグナム「貴様もだ！」

アスラ「はい、終了！！」

シ・パ「そこをどけ！！／のきなさい！！」

アスラ「パイ、シグナムを全治何週間とかにさせる気？シグナムも、大怪我したらどうする気？」

シ・パ「……………」

アスラ「これから戦うことは何度もある！それまで、お・あ・ず・け、だよー！」

ここの二人は、ハセヲのようにはならず、平和に終わることができたというか、アスラってハセヲの扱い方ひどくない！？

クーンと朔望、そしてなのはとフェイトの戦いは終わりに近づいていた

なのは「はあ、はあ……やっぱり2人共強いねー！」

朔「あんたもなかなか骨があつたでえ」

望「あの砲撃は本当にすごかったよー！」

フェイト「クーンさんも、強いですね」

クーン「君の速さには驚いたよ……何度か見失ったからね」

クーンはフェイトの速さについていけず、何度か攻撃をくらっていた5人の中では、クーンが一番六課から攻撃を受けている

アスラ「クーンさん……あなた、弱くなりました？」

クーン「あ……アスラアアアアア！？」

アスラ「困ったなあ……あなたが六課やナンバーズより弱かったら、私が第三相の相手をしないとイケないんだけど……？」

クーン「すみませんでしたああ！！！」

ザ・スライディング・土下座

クーンはThe Worldでパイとかパイとかアスラとかにしまくっていました

アスラ「さて、今回の模擬戦はここまで！」

なのは「ええ！？まだ、決着とかついていないのに！？！」

フェイト「一体……どうして？」

アスラ「今日の模擬戦はみんなの戦闘データを取るためにやったんだよ。サキ姉ちゃんが終わったから、模擬戦もそこで強制終了」

なのは「なんか……納得できない……」

アスラ「なのはさん・・・ハセヲみたいに、なりたいんですか？」

アスラはなのはとフェイトの前に、PKされて倒れているハセヲを映し出す

それを見た二人は顔が青くなっていく

アスラ「・・・それじゃ、今度はナンバーズの方をやりませんか!!」

なのは達はアスラの後ろについて行き、模擬戦を強制終了させられた

ノーヴェ「何か・・・アスラがおかしくなってるねえか？」

ウェンディ「そ、そうっすね・・・」

クアットロ「お・・・恐ろしいです・・・」

セイン「いやあ、世界は広いね」

セツテ「同感です」

何人かのアスラに対しての感想でした
ナンバーズの隣にいるサキは顔色一つ変えないまま、作業を続けていた

サキ「あ・・・終わったね。さあ、ナンバーズのみんな！！良い戦闘データを見せて頂戴な！！」

トーレ「とにかく、全力を尽くす」

チンク「ま、やれる所までやってみよう」

ウーノ「頑張ってくださいね」

ウーノ・クアットロの2人は戦闘は苦手なので模擬戦には参加しません

サキ「んじゃ、アトリ達もよろしくね」

アトリ「全力で頑張りますよ！」

八咫「出来る限りベストを尽くそう」

エンデュランス「頑張るよ・・・」

オーヴァン「楽しませてもらうよ」

ナンバーズ達と、碑文使い4人は模擬戦会場へと向かっていった

サキ「さあ、こっちの方も気合い入れて行くよ！！」

アスラ「では、第二回戦・・・Ready Go！！」

アトリ「光の矢よ、すべてを打ち抜け・・・レイザス!!」

アトリがオットーに向かってレイザスを放つ

オットー「レイストーム!」

対してオットーは緑色の光線を放ち、アトリの魔法をかき消す

エンデュランス「まず・・・一人」

オットー「!?!」

一瞬でエンデュランスはオットーの後ろに立ち、斬りかかろうとする

トーレ「よそ見をするな!!」

トーレは”IS・ライドインパルス”でエンデュランスの懐に入り、そして斬る!

しかしエンデュランスはトーレの一撃を刀で防いだ

オットー「感謝・・・」

オーヴァン「まだまだ・・・戦いは始まったばかりだぞ?」

今度はオーヴァンが上から突っ込んできたが、ノーヴェが蹴り飛ばした

ノーヴェ「ウエンディ、チンク姉、今だ!!」

ノーヴェが見上げた先には、攻撃準備が整っているチンクとウエンディがいた

チンク「いくぞ、ウエンディ!!」

ウエンディ「3・・・2・・・1・・・発射す!!」

オーヴァンに2人の攻撃は直撃した

彼の一番近くにいるノーヴェは直撃したことを確認していた

ノーヴェ「やったか？」

3人はしばらくの間、土煙を見ながら周囲を警戒していた

オーヴァン「良いコンビネーションだな」

直撃したと思っていたオーヴァンは、無傷の状態で3人の前に現れたしかし、先ほどとは違って、彼の左肩から黒い”刃”の様な物があ

った

その刃からは黒い泡が出ていて、3人はそれが”A I D A”である
とすぐに分かった

オーヴァン「さあ・・・続きを始めよう」

アスラ「こんのっ、どアホ!!」

オーヴァンが攻撃しようと銃を構えた途端、アスラが上からオーヴァンを蹴り落としていった

アスラ「なに堂々と危険な物（A I D A）を出してんのよ!!」

オーヴァンからの返事はない

まあ、顔が地面に入り込んでいるから抜け出すにはかなり時間がかかるだろう

アスラ「ってな訳で、オーヴァンはしばらく戦闘不能です」

さらりと何事もなかったかのような顔でアスラはノーヴェ達3人に話しかける

先ほど、ハセヲも蹴り飛ばしたのを見ている3人や他のナンバーズ達は”絶対にアスラを怒らせたりしてはいけない”と思っていた

八咫「闇よ、すべてを包み込め・・・アンゾット!」

八咫は一人でセイン・セツテ・ディエチ・ディードの4人を相手していた

ディエチ「ヘヴィバレル・・・発射!」

彼女達に襲いかかろうとしていた闇の塊をディエチが打ち抜く
その間に八咫は彼女達に近づき、妖扇で斬りつける
この攻撃はセツテとディードが防ぐ

セインはディエチを連れて近くの建物の中に入り込み、八咫の様子を伺う

セツテ「あまり魔法攻撃はありませんね」

ディード「しかし、隙がない・・・」

八咫「大地の力を・・・ガンボルク!」

セツテとディードの上から土塊が落ちてくる

それに早く気づいたディードが、上の土塊をツインブレイズで斬る

八咫「ふむ・・・反応も良いな」

しばらくの間このメンバーの戦いは続いていたが、この模擬戦もサキが戦闘データをとり終わつたため、強制終了した

access:16 力の差 (後書き)

アスラ「キャラ対話のコーナー!!」

はやて「忍冬とはせをの代わりに来たでえ!」

作者「あと、ゲストも兼ねています」

はやて「まあ、ハセヲがここにおらんのは分かるけど・・・なんで忍冬もおらんのや?」

アスラ「忍冬にはオーヴァンの監視をお願いしているんですよ(黒)」

作者「最近、アスラのキャラがよく分かんないよね」

アスラ「それはあんたのせいだろ!!」

作者「ぬわあああああつ!!」

はやて「ちょ!作者を殺したらあかんで!!」

アスラ「大丈夫ですよ!きっといつか生き返りますから」

はやて(怖い!この子怖いよ!!)

アスラ「では、ここまで読んで下さっている方、本当にありがとうございます」

はやて「更新が遅くて本当にごめんな？」

アスラ「もし、感想や誤字など何かありましたら気軽に書いていつて下さい!!」

はやて「特に感想とか書いてくれたら作者が早く復活すると思うから、よろしく願いします!!」

アスラ「では、また次回♪」

a c c e s s : 1 7 } 今、出来る事 } (前書き)

お待たせしました!!

access:17 今、出来る事

碑文使い達との模擬戦から一日経った今日！

サキはシャーリーとスカリエッティからデバイスとISについて学んでいた

シャーリーとスカリエッティは何度も説明している途中に横道に逸れて、それぞれの良い点をサキに自慢したりしていた

初めはサキも大人しく聞いていたが、途中からは横道に逸れた瞬間、武器を取り出し2人の首元に刃を近づけ、脅しながら説明してもらっていた

一方、その他の方々はアスラを中心に短期間での戦力アップするためのトレーニングを受けていた

今日のメニューは、最初各自適合因子の所でいろいろ個人レッスンをし、最後は模擬戦だった

日に日に皆の動きが良くなっているので、戦闘データはアスラが取り、サキに渡している

アスラ「訓練開始から丁度二時間か・・・」

アスラは手元にあつた画面をしまい、模擬戦を終了させる

アスラ「午前の訓練はここまで！！」

その言葉を聞いた瞬間、皆は自分の武器やデバイスをしまいだす
六課の隊長達は、この世界では強いのだが、ハセヲ達やAIDAな
と比べれば弱い方の部類に入る
ナンバーズ達も、それは同じだった

なのは「やっぱり、なかなか一撃を入れることが出来ないよー」

フェイト「焦りは禁物だよ、なのは」

はやて「まあ、自分のペースでやっていけばええやろ！」

デイド「もう少しで、こつが掴めそうだ・・・」

オットー「僕もだよ・・・」

ウェンディ「いろいろクーンさんから学ぶ事って多いっすよー!」

クーン「そうか？」

ティアナ「私も、いろいろと盗ませてもらっています・・・／／／」

アスラ「じゃ、シャワー浴びたら朝ご飯にしよう!」

フォアード4人『はい!!』

オーヴァン「場所が分からないのだが、教えてもらえるか？」

エリオ「あ、僕が案内しますよ!!」

クーン「ふうー! やつと午前が終わったなー!!」

エリオ達5人はそのままシャワーを浴びに行った

キャロ「アスラ姉さんも一緒に行きませんか？」

アスラ「ごめん、キャロ。私は用事があるから、スバル達と一緒に
行っておいで」

スバル「それじゃ、また後でね!!」

キャロはスバルと一緒に少し離れたなのは達の元へ向かっていった
一番後ろにいるはやては何故かニヤニヤしていた

アスラ「はやてさん・・・何するつもりだ？」

少し不安を残しながら、アスラはサキの元へ向かっていった

シャワー室（女）

ここではとある人物の城となっていた

はやて「待っていた・・・この時をずっと待っていた!!」

不気味な笑い方をしているはやてを見て、なのはとフェイトは凍り
付く

な・フ（やばい!!今のはやては危険だ!!）

はやて「ほな・・・行くで!!」

はやてはキャロとチンク以外のナンバーズやスバル達をバインドで拘束する

トーレ「な、何だ!？」

はやて「何って・・・こういう事や」

トーレ「ーーーーー!!」

はやてはトーレの真正面から彼女の胸を掴む
掴んだ瞬間、はやての顔が暗くなる

はやて「そんな・・・うちよりでかいやとおおおおっ!？」

トーレ「お、おい!いい加減離せノノ!!」

はやての暴走はまだ始まったばかり・・・

トーレの次はセイン・セツテ・ノーヴェ・ウエンディ・ディード・スバル・ティアナ・なのは・フェイトの順で、トーレと同じように触っていった

その間、チンクはキャロの頭を洗っていた

キャラ「何か楽しそうな声がしますね」

チンク「ちゃんと目を瞑っているよ・・・目に石鹼が入るからな／＼」

チンクは現在起きている光景をキャラに見せないように、一人で頑張っていた

機動六課ロービー

エリオ「みんな遅いなあ・・・」

クーン「まあ、女性達はいろいろと大変なのさ」

望「僕、お腹空いたな・・・」

エリオ「もう少ししたら出てくると思うけど・・・」

男性陣はその後20分待たされた

女性陣のほとんどはげっそりとした顔で帰ってきていた

まあ、はやての方は肌がツルツル光っていた

エリオは念話でキャラに聞いてみたが、キャラは何も見えていないためエリオが真相を知ることにはなかった

アスラはハセヲがいる医務室へと向かっていた

部屋に近づいていくと、ハセヲの叫び声が聞こえていた

ハセヲ「やめろおおおおっ!!」

ま、こんな感じですね

アスラ「随分と元気になったねー」

忍冬「主!!」

ハセヲ「アスラ・・・俺に何か恨みでもあんのか？」

アスラ「いや、無いよ」

忍冬「どうかしましたか？」

アスラ「今、訓練場の床にオーヴァンの顔半分が埋まってて、取れないんだよ・・・んで、二人に抜いてきてほしいな」

ハセヲ「おい・・・さすがのオーヴァンでもそれは死ぬぞ」

忍冬「分かりました。今から行つてきます」

忍冬はハセヲを引っ張りながら、医務室を出ていった

アスラ「さて、行きますか」

一人になったアスラは本命のデバイスルームに向かっていった

サキ「これでどうよ!!」

サキはシャーリーとスカリエッツィに、これから作っていく”ロス
トウェポン”の設計図を見せる

シャーリーには機動六課の方、スカリエッツィにはナンバーズ達の
を・・・

二人はしばらく設計図を見て、サキにOKサインを出した

サキ「因子のコピーはこっちが用意する・・・二人には、コピー因
子以外をお願いしたいんですけど・・・」

シャーリー「やります!!」

スカリエッツィ「やらせてもらおう!!」

サキ「ありがとうございます」

サキが二人に詳しい説明を始めると、アスラがやって来た

アスラ「今日の戦闘データ、持ってきたよ」

サキ「お、良いところに来た!!これ見てよ!!」

サキは先ほど二人に見せた設計図をアスラに見せる

アスラ「・・・良いと思うよ」

サキ「よし、朝ご飯食べたらず速つくるぞー!!」

スカリエッティ「こんなにわくわくするのは久しぶりだね」

シャーリー「みんなに負担がかからないよう、素早く・丁寧に作りますよ!!」

サキ「アスラも一緒に朝ご飯食べよう!」

アスラ「元からそのつもりだよ!」

四人は食堂へ向かって行った

アスラの事情を少し知っているシャーリーは、姉妹の後ろ姿を優しく見守っていた

食堂では、スバル達やナンバーズ、碑文使い達がアスラ達四人を待っていた

ちなみに、ハセヲと忍冬もいる

二人で何とかオーヴァンを抜き出すことが出来たらしい

はやて「アスラー、こっちやでー!!」

はやての声に気づいたアスラはそのまま皆の所に行く
周りにあったテーブルをくつつけて、一つの大きなテーブルにしている

テーブルの上にはいろんな料理が並んでいる

そこだけご馳走状態なので、食堂内でかなりうっている

チンク「アスラ、こっちに来るか？」

ウーノ「ドクターもお座り下さい」

アスラとスカリエッティはナンバーズ達の方へ行く

ティアナ「シャーリーさんも、とりあえず座りませんか？」

パイ「サキも早く座りなさい」

最後にやってきた四人が座ると、恒例のあの勝負がやってきた

” 第二回、朝食おかず取り！！ ”

ドンドンどんっ！

パフッ、パフッ！！

パイ「それ、古くない？」

そんなことは気にしないで、今朝の朝食風景をどうぞー！

ハセヲ「はあ・・・」

アトリ「ハセヲさん？ここは戦場ですよ？気を抜いたらおかずが取られちゃいますよ！？」

ハセヲ「普通に食べねえのか、こいつ等は・・・」

ハセヲは本日何回目かのため息をつく

サキ「パイ・・・その”秋刀魚”は私のよ!」

パイ「貴方よりも先に私が取ったわよ!」

上司と部下の争いも起こっていた
というか、パイってこんなことするか?

ノーヴェ「アスラ!あたしが目を離れた隙に”肉まん”取ったな!
!」

アスラ「だから、早い者勝ちだつて!」

デイド「アスラ、私とオットーの分も取ってもらえないか?」

デイドから小皿を貰い、二人分の肉まんを乗せる

アスラ「ほい」

デイド「ありがとうございます」

はやて「スバル・・・この”餃子”はうちの物や!」

スバル「いくらはやて部隊長でも、これだけは譲れません!」

二人が言い争っている間に・・・

セツテ「餃子、いただきます」

は・ス「ああー!!」

セツテに取られていった

セツテ「・・・早い者勝ち、です」

ウエンディ「アトリ・・・行くつすよ!」

アトリ「絶対に勝ちます!!」

この二人は”お好み焼き”を巡って戦っていた
勝負はじゃんけんである

ティアナ「これ貰うわよ」

しかし、ティアナにより勝負は強制的に無くなった

まだまだ戦いはあったのだが、キリがないのでここまで
スカリエッティとウーノは前回と同様、ただ見守っているだけだった
トーレはハセヲと同じように、何度もため息をついていた

黒い部屋

そこは黒しか無い部屋

そこに、二つの黒よりもっと黒い”闇”があった

「”管理人”が次元の扉を開いた」

「そうか・・・ここまでは予定通りだな」

黒い部屋にいくつかモニターが現れる

そこには、アスラを含めた碑文使いたちが写っていた

「さあ、計画を第二フェーズへと進めようか・・・」

「そうだな・・・真の”絶望の物語”を始めよう」

そう言つて、二つの”闇”は消えていった

朝食を食べ終えてから一時間後、六課のアラートが鳴った

なのは「はやてちゃん!!」

なのはは急いではやてと通信を繋ぐ

はやて「”AIDA”や・・・ただ、今までと違って”人”の姿をしとる」

アスラ「ドツペルゲンガー……」

ハセヲ「とうとう来たみてえだな」

フェイト「A I D Aはどこに現れたの!？」

サキ「割り込み失礼。A I D Aの方にはアスラと第一・二・三・七相の碑文使い達に行ってもらう……なのはさん達は六課で待機!」

スバル「たった五人だけで行くんですか!？」

ティアナ「私達に出来ることは無いんですか!？」

サキ「無い。まだみんなのロストウェポンは完成していない……行っても、あの子達の足手まといだよ」

パイ「アスラ、サキ! 転送準備頼んだわよ!!」

アスラ「忍冬!!」

忍冬「ユニゾン……イン!!」

アスラは忍冬とユニゾンし、強制転送の準備を始める

この前、サキが強制転送できる人数を五人まで出来るようにしたこちらの方が、ヘリで現場に向かうより速い

サキ「座標特定完了」

忍冬 了解しました

アスラ「強制転送・・・開始!!」

五人の足元から光が浮かび上がり、そして転送していった

アスラ「なっ・・・!!」

アトリ「これ、全部AIDA何ですか!？」

ハセヲ「結構数があるな」

クーン「アスラ、碑文を第二まで解除してくれ」

パイ「私もお願いするわ」

アスラ「じゃ、少しの間時間稼ぎよろしく!」

アスラの声で、皆はロストウェポンを構える

アスラの周りを囲むように四人は立つ

アスラ「管理者権限発動・・・第一・二・三・七相、第一・二・三・四相・・・一時解除承認!!」

四人は自分達の碑文の鍵が外れたのを確認し、AIDAの所へ向う

アスラ「忍冬!」

忍冬「魔典、”途切れ又螺旋ノ縁”セット!!」

アスラは第五相のロストウェポンを装備し、アトリと一緒に後衛にいく

アスラ「行くよ、アトリ！」

アトリ「はい!!」

アスラ「飲み込め、水龍・・・」

アトリ「風よ、吹き荒れろ・・・」

アスラ「オルリウクルズ!!」

アトリ「ザンローム!!」

水龍と竜巻がAIDAを飲み込み、消滅させる
一瞬だけ出来た隙を三人は見逃さない

ハセヲ「蒼天大車輪！」

クーン「轟雷爆閃弾！」

パイ「虎吼転身撃！」

三人の攻撃で周りにいたA I D Aも消滅し、残り後僅かになる

パイ「このくらいなら・・・ハセヲ、アトリ、クーン！やるわよ！
」

三人「分かった／分かりました／ガッテン！」

四人の体から文様が浮かぶ

ハセヲ《スケイス、やれるな》

スケイス《当たり前だ》

アトリ《イニス、力を借ります》

イニス《無理をせぬように・・・》

クーン《メイガス、頼んだぜ！》

メイガス《しょうがないな・・・》

パイ《タルヴオス、力を借りるわ》

タルヴオス《ええ、一刻も早く終わらせましょう》

四人『データアアアア・・・ドレイイイイイン！！』

四人のデータドレインにより、残りすべてのAIDAは消滅した

アスラ「終わった？」

パイ「・・・アスラ！足元！！」

パイの叫びで全員アスラの足元を見る
そこからは、黒よりも黒い”闇”があった

「 管理人”・・・主の力、コピーさせてもらう・・・」

その闇から”手”の様なものが伸び、アスラの体突き抜けた

アスラ「がっ・・・あああっ！！」

ハセヲ「アスラ！！」

四人はすぐにアスラの元へ走り出した
パイとクーンは闇から出てきた手を捕まえようとするが、逃げられてしまう

アトリ「アスラさん！しっかりして下さい！！」

アトリは回復魔法をアスラにかける

アスラ「アト、リ・・・もう、大丈夫だよ」

クーン「あれは一体何なんだ！？」

パイ「それより、早く帰りましょう。アスラを休ませたいしね・・・」

忍冬「サキさん、そちらから強制転送できますか？」

忍冬は六課と通信を繋ぐ

サキ「もう準備OKよ！・・・早速転送するわよ！！」

少ししてから五人は光に包まれ、六課へ帰っていった

access:17 今、出来る事 (後書き)

忍冬「キャラ対話のコーナー！」

作者「今日のゲストは特にいません！」

アスラ「なら、私の話を聞きなさい！」

忍冬「主、ずいぶんご機嫌ですね・・・」

アスラ「この前ね、木の人さんの小説の主人公・・・想夜に会ったんだよー！！」

作者「快癒の水を届けに行ったときだね」

アスラ「メルゼーさんとも話してきたよ！」

忍冬「楽しかったみたいです」

作者「木の人様はよく想夜に暴王の月の的によくされていますから・・・また、アスラには回復薬を届けてもらっよ」

アスラ「いつでも飛んでいきます！」

忍冬「では、今回はここまで！木の人様、主がお世話になりました」

作者「もしよかったら、今度こっちに遊びにきて下さいな！」

アスラ「待っているよー！！」

忍冬「それから、今回も更新が遅くてすみません・・・」

作者「体と共にこっちもぐだぐだになってしまい本当にすみません！」

アスラ「もし、読んでいてよく分からない所などありましたら、教えてくださいとありがたいです」

忍冬「それでは、また次回お会いしましょう！」

機動六課医務室

そこにアスラとシャルがいた

シャル「特に異常はないわ・・・」

アスラ「心配、かけました・・・」

アスラは先ほど黒い”手”に突き抜けられたところを触る

シャル「やっぱり、何か違和感がある？」

アスラ「違和感というか・・・私の中の”鍵”が小さくなった、感じですね・・・」

シャル「因子とかに私は詳しくないから、後でサキさんに見てもらったら？」

アスラ「そうします」

検査が一通り終わったとき、忍冬が医務室に来た

忍冬「主、検査終わりましたか？」

アスラ「終わったけど・・・何かあった？」

忍冬「サキさんが主に話があると・・・」

アスラ「・・・分かった、案内して。シャルマルさん、お世話になりました」

シャルマル「異変に気づいたらすぐに言ってね」

シャルマルに別れを告げ、二人は出ていった

シャルマル「鍵が小さくなった・・・昨日の”黒い影”と何か関わりがありそうね・・・」

シャルマルは先ほどのアスラの検査結果を見る
そこに、体の異常を表す文字は無かった

デバイスルームに忍冬はアスラを連れていった

忍冬「二人で話をしたいそうなので、私は訓練場に行ってきますね」

アスラ「うん、行ってらっしゃい」

アスラは忍冬を見届けた後、デバイスルームに入っていた

サキ「遅い!!」

アスラ「で、話ってなに？」

サキ「アスラの”碑文の鍵”についてだ」

サキは昨日、アスラが黒い影に突き抜かれているところをモニターに出す

サキ「この時に、鍵が半分”奪われた”」

アスラ「それって・・・」

サキ「でも、あの影が手を抜いた瞬間・・・奪われた半分が”戻ってきた”」

アスラ「そういえば・・・”コピーする”とか言ってた」

サキ「たぶんあの影はA I D Aだろう・・・進化したとはいえ、因子を奪う力は無いようだな」

アスラ「奪えないなら・・・似たものを作ればいいって事？」

サキ「たぶんな・・・」

サキは先ほど出したモニターを閉じ、別のモニターを出す

サキ「で、今度は良いニュース」

そのモニターには”ロストウェポン”を使用している機動六課達とナンバーズが写っていた

アスラ「もう完成したの!？」

サキ「まあ、一応ね・・・昨日アスラ達が帰ってきてから全員にお願いされたんだよ・・・”自分達も、戦わせてくれ!”ってね」

アスラ「お、お疲れさま・・・」

サキ「私はしばらく寝るけど、アスラもロストウェポンの双剣を使いこなして、次の大鎌に移ってよ」

アスラ「うん、今日からまた始めるよ」

サキ「寝終わったら手伝ってあげる」

アスラ「そりゃどーもw」

サキはそのままデバイスルームを出ていった

アスラ「・・・立ち止まる訳には、いかない!」

アスラも部屋を出ていき、訓練場へ向かっていった

「今戻ったぞ」

「そうか・・・どうだった？久しぶりに”管理人”と会って」

「別に・・・ただ、呆れたな」

黒い部屋

そこにいるのは二つの闇だけ
そして二つの声が響きわたる

「呆れた、か・・・」

「そうだ。昔の”私”の方が、強かった」

「まあ、それはお互い様だろう？」

「クククツ・・・そうだな」

「今の”俺”は、昔と比べてはるかに弱い」

「まあ、時が満ちれば元に戻るだろう」

「ああ。戻ってもらわねば困る」

二つの闇は、そのまま部屋から消えていった

六課の訓練場

そこではいつもの模擬戦が行われていた

碑文使い達以外は初めてロストウェポンを使って行っている模擬戦だ
彼・彼女らが負ったリスクは”精神”の消費

それは碑文使い達にも言えることだが、今まで精神を消費すること
がほとんど無かった者達にとって、いきなり精神が消費されること
はとても苦しい事だった

しかし、アスラの”破壊衝動”と比べればまだマシな方である
アスラと違って”精神消費”だけで済んだのは、各自のリンカーコ
アが因子に適合したからだ

忍冬「精神消費ですか・・・さすがに皆さんしんどそうですね」

少し離れたところで、忍冬は模擬戦を見ていた

忍冬「見たところ、少し動きが前より遅いですね・・・相当精神を
消費しているのですね」

現在、碑文使い六人と機動六課とナンバーズ達十八人で模擬戦中
そろそろ終わりが近づいてきた頃、模擬戦を行っている所から少し
離れたところで爆発が起きた

忍冬「まさか・・・主!？」

忍冬や模擬戦をしていた皆も爆発があった方へと向かっていく

アスラ「はあ、はあ・・・」

アスラの手にはロストウェポン”調和ヲ保ツ光ト闇”が握られていた

ただ、いつもと形状は違い、銀の刀身に黒い模様が刻まれた双剣の状態だった

アスラ「最近使ってなかったから・・・思っていたより”あれ”が襲ってくる、な」

目の色は紅と銀が混じったような色をしていた

アスラ「それに、さっき大きな音出したからみんなが来るんだろうな・・・」

アスラはそのまま地面に座り込む

昨日突き抜けられた胸の辺りを押さえながら

アスラ「それと、第零相を使うと・・・なんで”ここ”が痛む・・・」

”主の力、コピーさせてもらう・・・”

アスラ「あの言葉の前に・・・私は何か聞こえたはずなんだ」

昨日、あの黒い手に襲われる前のことをアスラは思いだそうとする

”・・・ぶり・・・・・・・・わ々、シ・・・”

アスラ「！？・・・頭の中から眩かれた？」

忍冬「主！！」

爆発から僅か数分

忍冬をはじめとする、訓練場にいた全員がアスラの元に集まった

アスラ「あれ・・・何でみんなここにいる、わけ？」

忍冬「私無しで・・・使いましたね？」

忍冬から黒いオーラがうつすら見える

アスラ「ちょ、忍冬・・・話を聞いて「問答無用！！」いやあああ
ああっ！！！！」

忍冬はその場にあつた少し大きめの石の固まりをアスラの頭に向けて投げつけた
もちろん直撃です

ティアナ「ア、アスラー！！」

なのは「さすがに、ちょっと・・・」

ハセヲ（志乃ー！？じゃなくて、忍冬ー！？アスラを殺す気かよ・・
・）

アトリ（今から回復したので間にあいますかね？）

クーン（忍冬を怒らしたら危険だ！！）

瀕死のアスラはアトリが回復したおかげでなんとか助かりました
その後は、忍冬の”お話”が始まり、時々聞こえてくるアスラの泣
きも入った叫び声に全員が耳を防いでいた
あの”白い悪魔”と恐れられていたなのはも・・・

忍冬「ハセヲさん、少し良いですか？」

ハセヲ「お、おう・・・」

お話を終えた後、忍冬はハセヲを連れて皆から離れていった

アスラ「やばい・・・気持ち悪いよ・・・」

キャロ「大丈夫ですか？」

エリオ「医務室で休みますか？」

セイン「じゃ、私が運んでくるね！」

アスラは本日二度目の医務室へと運ばれていった

アトリ「とりあえず、食堂行きませんか？」

そして、アトリの提案で残りの皆は食堂へと向かっていった

ハセヲ「で、話って何だよ？」

忍冬「これを、見てもらえます？」

忍冬はある場面を映し出す

ハセヲ「これ・・・”俺”か！？」

そこに映っていたのは”ハセヲ”そのものだった

忍冬「今さっき、サキさんから貰ったものです」

ハセヲ「これは”俺”じゃねえよな・・・」

忍冬「少なくとも、ここにいる”ハセヲさん”ではありません」

モニターに映っているハセヲはXthフォームになる前・・・つまり、3rdフォームのハセヲだった

ハセヲ「これ、いつ現れた？」

忍冬「サキさんによると、以前ティアナのA I D Aを止めていると
きに現れたそうです」

ハセヲ「そつか・・・」

忍冬「そして先ほど、主の偽物も現れました」

ハセヲ「おい、それ本当か!？」

忍冬は新たなモニターを開く
そこに映っていたアスラはいつもの服ではなく、2ndフォームだ
った

これはハセヲも初めて見た

ハセヲ「これ、アスラなのか？」

忍冬「2ndフォーム・・・主がP K K”血に染まる者”として活
動していたときの姿です」

ハセヲ「そいつ、その後どうなったんだ？」

忍冬「しばらくそこに佇んだ後、どこかへ転送していきました」

ハセヲ「まさか・・・昨日の奴と関係があるのか？」

忍冬「分かりません。今は、気を抜かずに毎日を過ごすしか無いで
しょうね」

ハセヲ「ちつ・・・面倒くせえ事になってきたかもな」

古びたビルが立ち並ぶ場所

そこに二つの影があった

その影はだんだん人の形になり、二人の”元P K K”になった

「そっちの因子はどうよ？」

「まあ、なんとか実践も出来るかな？みたいな感じだ」

その場にいるのはP K 1 0 0人狩りを果たした”死の恐怖・ハセヲ”と、自分より高レベルP KなどP K達を無惨に狩っていき、血に染まりまくった”血に染まる者・アスラ”だった

「俺以外の碑文使い達の方はどうだ？」

「今の所順調だ。作戦は予定通り遂行出来ると思うぞ」

「後少しだ・・・後少しで”あいつ”は”俺”になる！！」

「・・・最後まで気を抜くなよ、”死の恐怖”」

「お前こそ、失敗なんかしたらぶっ殺すぞ”血に塗れた破壊者”」

access:18 新たな敵 (後書き)

忍冬「キャラ対話のコーナーです」

作者「今回のゲストはなのはさんだよ」

なのは「呼んでくれてありがとう!!」

アスラ「早速質問しますね!ロストウェポンを使ってみてどうでした?」

なのは「一気に精神が無くなっちゃうから、はつきり言ってしんどいよー」

忍冬「なのはさん、精神はいくらでも強くなれますよ!」

アスラ「私よりも楽だから大丈夫ですよ!!」

なのは「ありがとう」

作者「じゃ、次のしつもーん!」

【ごめんください!!】

なのは「え、誰かな？」

作者「ちよつと見に行ってきますね」

アスラ「誰だろ？」

なのは「私達の知り合いかな？」

作者「二人共、ビックゲストだよ!!」

メルゼー【はじめまして!】

想夜「・・・どーも」

なのは「そ・・・想夜くん!？」

アスラ「あ、メルゼーさんだ!!」

メルゼー【私達の作者からM＊Sさんにと”帝の気魂”を持ってきました!】

想夜「ほら」

作者「木の人様、本当にありがとうございます!!」

なのは「そ、想夜くん・・・私が誰だか分かる／＼／？」

想夜「ま・・・まさか、なのはか？」

メルゼー【なのはさん、随分大きくなりましたね】

想夜（これ、大人になったのはだよな・・・か、かわいい／＼／）

忍冬《なんだかあの二人、良い感じですね♪》

アスラ《ここは私達が見守ってあげようw》

作者《二人共、顔真つ赤だね》

ハセヲ「おい作者、いるか？」

三人《ハセヲ、しいいいいっ！！》

ハセヲ《わ、わりい・・・で、あのピンク色の小さな世界は何だ？》

アスラ《ハセヲ、邪魔したら駄目だよ！》

ハセヲ《しねえよ。つーか、あの世界を壊したら殺されるような気がする》

作者《たぶん・・・殺されるね、なのはと想夜のダブルで》

一方・・・

なのは「あ、えっとね！私、あれから強くなったよ！！」

想夜「そ、そうか・・・」

なのは「ちよっと見ててね！！」

作者「あれ・・・なのはさーん、自分に向けてRH構えていませんか!？」

想夜「じゃ、どっちが強いか対決してみるか？」

なのは「うん!~!」

想夜「メルゼー、セットアップ・・・」

メルゼー【了解w】

作者「忍冬・・・この小説は本日で終わりだ」

忍冬「な、何諦めているんですか!？」

なのは「スターライト・・・」

想夜「メルゼス・・・」

なのは「ブレイカー!~!」

想夜「アロー!~!」

作者「ぎゃあああああああつ!~!」

ハセヲ「どーするんだ？作者死んだぞ？」

アスラ「き、きっと大丈夫よ」

メルゼー【では、私達はこの辺で失礼しますね】

想夜「ま・・・またな／＼」

なのは「うん、またね／＼」

アスラ「木の人さんによろしくね？」

メルゼー【分かりました】

想夜「それじゃ、帰る・・・」

）．．．）

木の人様、想夜とメルゼーの喋り方合っていましたか？
もし違うようなら言ってください！

直ちに書き直しますので！！

帝の気魂はありがたく使わせてもらいます。

またいつでもいいので、遊びに来て下さいね！

access:19〜日常〜(前書き)

今回もグダグダです・・・
本当にすみません・・・

アスラ「あー・・・しんどい」

サキ「聞いたぞ、忍冬に”お話”されたってw」

アスラ「うつ・・・それはしばらく禁句だよ・・・また気持ち悪くなってきた」

サキ「ま、さつさと始めるぞ！一番手間がかかるのはアスラなんだからさ」

アスラ「了解・・・」

アスラは手に争剣を持つ
目は銀から少し紅くなる

サキ「破壊衝動を抑えるために、精神を消費しろ・・・大鎌になったらまた”倍”の負担がかかるぞ」

アスラ「分かって、る！！」

サキ「じゃ、始めよう」

姉妹の対決が始まった

忍冬はサキとアスラの戦いをデータを取りながら見ていた

取っているデータは、破壊衝動がアスラをどこまで侵食しているかだ

破壊衝動は、ロストウェポンを使う度にアスラの体に貯まってい
それを消費するには、体を侵食してくる衝動に任せて戦うこと
そして、少しでも破壊衝動を減らす為に、精神を使用時に消費して
いる

今アスラが行っている訓練は

- ・精神力の上昇
- ・破壊衝動の発散

この二つを同時に行っている

ロストウェポンを使いながら精神力を上げ、破壊衝動に半分身を任
せながら発散していく・・・

この方法は、サキが提案した

忍冬「この訓練を始めてから半日・・・最初と比べると随分安定し
てきましたね」

この訓練を始めたのは昨日の昼から

忍冬「大鎌に移るまで、そんなに時間はかからないでしょうね」

ハセヲ「じゃ、そろそろ模擬戦を始めるぞ」

ハセヲは”死ヲ刻ム影”を取り出し、構える

フェイト「今回こそ、一撃入れよう！」

ヴィータ「おう!!」

デイド「もちろん」

三人も自分達の武器を構える

ハセヲ「ルールはいつもと同じ・・・10分間の間に俺に一撃入れたらお前等の勝ち。出来なかったら俺の勝ちw」

フェイト「・・・始めよう」

第一相達の模擬戦が、幕を開けた

オーヴァン「一ついいか？」

ウーノ「何でしょうか？」

オーヴァン「はっきり言って、俺は二人に教えることは無いのだが・・・」

クアットロ「ウーノ姉様♪」

ウーノ「ええ、分かっているわ・・・」

二人はオーヴァンから離れていく
そして、勢い良く走ってくる

オーヴァン「おや・・・体が動かない」

二人『いっぺん、死んで下さい!!』

オーヴァン「ぐあああああっ!!」

二人の跳び蹴りは、きれいに決まった

サキ「はあっ!!」

アスラが使うロストウェポンと同じ日本刀で、サキはアスラの腹部を狙って突く
アスラはそれを紙一重で交わし、手に持っている双剣でサキの首を狙う

サキ「あまい!!」

サキは双剣を刀で受け止め、足でアスラの腹を蹴る

アスラ「かはっ・・・」

サキ「もう終わり?」

サキは突く構えをし、アスラが立ち直るのを待つ

アスラ「まだまだ、これからだよ!!」

アスラも双剣を構え直す

そして二人は同時に地面を蹴った

金属同士がぶつかる独特な音が響きわたる

少ししたら、二人は距離をおく

サキはまたアスラの懐へ近づき、攻撃する

サキ「流影閃!!」

アスラ「削三連!!」

二人の攻撃は相打ちかと思ったが、アスラの方が倒れた

サキ「お疲れさん・・・今日は一時間もったぞ」

アスラ「はあ、はあ、はあ・・・し、死ぬ・・・」

サキ「午後の訓練で一時間以上もったら、大鎌に行ってみるか？」

アスラ「うーん・・・一時間越せても、今日は双剣の方の訓練をするよ・・・大鎌は何があっても明日以降訓練する」

サキ「じゃ、昼ご飯食べに行こ」

アスラ「了解」

二人は一足先に食堂へ向かっていった

ハセヲ「天葬蓮華！」

ヴィータ「アイゼン！！」

GE Lost weapon form

GEはロストウェポンに切り替える

見た目は変わらないが、GE全体が赤い光を放っていた
ヴィータはそのままハセヲの武器とぶつかる

ハセヲ「相変わらず、物理攻撃は得意だなw」

ヴィータ「まあな・・・フェイト！デイド！」

フェイト「プラズマスマツシャー！！」

デイド「IS、ツインブレイズ・・・」

ハセヲの背後から二人は攻撃する

ハセヲ「光の矢よ、全てを打ち抜け・・・レイザス！！」

しかし、ハセヲは少しだけ使える魔法で二人の攻撃を防ぐ

ヴィータ「お前何でもありだな・・・」

ハセヲ「そんなことねえよ。それより１０分経った・・・今回も俺の勝ちw」

デイド「ハセヲはやはり強いですね」

フェイト「PK１００狩りをしたって、やっぱり本当みたいだね」

ハセヲ「おい・・・それ、いつ知った？」

フェイト「昨日の夜。サキさんが教えてくれたんだ」

ハセヲ「あいつ・・・」

ハセヲは頭を押さえる

ヴィータ「とりあえず、飯食いに行こうぜ」

機動六課隊舎上空

そこに二つの人がいた

「どうだ？残りの奴等のデータ、コピー出来そうか？」

「誰に言っただ？少し時間はいるが、出来るよ」

「残りの碑文達の過去・・・アトリやオーヴァン、クーンにエンデ
ュランス。あと朔望・・・こいつ等はいろいろあったからな」

「まあ、それなりにだけどな」

少女は”死の恐怖”と話しながら、作業を続ける

「早く殺してえな・・・あいつを殺して、俺は本物の”死の恐怖”
になる!!」

「変に干渉して、計画を狂わせたりするなよ」

「へっ、お前も内心は同じ事思ってたろ？」血に塗れた破壊者・
・ある意味、あんたの方が他の誰よりも危険だからな」

「クククツ・・・ある意味、か・・・そうかもなw」

「さて、俺も手伝ってやろうか？」

「なら、第二相のハッキングを頼むよ」

食堂

ここでは、いつものおかず取りは行っていなかった
皆疲労が溜まり、それ所ではないのだ

サキ「忍冬、アスラ以外のデータって取ってるか？」

忍冬「はい、見ますか？」

サキ「ああ、頼むよ」

忍冬はここ最近のアスラ以外の戦闘データを渡す

サキ「ふーん・・・皆優秀だね」

なのは「どこですか？」

はやて「はつきり言って、ロストウェポンはようもって30分が限界や」

エリオ「僕は15〜20分ぐらいですね」

ウエンディ「私も20分ぐらいが限界っすね」

サキ「そりゃそうよ。だって、今使用している状態は、リミッターを全部外しているからねw」

全「えええええええつ!？」

忍冬「まあ、予想は出来ていましたが・・・やはりそうでしたか」

サキ「あんまり時間もないからね・・・皆にはリミッター解除状態で訓練してもらってたんだ」

忍冬「リミッターをかけている状態なら、最低2時間はもつと思いますよ」

トーレ「リミッターを解除していても、パイ達には勝てなかった・・・やはりお前達は強いな」

パイ「そんなことないわよ・・・私達もリミッターを第四まで解除していたから」

ハセヲ「さすがにリミッター解除してなかったら、やられてた・・・」

サキ「てなわけで、一応一通りの訓練はおしまい！」

フェイト「じゃ、これからは何をするんですか？」

サキ「それは午後からのお楽しみ」ちなみに、これからは碑文使い達は皆のサポート役として訓練に参加するよ」

アトリ「回復は任せて下さいね！」

機動六課・ナンバーズ達が午後の訓練についていろいろ話し合っているとき、アスラは頭を机の上に乗せ寝ていた

午前の訓練で精神をほぼ使いきり、眠気がやってきたのだ

サキ「はあ・・・こんなんで、明日大鎌に移れるのか？」

忍冬「きつと大丈夫ですよ。主はやると決めたらやる人です・・・サキさんが一番よく分かっているはずですが？」

サキ「・・・そうだな」

アスラ「ん・・・ここ、何処？」

アスラは目が覚めたとき、草原に寝そべっていた周りを見ると、はやて達機動六課やナンバーズ達もいる

アスラ「私は食堂にいたはずなんだけど・・・」

忍冬「主、目が覚めたのですか？」

隣で忍冬が座っている

足元には何故か枕が置いてある

アスラ「えっと、みんな何やってんの？」

忍冬「お昼寝です」

アスラ「そう・・・って、昼寝!？」

よく見てみると、各自自分のMY枕を頭に敷いて寝ているごく僅かに例外もいるが

アトリ「ハセヲ・・・さん・・・」

エンデュランス「ハセヲ・・・」

ア・忍「・・・（――）」

一方のハセヲは・・・

ハセヲ「うう・・・悪かった、志乃・・・」

状況説明

アトリ ハセヲ エンデュランス

上のように並んで寝ています

ただし、アトリとエンデュランスはハセヲの腕に抱きついていきます

アスラ「・・・午後の訓練は？」

忍冬「サキさんが起きたら始めるそうです」

アスラ「そう・・・なら、私も二度寝する・・・」

忍冬「おやすみなさい、主・・・」

アスラは数分で寝ていた

access:19〜日常?〜(後書き)

アスラ「キャラ対話のコーナー」

忍冬「今回は・hack／／SIGNに出てくる”楚良^{そら}”さんです」

楚良「呼んでくれてありがとねん」

作者「楚良は最近調子は良い？」

楚良「あつたりまえ」僕ちんいつでも絶対調だみよん！」

忍冬「・・・この方が三崎さんって、本当ですか？」

作者「うん。正確に言えば、7年前の三崎亮のPCだよ」

アスラ「17にもなって、よくその喋り方が出来るね？」

作者「アスラと同じく」

ハセヲ「ほお・・・良い度胸してるなバカ作者!!」

作者「ハセヲオオオオツ!?!?いつの間に!?!?」

楚良「僕ちん放浪AIだからIDとかPCの入れ替えとか、普通の
人と違うんだよん！」

作者「出来ればこのまま”楚良”でいてほしいな」

ハセヲ「え？俺の方が良いか？なら・・・お前に死の恐怖を教えて
やる！！！」

作者「待てええええつ！暴力反対iiiiiiii！！！」

ハセヲ「死ね！環伐乱絶閃！！！」

作者「生きていたらまた次回会いましょう・・・ぎゃあああああ
っ！！！」

a c c e s s : 2 0 〱 開戦! 〱 (前書き)

今回はキャラ対談はありません。

access:20 開戦！

サキが提案したお昼寝が終わった後、各自はそれぞれの訓練場所へ移動していった

元々、昼寝場所は訓練場だけだね・・・

やっぱ、魔法って何でもありだね

で、ここは訓練場の一番端

周りにはサキ・アスラ・忍冬の三人以外いない

サキ「じゃ、二回戦と行きますか？」

アスラ「今日中に1時間保たせるのが最低ノルマ・・・でしょ？」

サキ「そう！今からは忍冬とユニゾンしながら模擬戦だよ」

アスラ「よろしくね、忍冬」

忍冬「了解。ユニゾン、イン！！」

アスラ「第零相、発動！！」

忍冬 変化刃、”調和ヲ保ツ光ト闇” セット！

アスラの手に銀の刀身が特徴の双剣が握られる

今は忍冬とユニゾン中なので、破壊衝動をすこしだけ抑えてくれている

サキ「それじゃ、始めよう！！」

サキは刀を持ち、突きの構えになる

アスラも双剣を構え、腰を低くする

二人はそのまま同時に飛び出し、首を狙う

サキの突きを双剣の片方で防ぎ、もう片方は首を狙って斬る

しかしサキは剣が当たる直前に後ろに飛び、アスラの攻撃を避ける

サキ「ほお．．．やりますなあ．．．」

アスラ「相変わらず余裕だね！！」

サキ「そんなことないよ．．．」

アスラ「どうだか！！」

二人はまた同時に走り出し、刃をぶつける

アスラ「旋風滅双刃！！」

サキ「無影閃斬！！」

カマイタチを纏った双剣を刀が連続で斬りつけ、相殺させる

サキはそのままアスラの懐に入り、アーツ・スペルを決める

サキ「夜叉車！！」

直撃したとサキは思った

アスラ「疾風双刃!!」

しかし、サキの目の前にアスラはおらず、サキの後ろから攻撃してきた

サキ「うわっ!!」

双剣の攻撃をなんとか避けるが、衝撃で後ろに飛ばされる

アスラ「はあ、はあ・・・」

忍冬 お見事です

アスラ「ありがと・・・」

土煙は次第に晴れていき、サキの姿が見えた

サキ「痛い・・・アスラ、手加減しろよ!」

アスラ「いや、無理だから」

サキ「それより、今さっきの反応は良かったよ!まさか・・・少し昔”を取り戻した?」

アスラ「っ！！・・・それは、無い。絶対に」

忍冬（主の昔・・・）

サキ「冗談だよ・・・”今”と”昔”は違う、だろ？」

アスラ「ああ・・・」

パイ「それじゃ、これからの訓練について説明するわね」

パイは手元のコントロールパネルを操作し、目の前にいくつかのAIDAを出す

パイ「今日の前にいるAIDAはもちろん偽物・・・ただし、ほとんど本物と変わらないわよ」

はやて「これからの訓練って・・・」

パイ「そう。これから貴方達にはAIDAと戦ってもらわね」

ノーヴェ「あたし、あのAIDAってやつ苦手なんだよね・・・」

デイド「ノーヴェが苦手って、かなり珍しいね」

セイン「そうだね～！でも、はつきり言って私も苦手だな」

パイ「苦手でも、戦わないといけない相手に変わりはないわ・・・”慣れるための訓練”と思ってくれて構わないわ」

ウェンディ「よし！ここまできたらやるしかないっすよ！！」

キャロ「パイさん、早速始めましょう！！」

パイ「わかったわ・・・皆、各自碑文ごとに集まって頂戴。各碑文ごとにAIDA一体倒すことが今回のノルマよ！」

クーン「危ないときには俺達が助っ人として何とかするよ！」

ハセヲ「偽物だからって油断すんなよ」

パイ「それでは・・・開始！！」

アスラ「はぁ・・・今何分？」

サキ「ちょうど一時間経過・・・今日のノルマは達成できたよ！」

忍冬「一度、休憩しますか？」

アスラ「してもいい？サキ姉ちゃん」

サキ「いいよ。というか、私もしたい・・・」

忍冬「ユニゾン、アウト」

忍冬はユニゾンを解除し、二人に他のメンバー達の訓練の様子を見せる

忍冬「今は第三までりみつたーを解除しています」

サキ「それでも・・・一体倒すのはしんどい、か・・・」

アスラ「みたいだね・・・どうするよ?」

サキ「あくまで、あれはThe Worldにいた時のAIDAなんだよねー」

忍冬「この世界にいるAIDAは進化していますからね・・・」

サキ「そう! たぶん、この世界のAIDAなら簡単に倒せると思う」

アスラ「うん・・・今度AIDAが現れたときに、データを取ろう」

サ・忍『うん/はい』

シャーリー「大変です!!」

突然シャーリーから通信が来た
隊舎ではアラートが鳴り響いている

サキ「状況は!?!」

シャーリー「A I D Aの大群がこっちに向かってきます！！ドッペルゲンガーらしきものもいます！！」

アスラと忍冬は碑文使い達に通信を繋ぐ

アスラ「ハセヲ！はやて隊長達やナンバーズの方は行けそう！？」

ハセヲ「A I D A相手なら何とかいけるぞ！」

パイ「私達は半分はA I D Aの方、もう一方はドッペルゲンガーの方に分かれるわ！！アスラとサキさんはどうする！？」

サキ「私はドッペルゲンガーの方に行く」

アスラ「A I D Aの方に行く！！」

パイ「シャーリーさん、出現場所の座標を教えてください」

シャーリー「“転移装置”を使うんですね・・・今から送ります」

転移装置とは、The Worldにあったものだ

転送できる範囲は限られているが、座標さえ分かれば何処へでも行ける

サキとシャーリーが昨日作り上げた

サキ「おおー！早速使ったな！！」

アスラ「いつの間につつたの！？」

忍冬「主、気にしたら終わりですよ・・・」

シャーリー「座標入力完了！転送開始！！」

訓練場にいた全ての人達が現場へ転送されていった

「クククツ・・・さて、私はどっちに来るかな？」

血に塗れた破壊者はAIDAの大群の中にいた
彼女の呼び名”血に塗れた破壊者”とはThe Worldで知っている者はほばいない通り名だ

あの通り名を知っているのは

碑文使い達・黄昏の旅団メンバー・フィロ・揺光
ざっとこのくらいのメンバーが知っている

「早く来い、アスラ・・・もう一度、お前を昔と同じにしてやるから・・・」

血に塗れた破壊者は死の恐怖と通信を繋ぐ

「何だ？お前から通信って・・・今日は嵐になるぜw」

「いいか、目的を忘れるなよ・・・あいつ等を殺してしまつては、意味がないからな」

「分かつてる・・・やっとこの日が来た・・・どれだけ待ち望んだことか！！」

「・・・殺すなよ?」

「へい、へい。殺さねえよ」

二人が話していると、目的の人物達が現れた

「おっ、来た来た!!」

「・・・どうやら、あたし達の望んでいた人物が来たみたいだな」

「ああ・・・あいつに感謝しねえとな!!」

死の恐怖はそれを言った後、通信を切った

その後少しすると遠くから爆発音が微かに聞こえた

「さあ、悲劇の始まりだ!!」

戦いの幕は上がった

物語は進み出した

もう、戻ることは出来ない・・・

a c c e s s : 2 0 〱 開戦！〱 (後書き)

はい！第20話です！！

記念すべきこの話をこんなグダグダで終わっても良いのか！？

ま、終わったんで・・・気にしない！ということ・・・

アスラ「気にするわ、ボケっ！！」

いだっ！！

あいつ、岩石投げやがった！！

自分が死んだらこの小説はこの微妙な状態で終わるという事に気付
よ！！

まず、後書きのキャラ対話を楽しみにしていた皆様・・・

今回はお休みさせていただきます！

本当にすみません！！

と言うか、ここまで読んでくれる人ってちゃんといろのか！？
楽しみにしている人なんていないような・・・

次に、第二章前編・・・終わりました

早っ！と思いました？

はい、早いです。

作者自身も早っ！と思っております。

次回からは第二章後編に入ります。

そして最後に、いつもこんな小説を読んで下さっている皆様・・・
本当にありがとうございます！！

これからも頑張りますので、よろしく願います！！

次回から、もつと皆様に分かりやすく書くように努力します！
しかも、戦闘シーンを入れるので、グダグダにならないよう頑張ります。

もし、不愉快な点や改善点がありましたら教えていただけるとありがたいです。

では、また次回！

access:21 過去の自分

はやて「今回の目的は、AIDA及びドッペルゲンガーの戦滅や・
・みんな、気合い入れていこ！」

『はい!!』

サキ「無茶しないように! いざというときは私やアスラ、碑文使いの皆がいるからね!」

AIDAの方には機動六課フォード陣・ナンバーズ・アスラ・アトリ・朔望・オーヴァン

ドッペルゲンガーの方には機動六課隊長陣・サキ・ハセヲ・クーン・エンデュランス・パイ

八咫は隊舎の方でシャマル・ザフィーラと六課本部を守る役割になっている

はやて「ほな、機動六課・・・出動!!」

『了解!!』

こうして、戦いは始まった

アスラ「忍冬! 第六相、発動!!」

忍冬 了解。刀剣”誘惑スル薔薇ノ雫”セット

今、アスラは忍冬とユニゾン中だ
最近の訓練のおかげで、八相のロストウェポンは使用してもほとんど破壊衝動は無い

アスラ「壱之太刀・垂月!!」

空高くAIDAを斬り上げる

2、3体のAIDAを破壊した後、次のAIDAを斬りつける

忍冬 フォアードやナンバーズの皆さんは、少しずつですが順調に倒して行っていますよ

アスラ「そっか・・・なら、私がもつと倒していけば、みんなは楽になるよね?」

忍冬 そうですね

アスラは目の前にいきなり現れたAIDAを一撃で倒す
その後、突きの構えをとり、少し先にいるAIDAへと突っ込む
4、5体ぐらいを突いた後、最後の1体だけは突き抜けることが出来なかった

アスラ「手?・・・まさか!!」

忍冬 主!後方にAIDA反応!!

アスラ「ちっ、夜叉車!!」

後方から襲ってきたAIDAを斬り、そのまま”手”が出ているAIDAから距離をとる

忍冬 あれは、本当にAIDA？

アスラ「いや、違う・・・あれはこの前の”黒い影”だ！」

忍冬 主の鍵をコピーしていった？

アスラ「うん・・・厄介な敵の登場だね」

黒い影は色をドンドン黒くしていき、人型の”闇”となった
その闇は片手に剣を作り出し、アスラに斬りかかった

アスラは間一髪で避けた
だが少し掠れたため、右腕が少し切れ、血が出ている

アスラ（っ！？今さっき、攻撃が速くて見えなかった！！）

忍冬 主！大丈夫ですか！？

アスラ「大丈夫、だよ・・・」

アスラはロストウェポンを構え直す
闇も刀を構え直し、アスラと向き合う

アスラ「おまえは一体何者だ！！」

闇に問いかけるが、返事はない

アスラ「お前は・・・一体何だ？」

ガキンッ！

刃同士がぶつかる

先ほど、アスラの言葉を聞いた瞬間に闇は攻撃してきた
アスラの首を狙って

アスラ「流影閃！！」

アスラは鋭い突きを放つ
しかし、闇は刀で身を守り、反撃する

アスラ「忍冬・・・第一相、発動」

忍冬 大鎌、”死ヲ刻ム影” セット！

刀剣から大鎌に変える
すると、闇も刀から鎌に武器を変えた
鎌全体が黒いのでどんな鎌かは分かりにくい、見た目は”死ヲ刻
ム影”と全く同じだった

アスラ「ドッペルゲンガー・・・でもないよな？」

忍冬 少し不気味ですね

アスラ「相手が誰であろうと、倒す！！」

アスラは闇との距離を一気に縮め、斬る

アスラ「環伐式閃！！」

ふつつの相手なら直撃か少し掠るぐらいだが、今回は違った
闇はアスラと同じ技を繰り出し、相殺させた

しかも相殺した後すぐにアスラに次の攻撃を放った

アスラ「がつー!!」

忍冬 主!!

そして、アスラは攻撃を直で食らい、そのまま飛ばされていった

忍冬 主、しっかりして下さい!!

アスラ「今は、きつかったね・・・リプス」

回復魔法で傷の応急処置をする

アスラ「あれ・・・昔の私の戦い方とよく似てるんだよね・・・」

忍冬 昔?

アスラ「PKKをした頃とそっくりなんだよ・・・鎌の使い回しとかさ・・・」

「もう、いいよな」

闇はいきなり呟いた後、人型を昔の”アスラ”へと変化させた

もちろん、今のXthフォームではなく、2ndフォームだ

アスラ「えっ・・・」

「久しぶりだな、”アスラ”」

アスラは過去の自分と今、出会った

クーン「おいおい、随分大量にいるな」

ハセヲ「敵だつてことに変わりはないよ」

パイ「はやてさん達は私達の支援を頼めるかしら？」

はやて「もともと、うちは超長距離型の攻撃が中心だから」

なのは「わたしは中距離だから、後方の支援の方が得意かな？」

ヴィータ「あたしとシグナムは接近戦が得意分野だ」

シグナム「私は敵を斬ることしか出来ないからな」

フェイト「パイさん、私達はどうしたらいいですか？」

パイ「なら、一緒に前衛で戦ってもらえる？」

フェイト「ありがとうございます」

ハセヲ「パイ、俺とクーンで先にいる奴等を倒してくる！」

クーン「こっちはエンデュランスと一緒に頼むぞ！」

二人はそのまま別の場所に移動していく

ハセヲ「俺はこっちをやるから、クーンは少し向こうを頼む」

クーン「無茶するなよ、ハセヲ？」

ハセヲ「お母さんかw？」

クーンはハセヲから離れていった

ハセヲ「さて・・・出てきやがれ！てめえがいんのは分かってるんだよー！！」

ハセヲは目の前にいるドツペルゲンガー達に向かって叫ぶ
しかし、返事はない

ハセヲ「ちっ・・・スケイス、行くぞ」

スケイス あいよ。いつでもどーぞw

ハセヲはいつもの双銃ではなく、ロストウェポンの大鎌を装備する
敵は、ハセヲが武器を装備したのを見ると一気に襲いかかった

ハセヲ「吹っ飛べ！環伐乱絶閃！！」

これで4、5体のドツペルゲンガーが倒れた

ハセヲはそんなことを気にせず、に次の相手を斬りに行く

「やつと会えたなあ？」

そして、いきなり後ろから攻撃された

ハセヲはとっさにガードしたが、攻撃の勢いで少し吹き飛ばされた

「やっぱ・・・お前、弱くなったな」

ハセヲ「誰だ、てめえ・・・」

黒い影はそのまま人の形になり、「死の恐怖」となった
その姿は3rdフォームで、死神とも言われた姿だ

ハセヲ「お前っ・・・一体、何者だ!？」

「俺は”死の恐怖・ハセヲ”・・・過去のお前だ」

「どうした？お前の実力はそんなものだったか？」

アスラ「うつせーよ、ハゲ!！」

アスラは自分の過去”血に塗れた破壊者”と戦っていた
状況はアスラの方が圧されている
すると、突然過去のアスラは攻撃をやめた

アスラ（何をするつもりだ？）

「お前、やはり弱くなってしまったんだな・・・」

過去のアスラは少し悲しそうな表情でアスラを見おろす
だがその表情は、悲しさと同じくらいの怒りを感じる表情でもあった

アスラ「あなたは・・・昔の私”なんだな？」

「ご名答・・・力の差がよく分かるだろ？昔のお前はこんなにも強かったんだよ・・・」

アスラ「悪いが、私は今の自分の方が好きだ。たとえば、弱くなっていたとしても」

「・・・そうか・・・なら、もう一度あの”悲劇”を起こしてやるよ」

アスラの過去はアスラの前にある映像を映す

アスラ「これは・・・はやてさん達か!？」

そこに映っているのはドッペルゲンガーを倒しに行った隊長陣が映っていた

「お前の大切な者は、これだけじゃないよな？」

他にも画面を出す

アスラと離れたところで戦っているフォアード陣やナンバーズ・・・そして碑文使い

「まず、どれから”壊してほしい”？」

アスラ「あっ・・・まさか!！」

「おっと、お前はそこで見ている役だろ？前みたいにな!！」

アスラはバインドで拘束される

「お前は、また・・・何も出来ないんだよ」

アトリ「アスラさん!？」

キヤロ「何かあったんですか？」

アトリ「通信が、つながらない・・・ハセヲさんも!！」

エリオ「アトリさん!！」

アトリは背後にいたAIDAの攻撃に当たる
すぐさま反撃をする

アトリ「風よ、吹き荒れる・・・ザンローム!!」

竜巻がAIDAを飲み込み、そして消滅した

アトリ（AIDAの数が増えてきている・・・嫌な予感がします!）

イニス アトリ、今は目の前にいるAIDAに集中しましょう

アトリ「うん・・・ありがとう、イニス」

パイ「ハセヲ? 返事しなさい!!」

パイ達ドッペルゲンガーの方も数が増えてきた
何体も数え切れなくらい倒したが、数は減らずにむしろ増えていた

サキ「パイ・・・アスラとも通信がつかない」

パイ「どうなっているの」

なのは「あの! 敵の数、増えていますよね!?」

ヴィータ「一体どうなってんだよ!!」

パイ「エンデュランス、クーンをここに呼んで!!」

エンデュランス「・・・今、来たよ」

クーン「パイ！！ハセヲと通信がつながらねえ！！」

パイ「そんなことは分かってるわよ！！」

シグナム「つつ！？しまった！！」

シグナムはなのはのドッペルゲンガーのバインドで身動きが出来なくなっていた

” まずは、あんたからだ・・・”

そんな声が響いた後、シグナムから血が吹き出した

ヴィータ「シグナム！！！！」

バインドが解け、シグナムはそのまま落ちていったが、なのはとフエイトが何とか防いだ

なのは「ひどい傷・・・」

フエイト「肩から斬られたみたい・・・でも、斬った人なんて見え

なかった・・・」

パイ「・・・オリプス」

シグナムは翠色の光に包まれ、傷口は塞がった
それにより、血も止まった

「もう終わりか？お前は昔の俺に負けて終わるのか？」

ハセヲ「ちっ・・・」

ハセヲと死の恐怖との戦い
状況は、ハセヲが圧されていた

「そろそろ、血に塗れた破壊者が次の段階に進み始めた頃だろうな」

ハセヲ「次の段階？」

「俺等の目的・・・それは、アスラをもう一度”闇”に染めること
だ」

ハセヲ「もう一度、だと！？」

「お前が旅団の奴等と活動している頃、あいつはPKKとして恐れ
られていた・・・これは知ってるよな？」

ハセヲ「ああ・・・」

「あの闇をもう一度復活させ、血に塗れた破壊者は真の破壊者になる・・・俺も、お前を殺して、真の死の恐怖になる・・・」

ハセヲ「真の死の恐怖ね・・・そんなことになるために、俺は死にたくねえし・・・つか、絶対死なねえよ！！」

「お前を殺すのは今日じゃねえ・・・今日はアスラの心を壊しに来たんだよ」

アスラ「お前・・・シグナムに何をした！！」

アスラは過去の自分が見せる映像をただ見ることしかできなかった

「今日の目的はお前の心を壊すこと・・・物語は、まだ始まったばかりだぜ？」

アスラ「・・・・・・・・」

「自分の力の無さをよく知るいい機会さ・・・」

画面の向こうでは、ノーヴェやディエチが見えない刃物で斬りつけられ、倒れていた

他にも、スバルやティアナも至るところに切り傷がある

「さて、次は誰にしようかな？双子の碑文使いにしようかな？」

アスラ「・・・やめて、くれ・・・」

「どうせ全員斬るからな・・・次はあの双子にしようか」

画面を見ると、朔と望が互いに守り合いながら戦っていた
しかし、やはり見えない刃物で背中を大きく斬られた
二人の周りには小さな血の池が出来始めていた
止血をするために、アトリが回復魔法で傷口を防ぎ、血を止めたが・
・二人は意識がない状態だった

「斬るだけじゃつまらないしな・・・AIDAに感染させて、味方
同士の戦いにしてもよさそうだな・・・」

アスラ「・・・やめ、ろ！」

「あのチビツコ集団を斬るのもいいな・・・」

血に塗れた破壊者は次々と斬り、血の世界を造り始めていた
その表情はいつだって無表情
しかし、彼女は殺しを楽しんでいた

アスラ「忍冬・・・ユニゾン、アウト・・・」

忍冬「主！？一体何を！？」

「クククツ・・・少しは昔に戻ってくれたみたいだな」

先ほどのバインドをアスラはほとんど解いていた

アスラ「出力リミッター、第5まで解除」

そして、魔力を上げて残りのバインドを解く

そして、”調和ヲ保ツ光ト闇”を装備する
形状は、まだ日本刀だ

忍冬「主！零相を使うなら、ユニゾンしないと！！」

アスラ「ごめん・・・忍冬に、この感情を知ってほしくない・・・」

「あのやり方は良かったみたいだな・・・」

アスラ「忍冬は、アトリ達の所に行ってくれ・・・私は、こいつと戦う」

忍冬「・・・分かりました・・・くれぐれも”大鎌”は使わないで下さいよ！！」

アスラ「ああ、使わないよ」

アスラの返事を聞いてから、忍冬はアトリ達の元へ向かっていった
そして、過去と今のアスラが向き合う

「二回戦と行くか？」

アスラ「・・・覚悟は出来ているな？」

「ククツ！待っていた、お前を！！今のお前となら、戦いを楽しめ
そうだ！！」

アスラの目は紅く、血よりも紅色だった

そして、一筋の涙を流しながら過去の自分を見つめていた

access:21 過去の自分 (後書き)

作者「今回のゲストはサキと忍冬だよ」

忍冬「普段からよく出ているのですが・・・」

サキ「まあ・・・さすがにアスラを出すわけにはいかないか・・・」

作者「察して下さい」

忍冬「今回は一気に話が進みましたね」

サキ「変に終わらないことだけを祈るよ・・・」

作者「いつもよりも頑張って書いたんだけど・・・あまり変わってないよね」

サキ「むしろ、余計に変になったかもなw」

作者「そ、そんなバカな!!」

忍冬「というか、主やハセヲさんが殺されそうなんですけど!?!」

作者「いや、この戦いでは誰も死なないよ?ま、最後まで死なせるつもりなんかないけど!」

サキ「ふーん・・・アスラを殺すようなら、今私がここで作者を殺すところだった」

作者「やめて・・・本当、まだ死ねないからね？」

忍冬「後もう一つ、第三章ってやるんですか？」

作者「もちろん！今の話はなかなか思いつかないのに、先の話はドンドン思いつくよ！！」

サキ「この、どアホ！！」

作者「ぬわああああっ！何すんだ！！」

忍冬「先のことを考える余裕があるなら、今を考えなさい！！」

作者「すみませんでしたああああっ！！」

a c c e s s : 2 2 } 怒り、終わり・・・そして決意（前書き）

遅くなりました・・・

access:22「怒り、終わり・・・そして決意」

「さあ、来い！今のお前なら、私と対等に戦える！！」

アスラは無言で瞬時に移動し、血に塗れた破壊者の懐へ入り込む
そして、そのまま斬る

血に塗れた破壊者の方もとっさに反応し、刀でアスラの攻撃を受け
流す

「やはり、お前はこうでないとな・・・」

アスラ「あんたがまた私の大切なものを奪うなら・・・今ここであ
んたを倒すだけだ」

「そんなに無茶してもいいのか？その目・・・破壊衝動が強いほど
紅くなる。見たところ、かなりたまっているみたいだな？」

アスラ「人のことを心配する余裕があるのか？」

アスラはまた一瞬で移動する

そして、刀は振り抜かれていた

それに気づいたときには遅く、血が吹き出していた

「ん・・・お見事、だな」

アスラ「まだあんたを殺してはいない・・・痛めつけていない」

「クククツ、本当に私に勝てるのか・・・気になるところだな」

死の恐怖とハセヲの戦い
それは決着が着きかけていた

「まだまだ、今のお前じゃ俺は倒せねえよ！」

ハセヲ「うるせえ・・・昔の自分に負けるわけには、いかねえんだ
よ！！」

ハセヲは鎌を持ち直し、死の恐怖へと突っ込んで行く

「もう・・・終幕だな」

死の恐怖はハセヲをバインドで拘束する

ハセヲ「なっ！？」

「今日はもう終わりだ・・・碑文も集まったしな」

死の恐怖はハセヲの目の前に別の場所にいたはずの碑文使い達を出
現させる

もちろん、全員バインドで拘束されていた
そして、隣には碑文使い達の”影”がいた

ハセヲ「一体、何するつもりだ？」

「今回の本当の目的・・・ま、アスラの方も嘘じゃねえよ？だが、本命はこっちだったんだよ！！」

ハセヲ「俺達・・・碑文使いか？」

「そうだ。というわけで、一緒に来てもらっぜ・・・ハセヲ」

死の恐怖のその言葉を聞いた後、ハセヲの意識は途切れた

機動六課隊舎前付近

AIDAとドッペルゲンガーを倒しに行っていた者達は全員そこにいた

忍冬も一緒にいる

忍冬「転送、された！？」

キャロ「あれ・・・アトリさん達がいません！！」

なのは「サキさんやパイさんもないよ！！」

隊舎付近にいるのは機動六課メンバー・ナンバーズそして忍冬だけだった

碑文使い八人とアスラ・サキはこの場にいなかった

忍冬「主……一体どこへ……それに、他の方達も」

忍冬はまず、自分がアスラから離れる前にいた所にいないか探し始めた

すると、彼女はすぐに見つかった

忍冬「主!!」

アスラと血に塗れた破壊者は、最初と同じ場所にいた

忍冬はアスラを見つけた後残りのメンバーを探したが、見つかることはなかった

アスラ「無双隼落とし!!」

「お!今のは危ないっ!!」

血に塗れた破壊者は、戦いを心から楽しんでいた

「そんなに失うのが怖いかな?」

アスラ「お前は”あの時”の私なんだろう?……分かっているはずだが?」

「クククツ、そうだな……分かるからこそおもしろいんだよ!!」

アスラ「なら……ここで消えてくれ!!」

アスラはロストウェポンを”双剣”から”大鎌”に変える
目の色は薄い紅から濃い紅へと変わる

「へえ……それを使うのか？あの融合のやつは”使っな”と言っ
ていたはずだが？」

血に塗れた破壊者は拘束した”サキ”をこの場に出す

アスラ「サキ……姉ちゃん!？」

「今日はもう終幕だ……また会おう、アスラ」

血に塗れた破壊者はサキを連れて闇に消えていった

アスラ「サキ姉を返せえ————!!!!!!」

戦いは終わった

一人の少女の心に大きな傷を残して・・・

ティアナ「アスラ・・・ご飯、持ってきたわよ」

アスラ「・・・そこに、置いておいて」

昨日の戦いの後、アスラは隊舎に帰ってきてからずっと部屋にこもっていた

ティアナが食事を持ってきてくれるが、ほとんど口にはしていない

ティアナ「いい加減食べないと、体壊すわよ？」

アスラ「気にしないでいい・・・前もそうだったから」

ティアナ「前？・・・アスラ！それ、どういう事！？」

ティアナは扉を開け、中に入る

今アスラがいる部屋は、サキ達が使っていた部屋だ

アスラ「悪いけど・・・今は一人にしてくれる？」

ティアナ「嫌よ。今のあんた、何するか分からないもの」

アスラ「ティアナ・・・」

ティアナ「それに、私はまだ言っていないんだから!!」

アスラ「・・・何を？」

ティアナ「ごめん!!・・・そして、ありがとう」

アスラ「え？」

ティアナ「私のAIDAが暴走した事よ・・・本当に、悪かったわね」

アスラ「ん・・・」

ティアナ「そして、あんたに救われた・・・本当にありがとう」

アスラ「私は・・・ティアナを救ってあげたような事はしてない」

ティアナは無言でアスラの所まで行き、優しく抱きしめる

ティアナ「あんたも・・・一人で抱え込まないでよ・・・私達は仲間”でしょ？」

アスラ「!!!」

ティアナ「今のあんたは、昔の私と同じなのよ」

アスラ「そう、かもね・・・」

ティアナ「ちゃんとご飯食べなさいよ？」

最後にそれだけ言って、ティアナは部屋から出ていった

アスラ「・・・」ありがとう”か・・・私には言われることのない言葉だと思っていたんだけどな」

スバル「ティア!!アスラ、どうだった？」

ティアナ「別に、変化なしね」

キャロ「前アトリさんから聞いたんですけど・・・アスラ姉さん、昔”血に染まる者”って言う通り名のPKKだったそうです・・・」

エリオ「PKKって・・・確かハセヲ兄さんもPKKでしたよね？」

ティアナ「”死の恐怖”でしょ？」

スバル「私もパイさんから聞いた」

キャロ「アスラ姉さんとハセヲ兄さん・・・人一倍、大切な者を失うのを恐れているそうです」

忍冬「主は・・・頼る事を知りませんから・・・」

ティアナ「なのはさんやフェイトさん・・・八神部隊長まで!!」

四人の前には忍冬と、隊長達三人がいた

忍冬「私はこの世界の者ですから・・・主の過去についてはあまり知らないんです・・・」

はやて「パートナーの忍冬も知らんって事は・・・余程知られたくないみたいやな」

なのは「私達も、何とかしてあげたいんだけどな・・・」

フェイト「今の私達には・・・力がない・・・」

フェイトの言葉で、一同は少し黙ってしまっ

スバル「パイさん達がないこの状況でAIDAが来たりしたら・・・」

ティアナ「大量の負傷者・・・感染者も大量に出るでしょうね」

エリオ「そういえば・・・フェイトさん。シグナムさんの方はどうですか？」

フェイト「パイさんのお陰で傷はほとんど塞がっている・・・大丈夫だよ」

キャロ「本当に、何も出来ないまま終わっちゃうの？」

忍冬はその場にいるメンバー一人一人に個人の戦闘データを渡す

忍冬「私達が今すべき事は、戦う力を得ること！今お渡ししたデータは・・・サキさんからのです」

はやて「・・・忍冬の言う通りや!!」

なのは「必ず、助けだそう!!」

全『はいっ!!』

アスラ「随分、盛り上がっているね」

全『アスラ!!!!』

アスラ「もう、逃げるのはやめる・・・みんな聞いて。私の過去を・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9947v/>

.hack//G.U.【Next Story】

2011年10月12日14時13分発行